

陽堂文庫

特265

819

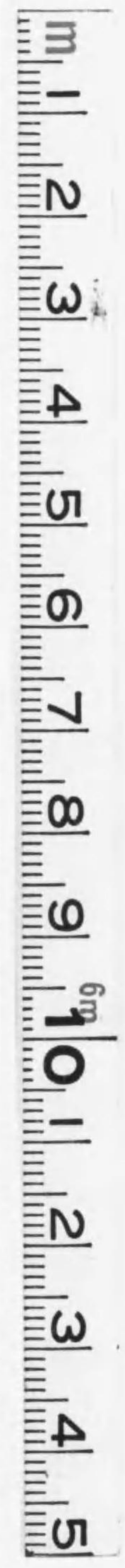
1031

ヂヤツク

第三部

ドオデ一作

八木さわ子譯



始



185

特265
819

庫文堂陽春

—1031—

ク ツ ヤ チ

部三第

作 - デ オ ド

譯 子 わ さ 木 八



堂陽春



ヂヤツク

第三部



照參文本

一セシル

『がそれは名譽毀損だ、お前あのヒルスの悪黨を訴へてやる權利がある。五年間も俺にお前を泥棒だと思はせて置いたのだ……畜生奴！ 其の事を言ひにわざ／＼俺の所へ遣つて來たのだ。それにお前の潔白が解つて、夫を證明されたのに言ひにも來ない。あれほど立派な言葉で證明されてゐるのだ。さあ、もう一度手帖を見せて御覽。』

『はい、リザアルさん。』

『堂々たる物だ。之以上の言葉は無い。この支配人は解つた人間だ……あゝ、實際俺は満足だ。俺の生徒が悪黨になつたのかと思ふともう耐らなくなる事があつたのだ……それに若しもアルシヤンボウの家で逢はなかつたら、もつと／＼さう信じてゐなければならなかつたのだな……』

成程ムツシウ・リザアルが彼の昔の生徒を見出したのは森林監視人の小屋だつた。

十日前オーネットに落ちついてからといふもの、ヂヤツクはさながら冥想の婆羅門僧のやうな生活をしてゐたので、沈黙の裡に身をひたし、名残りのほがらかな日に酔ひつゝ、其の温い日光を身内に感じ、森林の生きた静寂の裡に身を置くためのほか家を出る事がなかつた。木々は其の樹液を、土は其の生氣を彼に與へた。そして眠つてゐる思ひを喚び覺すために額を振りながら、彼はなごやかな光の秋が

遠くの彼方に迄望ませてゐるところの高く澄んだきよらかな空の下で、病人じみたといふので無かつたら囚人らしい醜さを少しづつ失つて行くやうな気がするのだつた。

彼が往來をするのは、其のよい思出を決して忘れる事のなかつたアルシャンボウ夫婦だけだつた。女房は、永い事彼女が親切に忠實に仕へてゐた自分の母親の事を思ひ出させ、田野神のやうに森の木の仕事にばかり没頭してゐる野生の儘の無口な良人は、かよい彼の體を鍛へる助けとなつたあの樂しかつた過去の散歩を思ひ出させた。彼は此の二人の孤獨者の間にあつて、昔の少年時代に還つたのだ。女房は彼のために麵麩や其の他の食料品を買ひ整へる役を勤め、そして時々家に歸るのが面倒になつた彼は、彼等の籠の火で河かしら簡単な食物を自分で拵へた。

彼は番人と並んで人口の腰掛に腰をかけて煙草を吸ふのだ。彼等はめつたに彼に話しかけなかつたが、ひよる長く瘦せて、頬骨のあたりを火のやうに赤くしてゐる彼を見ながら、ペール・アルシャンボウは、穀象に蝕まれた森の山毛櫨を眺める時にするやうに悲しさうに頭を振るのだつた。

其のチャックが友人の所に來た時、番人は關節リウマチスで床に就いてゐた。年に二三回さうした激しい發作が起るので、この巨人を取つて投げ、ちやうど雷火に打たれた巨木のやうにさせるのだ。彼の枕許にはポケットに書物や新聞を詰め込んだ長いフロツクコートを着た小男が、帽子を冠らずに美しい白毛頭を亂して突立つてゐた。ムツシウ・リヴァルだつた。

4 顔を合はせた最初は工合が悪るかつた。チャックは、悲しくも的中した彼の豫言を思ひ出してこの老

5 醫師の前に居る事が恥しかつた。ムツシウ・リヴァルはその當惑の様子を竊盜事件に結び付けて、自分はすつかり冷淡に構へ込んでゐた。が此の青年の憫むべき缺陷が何物にも増して、彼の心を打たずには置かなかつた。やがて彼等は一緒に家を出た。そして森の中の緑の小徑から小徑を傳つて語りながら歸つて來た。小徑から小徑へと話の筋は次第に立つて行つて、森のはづれ迄來た時にはドクツールの思ひ違ひ、誤解も解けてしまつた。

ムツシウ・リヴァルは勇み立つた。鐵工所の支配人が、誤つて受けた嫌疑に就いて證明を書いた職工手帖の頁を何度も繰返した。

『さうだ！ お前は此の土地に落付いたのだから、先よりもつと度々來なくつちやいけない。第一それは是非とも必要だ。あの人達は馬を野原に放つやうにお前を森の中によこした。が夫だけでは十分で無い。お前には養生、大した養生が必要だ。之から寒くなつては格別だ。エチオルはニースとはちがふからな……知つてゐる通り、お前は先に家の中で大持てだつた。家はいつも同じ事だ。たゞ家内だけが足りなくなつたのだ。彼女は四年前心配と失望で死んでしまつたよ。何しろ我々の不幸からといふもの彼女^めは少しも氣の晴れる事は無かつたからな、が仕合せと孫娘が代りになつてくれてゐる。若しもあの子が居なかつたら、俺はどうなつて居るかも知れない。セシルが帳面から、藥局からすつかりやつてゐる。お前に逢つて、あの子がどんなに喜ぶか！ さあ！ 何時來るね？』

ル シ セ
チャックは答へるよりも先づためらつた。彼の考へてゐる事が解つたやうに、ムツシウ・リヴァルは

チ 笑ひながら言ひ足した。

「いゝかい、彼女に逢ふにはお前手帖を持つて来ないでも大丈夫なのだよ。俺はあの子にも、お婆さんにも、何も話しはしないのだ。二人ともお前をどんなに愛してゐたやら。あのやうな事を言つたら、どれほど心配したか知れやしない……お前を悪くなど少しも思つてゐない……だから安心して逢ひに来られるのだ。ねえ！ 今日晩飯と一緒に食べに来るには少し涼し過ぎる。霧がお前にはよくない。だが明日晝飯に待つてゐる。あの頃と同じ事だ。往診次第で十二時か二時か、三時になるか解らない。そこどころか前よりももつと悪い。と云ふのは俺の馬の先生、年を取るにしたがつてだん／＼鈍間に、だんだん變物になつて行くのだ……毎日俺と一緒に話の種ばかり作つてゐるのさ……ほら、お前の所まで来た、早くお歸り……明日間違ひ無く！ きつとだよ、でなければ俺が迎へに来る。」

蔓が一面にからんだ入口の戸を閉めた時、チャックは妙な感じがした、ドクツールと小さい女友達の間に挟つて、永い事馬車を走らせてから、「彼」が塔の中で仕事をしてゐる間を森林監視人の女房を相手に食事の支度をしてゐる母親の許に歸つて行く、さうした嘗ての日の歸宅と云つたやうな氣がしたのだ。さうした彼の空想を一層深いものにさせたのは、あまり量ばるので巴里へ持つて行かずにあつたダルクヤントンの半身像が、日時計の針と云つた風に動いてゐる其の影を周圍に落しながら、錯びていたましく相變らず芝生の上に突立つてゐた事だ。

6 彼はストーブに葡萄の枯枝をもやした火の前で夕方を過した。何故なら焚部屋がすっかり寒がりにし

7 てしまつたのだ。それで以前楽しい野原の遠足から歸つた時の種々な記憶が、家中に蔽ひかぶさつてゐる悲哀と壓迫をしばし彼に感じさせなかつたと同じやうに、この夜、ムツシウ・リヴァルとの遭遇、一度口に出たセシルといふ名前が彼の心の中に久しぶりの幸福をもたらし、やがて夫は眠りの中に迄彼に隨つた。

翌日の正午、彼はリヴァルの家の鈴を鳴らしてゐた。老人が言つた通り、相變らず普請をしかけたままの家は少しも變つてゐず、雨除けの庇は硝子の張られるのを待ちながら、一日一日と錆を増してゐた。

『旦那様はまだお歸りになりません……お嬢さんは薬部屋です。』

戸を開けに来た小さな女中が言つた。彼女は元の忠實な老女の後に來たのだ。以前のテルヌーヴ種に代つて、犬小舎の中で吠えてゐる若い犬迄が、命の無い物の方が生きた物、少くとも彼等の屬してゐる生物より以上に永續するものである事を證據立てゝゐた。

チャックは薬部屋、嘗て其處で二人がさんざ遊んだあの廣い部屋に上つて行つた。女友達に逢ふ待ち遠しさにはげしく戸を叩いた彼の心の中の彼女は昔の儘の少女なので、ドクツールがさもいとしげに言ひ言ひした孫娘といふ言葉が八つの身長をした彼女を彼の眼に描き出してゐたのだ。

「御這入りなさい、チャックさん。」

ル シ セ
這入らうとする代りに、チャックは異常な感激と恐怖に身を震はせはじめた。

『お這入りなさい……』

同じ聲、セシルの聲が繰返した。がそれは大人びて朗らかに、昔よりはよりゆつたりと、よりやさしく、より深味があつた。

いきなり戸が開いた。そして光の中に包まれたチャックは闔の上に立つて、薄色の長着に水色のカシミヤの上着、しとやかであると同時に誇りを持った乳色の額の上に、後光のやうにかぶつた髪の毛を輝きゆるがしてゐたこの若い娘の妙なる姿を、幻ではないかと考へた。あゝ！ 若しも麗しい少女の眼、薄墨色のつゞましやかな眼が明瞭に無邪氣にかう言はなかつたら、『今日は、チャック！ 私よ、セシルよ……そんなに怖がらなくてもいゝのよ。』そして彼の手の中に置かれた小さな手が八月十五日の獻金の時に、彼の心にまでしみわたつたあの優しい温かさを思ひ出させなかつたら、彼はどんなに心が隠したゞらう。

「貴方は随分苦勞なさつたのですつてね、チャックさん、お祖父さんがさう言ひましたわ——彼女は胸をつまらせながら彼を凝視つてゐた——私もいろんな心配があつたのです……お祖母さんが死にましたのよ、お祖母さんは貴方が大好きだつたのですわ……私達は始終貴方の噂をしてゐましたの……」

口を利くのはセシルだけだつた。彼は彼女の前に腰をかけてつく／＼と眺めてゐた。丈が高くて、ものごしがしとやかで、そして大層率直だつた。その時彼女は、昔マダム・リヴァルが書いてゐた古いテールブルに凭りかゝつて、彼に語るために軽く頭をうつむけてゐるのがちやうど屋根の縁で囀つてゐる燕

といった様子だ。

チャックは彼の母親を、同じ程に美しいものに眺め、心から見とれた事を思ひ出した。がセシルの姿は、何と名付けやうもない花の束と言はうか、聖き春の香氣と言はうか、健康、生氣、純潔といふ物がみちあふれてゐたので、シャロットのあらゆる嬌態、快活な笑ひや、わざとらしい身振とは全くかけへだてたものだつた。

彼女の前でうつとりとしてゐた彼は、ふと眼を落した拍子に、さも手持無沙汰の労働者の手らしく、無器用に膝の上に擴げられてゐた自分の手に氣が付いた。鐵と火を握むために硬くなつて、爪はぼろぼろにかけ、擦傷と切傷だらけの黒い永久に剝げつこのない眞黒なその手がとても大きく見えた。彼は耐らなく恥しくなつて、何處に夫をかくしていゝかもわからなかつた。ポケットに突込んでやつと安心した。

がおしまひだつた。彼は自分のありとあらゆる醜さに對して、突如として眼をさまさせられたのだ。彼は兩脚をひろげて力無く椅子にかけてゐる自分の姿、仕事着のズボンに、袖の短かすぎるダルジャントンの天鷲絨の上着といふ妙な姿の自分を見た。短かすぎる着物、それは何處までも彼についてまはる運命だつた。

彼の事を彼女は一體何と思つてゐるのだらう？ かまはずに大きな聲で笑はなかつたのは、どれだけの恩恵であるか解らない。何故なら彼女は眞面目である一方笑ふ事もよく知つてゐたので、小さく形の

ザ よい鼻のびく／＼動いてゐる小鼻と、少し嚴いんげんついそしてや、反身な唇の角には、惡戯者いんげんものの小鬼リヌダシの群が眼をひき、袖ひき嘲笑ひながら隠れてゐるのが窺はれた。

ク ヲ かうした形式上の煩悶に加へて、精神的の夫迄が一緒になつたのだ。彼の當惑と苦痛を徹底させるために、船乗時代のあらゆる放埒、あらゆる亂痴氣騒ぎが記憶に甦つて來た。ちやうど世界の到る處で廻つて歩いた居酒屋が醜惡そのものを彼の體中に印し、そして夫は人々の眼に觸れるのだとでも云ふやうに。此の若い平かな額に刻まれた憂鬱な皺、此の美しい眼の中に認められる憐憫の情、すべては彼女が其の賤しさを知つてゐるのだと彼に語つたので、彼は惱み恥ぢた。

聖き羞恥よ。讀ふべき懊惱よ！ 今こそ涙に濡れつゝ彼の魂は眼醒めたのだ。が彼にはさうした事が解つてゐなかつた。彼は來たのを後悔して逃げ出した氣になつた。階段を四段づつ飛んで降りて、オートネットに逃げ歸り、中から固く鍵をかけて、二度と再び外へ出ようといふ心を起さないために、鍵を井戸に投げ捨てよう、こんなに考へた。

いゝ工合に藥部屋に誰か彼か遣つて來た。セシルは銅の秤の前で藥を量つたり包んだり處方を書き込んだり、前に祖母がしてゐたみたいに忙しく働きはじめ、やうやくの事でヂヤツクは、みすばらしい自分の姿に向けられた若い娘の注意から放たれたやうに感じた。

さてそこで彼は、彼女に見惚れるばかりだつた。

10 實際彼女が、同じ事を繰返しながらくどくどと述べ立てゝゐるお喋舌で解らず屋の可哀さうな百姓の

女房達の相手になつてゐる、物優しさと我慢強さは感歎に値した。

語り手と同じ段階に自分で自分を引き下げ、あらゆる眞心のやさしさもていと靜かに慰め、勵まし、微笑み、或ひはよき勸告を與へる。その時彼女はヂヤツクの昔馴染、幼なかつた彼をあんなにも恐しがらせた年取つた密獵者の女房のサレ婆と話してゐた。地に屈む畑仕事の百姓達の多くの者のやうに、腰が曲つて、陽にやけた顔や手足に韃が切れ、埃まみれで萎びてゐたサレ婆はまるで穴の奥にひそんでゐる性の悪い獸といった風で、眼瞼まぶたの中に落ち窪んで、ぎら／＼と疑ひ深さうに光つてゐる眼だけにしか、まるで生氣といふものを持つてゐなかつた。彼女は彼女の亭主、『永い事わづらつてよ、仕事はしねえし、からつきり錢儲けねえ、そいでゐてよ、まだくたばる氣はねえ亭主』の事を話した。彼女はわざと酷い事を言ひながら彼女をどきまぎさせるのが面白いと言はぬばかりに若い娘の顔を見い見、サレ婆特有の毒舌を振ふのだつた。ヂヤツクは一度ならず、此の襤褸着物のとんでもない化物キリストを表に突き出してやりたくて耐らなかつた。がセシルがかうして喧嘩腰で突つ掛つてゆく鋒先に、少しも苛立つ事なく、鋭い邪心を躍起とならせるところの渝らない平靜を保つてゐるのを見て、やつと我慢をしてゐた。

藥が出來たところで、彼女はお叩頭とお追従の百萬遍も繰返しながら引き下つた。

ヂヤツクの傍を通る時彼女は振り返つた、彼が解つたのだ。

ル シ セ 『おや！ オートネットの小伴だね。』送つて行つたセシルに大聲で話しかけた『やれ／＼すつかり臺無し

ナ さ！……まあ、ママゼル・セシル、前頃ムツシユ・リヴァルはおめえさんのお婿さするつもりで、ラ
ク ツ ヤ チヤントンの伴に夢中だに、なんて言つてた奴等の舌さ切らなきやなんねえだね……おめえさん、あい
ぢやあ厭だんべえよ……だがお氣の毒だよ、おめえさんもふんとに思ふやうになんねえだな……」
彼女は嘲笑ひながら立ち去つた。

チャツクは自分で、自分が眞蒼になつた事が解つた。あゝ！ 何といふ奸悪な婆だらう。それでは彼
女は、嘗て彼を脅したあの鈍を今になつて振り下ろしたといふのか！ 彼女の名前と同じに、何といふ
邪悪で辛辣な一撃だつたらう！ 傷は深く深く達したので、たやすくは癒えまい。が痛手を受けたのは
チャツク一人ではなかつた。私は誰かともう一人、帳簿に書き込むふりをしながら、はげしい感動に眞
赤になつた顔をうつむけて、滅茶々々た書き方をしてゐたのを知つてゐる。

『カタリヌ、スープを早く。それから葡萄酒にコニヤツクだ。大急ぎ、大急ぎ！』

ドクツールが歸つて來たので、チャツクとセシルが間が悪るさうに押し黙つて向ひ合つてゐるのを見
るなり、元氣た聲で笑ひ出した。

『何だ！ 七年越しに逢つて置いて、もう話が盡きてしまつたのかい？ さあ早く食事にしよう。さう
すりやチャツクもすぐ打ち解けられるだらう。』

12 食事はチャツクを打ち解けさせないばかりか、反對にすつかりその當惑を増させてしまつた。セシル
の前で、彼はどうして食べていゝか解らなかつた。居酒屋の癖が出やしないかと震へをのゝいた。ダル

13 チヤントンの食卓では、職工生活の間に習ひ覺えた不作法が少しも苦にならなかつたのだ。此處では彼
は、自分が場にそぐはない滑稽なものだといふ事を感じた。わけてもあのいたましい手が心を暗くし
た。フォークを持つてゐる方はまだいゝ、する事があつた。が片方はどうしよう。眞白なテーブル掛の
上で、すべての傷がはつきりとむごたらしく見える。失望のあまり傍にだらりとさげたので、まるで片
腕無しの人間みたいに見えた。セシルの慇懃な態度は彼の臆病を増させるばかりだつた。彼女は夫に氣
が付いた。そして彼等にとつては果しもないみたいに永く思はれた食事が終る迄、偷み見るのでなけれ
ば、もはや彼の顔を見ようとしなかつた。やつとの事でカタリヌが食後デヒンを下げに來て、若い娘の前に、
お湯とお砂糖と、古いブランデーが一杯這入つてゐる頸の長い瓶を置いて行つた。祖母が居なくなつて
からは、セシルがドクツールのグロッグを作るやうになつたので、そして彼は作り手が變るやうになつ
ても少しも得とくをしなかつたといふ理由は、グロッグが強過ぎてはといふ懸念から、彼女は薬用程度の薄
いものを調合するやうになつたので、しかもムツシウ・リヴァルが悲觀した事にはアルコールの量が日
一日と減つて行くのだつた。

祖父にコップを與へると、若い娘はチャツクの方を振り向いて言つた。

『チャツク、ブランデーを召上る事？』

ル シ セ ドクツールは嘖き出した。

『飲まないでさ、火夫ぢやないか？ 妙な娘だな……あゝいふ可哀想な人間はそれ一つで生きてゐる

「なのだよ……さうく、ペイヨネーズ號に一人生のアルコールでさへあふる奴が居たつけ……うんと強い
ツ ヲ
グロツグを作つてやれ、決して強すぎる事はないさ。」
彼女はそれは優しい、それは悲しさうな様子でヂヤツクを眺めた。

「貴方。召上る？」

「いゝえ、いらぬのです、貴女……」

彼は恥しさうに小聲で言つた。でコツプを引込めるのに小さい努力をしましたが、或る女達には言葉に出す事なくて表はす事が出来る、そして常人同士の間にだけしか解らない力強い感謝もて酬はれた。

「はて、又しても改心か！……」

人の好いドクツールは彼のグロツグを一呑みにしながら、可笑しいしかめ面をして言つた。何故なら彼自身はといふと、宣教師を喜ばせるためといふだけで神様を信じようとする野蠻人と同じで、半分しか改心してゐなかつたからだ。

14
彼等の畑で働いて居たエチオルの百姓達は、この日の午後リヴァルの家から歸りがけのヂヤツクが大股で道を行くのを見て、彼が氣狂ひになつたか、でなければあんまり御馳走が過ぎて、ドクツールの晝飯が頭をどうかさせてしまつたと思つたにちがひない。彼は手を動かし、獨語を言ひ、拳を振り上げて見えない何物かを嚇かしてゐる。激情と憤怒に驅られてゐたので、平生の喪心状態から言つてまるで嘘のやうだつた。

15

「労働者！」彼は身を震はせて言つてゐた……。

「労働者！ 僕は一生涯さうなのだ。ムツシウ・ダルヂヤントンの言ふ通りだ。僕は仲間から離れては可けない。生きるのも死ぬのも彼等と一緒にでなければいけない。そして自分の身分を少しでも高くしようなどとは以つての外だ。どれだけ苦しまなければならぬ事か？」

久しいこのかた彼は、こんなにも自分が鋭敏で、氣概に富んでゐるのを自覺した事は無かつた。今迄嘗て知らなかつた新しい感情が頭の中で押し合つてゐたので、その各々の底には漣の一つ一つに碎けた月影といつたやうにセシルの面影が輝いてゐた！ 何といふしとやかで美はしく、そして清げな態だらう！ あゝ、若しも彼を職工になどするかはりに教育してくれたならば、彼は彼女にふさはしい者となつて、彼女を娶り、この寶を彼一人の物とする事が出来たのに！ おゝ！ 何といふ事だ！……彼は失望の怒りもてこのやうに叫んだ、ちやうど當も無く波濤と戦ひながら、僅か離れた濱邊には網が干してあつて、陽が輝いてゐるのを瞥見した難船者のやうに。

ちやうどこの時オーネットへの道に曲つた拍子に、彼は薪の束を背負つたサレ婆と顔を見合はせた。彼女は今朝「おめえさん、あいぢやもう厭だんべえよ。」と言つた時と同じに憎態な笑ひ方をして彼を見た。此の笑ひ顔を見て猛り立つた、そしてはげしいその怒りの鋒先は、彼の不幸の唯一の責任者である輕率で弱氣な、が彼にとつては何處までも大切な或る一人にしか向けられない事を知つてゐた彼は、持つて行き場の無いすべての怒りを彼女に向け換へたのだ。

ヤ 『あゝ、蝮奴！』彼は考へた『貴様の毒牙を引っこ抜いてやるから。』
ツ 彼がどのやうに恐しい顔をしてゐたかといふのに、近づいて来る姿を見るなり、サレは怖毛をふるつ

ク て薪を投げ出すと、年取つた牝山羊程の疾さで近くの森の中に飛び込んで行つた。昔密獵で鍛へた脚のおかけだ。彼は五六歩追ひかけてから急に立ち留つた。
『僕はどうかしてゐる……考へて見ればあの女の言つた事はみんな本當だ……今ぢやもうセシルは自分を嫌つてゐるにちがひない。』

その日彼は夕飯を食べなかつた。火もおこさず、ランプもつけなかつた。家中散らばつてゐた椅子や何かを集めて来て其處だけを住ひとしてゐる食堂の片隅に腰をおろして、爽かな秋の夜の薄霧が眼に見えない月の歩みの下で白く輝いてゐるのを窓硝子越しに眺めながら、彼は考へてゐた。
『今ぢやもうセシルは自分を嫌つてゐるにちがひない。』

彼の胸は只もうその事で一杯だつた。

16 今ぢやもう彼女は彼を嫌つてゐるにちがひない。事實あらゆる事が二人の間をわけへだてゝゐた。第一彼は労働者だ、それから……何とも言はれない怖しい言葉が彼の唇に上つた。『私生兒……』生れてはじめて彼はその事を考へたのだ。周囲で誰でもが夫に就いて思ひ出させる事がなかつた時、子供はかうした事に得て無頓着なものだ。それでヂヤツクは落伍者の社會から、すべての過去が生活難といふ事に依つて赦され、そして何處よりも又貰ひ子といふ事が多い労働者の仲間に移つて行つたヂヤツクは、き

17 はめて氣樂な世界に住んでゐたやうなものだ。父親の事を語つて聞かせるものが無い、で少しも彼は氣にしなかつた。只僅かにちやうど啞がそのすべての效用と夫がもたらす快樂を知る事無しに、自分に具はらない官能を知ると同じに自分に缺けてゐた、この父親の愛情といふものを意識してゐたのだ。

この時は生みの親の問題が他のすべてに越えて彼の心を占めてゐた。シャロットが父親のだといふ名を言つた時に、彼はこの驚くべき告白を聞いても少しも平靜をみだす事はなかつた。が今では彼はまだ見ぬその父親の確かな面影を描き出すために、彼女を問ひたゞし、あらゆる顛末あらゆる立證を求めようと望んだのだ……ド・レバン侯爵の……本當に彼は侯爵なのだらうか？ それとも位階と爵位といふ事に夢中になつてゐるあの可憐な小さな頭が何か又新しく想像した事ではなからうか？ 彼が死んだといふ事も本當だらうか？ 息子の前で顔を赤らめなければならぬ事を恐れた母親が手切れになつたとか、捨てられたとか云ふ話を避けるためにわざとさう言つたのでは無いだらうか？ 若しも此の父親が生きてゐてその過失を償ひ、その苗字を自分の息子に與へようと望むほど殊勝な人だつたら！

ヂヤツク・ド・レバン侯爵！

彼はこの稱號が自分とセシルの間を近づけてもするやうに、かうした文句を自分で自分に繰り返した。憫れむべきこの少年はあらゆる世の中の虚榮は、女の眞の心を愛もろともに開かせるところの惻隱の情を動かす力が無いものだといふ事を知らなかつたのだ。

ル シ セ
『母親に手紙を書かう。』

「ザから彼は考へた。が聞かうとする事はそんなにもデリケートで、面倒であつたし、言ひにくい事だつたので、ヂヤツクは自分でシヤロットに逢ひに行つて、眼が言葉を補ひ、時に言語より雄辯な無言の告白もて理解し合ふ、さうした會話をしよう」と決心した。が悲しい事に汽車に乗るだけのお金が無かつた。もはや母親から送つて來なければならぬ時なのだ。きつと彼女は忘れてゐるにちがひない。

『さうだ！ 僕は十二の時に歩いて來たんだ。弱つてゐたつて、もう一度歩けない事はあるまい。』
實際翌日彼はもう一度あの怖い道を歩いた。それで前よりは短く、怖しくなかつたとは言へ、一層悲しいものに思はれた。すべてを判別し、推理する年頃になつて眼に見た少年時代の思ひ出の幻滅はまことよくある事だ。言はゞ子供の眼の中には物を彩るところのある物質があるので、それは最初の無智と同じだけ続く。で年を取つて行くに連れて、嘗て感心した物の色も褪めてゆくのだ。詩だけがさうした子供の眼を何時迄も持つてゐるのだ。

18
ヂヤツクは何處も忘れてゐなかつた。彼が眠つた場所、親切な耳付きの鳥打帽に母親が其處に泊つてゐるのだと思はせるために立ち留つたヴィルヌーブ・サン・ジョルジュの小さな門、誰かゞ寢てゐて彼を酷く怖れさせた溝のはたの砂利の山、度々夢にまで見た怖しい場所の曖昧居酒屋……あゝ然し、居酒屋なら彼は他にもさん／＼知つてゐた。嘗て彼があんなにも怖しく思つた酔拂ひの労働者や、破落戸達のあさましい顔はもはや少しも彼を驚かしはしなかつた。それどころか彼は彼等に眩をぶつからせながらこんなにか考へてゐた。若しも幼い昔のヂヤツクが逃げた來た學生のおづ／＼した足どりで往來の埃の中

19
に立ち現はれて、今のヂヤツクに顔を合はせたとしたら、きつと他のすべてのいたましい姿を眼にしたにもまして怖れをなしたにちがひない。

彼は鬱陶しく冷たい雨の中をちやうどお午過ぎに巴里に着いた。そして嘗ての思ひ出を今と較べながら、彼は麗かな曙、五月の空のうるはしい東雲を思ひ出した。その時母親は彼の最初の旅路の涯に夜の闇の群を退けてゐる榮光につままれた聖ミシエル大天使かのやうに立ち現はれたのだ。彼のイダが花の中で歌つてゐたオーネットのさゝやかな村莊のかはりに、雑誌未來人社の洞穴みたいな冷たい玄關の下で、彼の前に立ち現はれたのはダルヂヤントンだつた。校正刷を手にしたモロンヴァルとラテの一隊を引連れてゐるので、皆が烈しい議論に疲れ切つた風だつた。

『おや！ チヤツクが來た。』
混血兒が言つた。

詩人は震へ上つて頭を持ち上げた。この向ひ合つた二人、一人は仕立のいゝ着物を瀟洒に着こなし、手袋をはめて、顔をてかつかせて今食卓を離れたところ、もう一人は摺り切れたのと雨がかゝつたので光つてゐる小さすぎる天鷲絨の上着に瘦せた體をくるんでゐるのを見たらば、誰にしたつて彼等の間に、或る關係があらうなどとは思ひがけもしないだらう。ちやうど父親は大工で娘は伯爵夫人、兄貴は何處か場末の床屋といふやうな胡散な家庭に見る外形の不釣合といふ物が窺はれた。

ルシセ
ヂヤツクはダルヂヤントンに手を差し伸べ、彼は面倒くさ／＼に指を一本だけ握らせてから、オーネ

ザツトの借り手があつたのかと言つて尋ねた。

『何です?…… 借り手?……』

片方は譯が解らないで問ひ返した。

『さうさ…… お前が此處に遣つて来るのを見たら、かう思ふのが當り前ぢやないか。』家が塞つたので歸つて來なければならなかつたのだな』とさ。』

『いゝえ。』ヂヤツクは泡を食つて言つた『僕が彼處へ行つてから誰一人だつて來もしません。』

『では何しに來たのだ?』

『母に逢ひに來たのです。』

『その氣まぐれはいゝさ。が生憎旅費がかゝるといふものだ。』

『僕は歩いて來ました……』

ヂヤツクは嘗て無かつた落付きと誇りを見せながら無雜作に言つてのけた。

『あゝ……』

ダルヂヤントンンは吃驚した。

そして此の短い文句を言ひ放つ迄一寸の間頭をひねつてゐた。

『ふん! お前の脚は腕よりも達者だと見えるが結構な事だ。』

『こりやひどい言葉だ……』

20

21 混血兒が嘲笑つた。

詩人はにたり笑ふと、効果のあつたのに満足してお追従者の一團と一緒に河岸を傳ひ出した。

若しも一週間前だつたら、ダルヂヤントンの此の毒舌は腑甲斐の無いヂヤツクに何も感じさせる事は無かつたらうが、彼はもはや昨日の彼ではなかつた。あの時から數時間早くも彼は誇りに満ちた感じ易い者となつてゐたので、かうした辱しめを受けるや否や、彼は母親に逢ふ事さへもしないで、來た時と同じに歩いて歸らうと考へたほどだ。がどうあつても彼女に話さなければならぬ、眞面目に話さなければならぬ事がある。で彼は昇つて行つた。

大變な騒ぎだつた。裝飾屋が來て幕を張るやら、腰掛を列べてゐる、まるで卒業式でも始まるみたいだ。ちやうど其の日大層な文學的會合が開かれて、場末住ひの藝術家の連中が寄り集る筈なのだ。さてこそダルヂヤントンはシャロツトの息子を見て、あゝも不機嫌だつたのだ。彼女も亦嬉しさうには見えなかつた、家の中をすつかり變へて、幾つもの小サロンや休息の間や、喫煙室を作らうといふので、聞や化粧室までひつくりかへしての騒ぎに、家の主婦ふりを見せてゐた彼女は彼を見付けるなり手をやめた。

『あらお前なの、ヂヤツクや! きつとお心を取りに來たのだわね、私がお前の事忘れちやつたと思ひだつたらう、さうぢや無いの、ヒルスさんが二三日のうちに其方へ御行きだといふのでことづけるつもりだつたのだよ、あの人は香料の事で大變珍しい實驗をするのださうだよ、何でもペルシアの本を見

ルシセ

ナ て發明したのですつて……とても大した發見なの！」

ク ツ ナ 彼等は、行つたり來たり、釘を打つたり、家具を動かしたりしてゐる職工達の眞中で、立つた儘小聲で話してゐた。

「僕はごく眞面目に話したい事があるのです。」

ヂヤツクは言つた。

「まあ、一體何なの？……どうしたといふの？…… お前も知つてゐる通り、眞面目といふ事はとても私には向かないのだわ……それにご覽な……今日は會があるのでごつた返しよ……おゝ！ 大したものだわ、五百通も招待狀を出したのだからね……お前にはお残りとは言はないわ、ね、解るでせう……第一お前には面白くないだらうし……さうく、どうしても話したい事があるのなら、テラースへ御出でな……煙草をのむ人のために、彼處をヴェランダみだにしたの、見て御覽、そりや工合がいゝのだよ。」

彼女は彼を、亜鉛で屋根を葺いて、縞の雲齋布を天井代りに張り渡したヴェランダに連れて行つた。

長椅子が一つと、植木棚と釣花瓶がしつらへてあつたが、眞晝間烈しい雨の音を聞きながら、霧のしぶくセーヌの景色を見渡すのは如何にも物悲しかつた。

ヂヤツクはまじくしてゐた。

22 紙を書いた方がよかつた……」

23 かう考へた。何と言ひ出したものかも知らなかつた。

「それで何なの？」

シヤロットは腰かけると、女の人が話を聴く時にするあのあだつばい様子で、顎に手をかけながら言つた。

彼はなほ一しきりためらつた、ちやうど人々が骨董品を飾つた棚に重たい物を置き過ぎるやうに。何故なら之から彼が言はうとするところの事は、彼の近くにうなだれてゐるこの小さく軽い頭にとつて、あまりに重大すぎると思はれたからだ。

「僕は……僕はお父さんの事で話したいのです。」

彼女の唇はかう言つてゐた。「あんな事を考へてさ！」で何故彼女が夫を口に出さなかつたといふわけは、驚愕と憂慮と恐怖の色を泛べたその顔の表情が代りに言つてゐたからだ。

「それは私達二人にとつては、ほんとに悲しい問題なのだよ、お前。でもどんなに辛いにしろ、私にはお前の聞きたいといふ心持は解るのだし、ちやんと聞かせて上げます。それに——彼女は勿體振つて言ひ足した——私は始終お前が満二十になりさへすれば、お前の身分についての祕密を話して上げるつもりでゐたのよ。」

ル シ モ 今度は彼が驚いて彼女を凝視めた。

して見ると彼女はもはや、三ヶ月前、それを話した事を忘れてしまつたのか。が彼は彼女が忘れた事

クツヤ
に就いて何も言はなかつた。彼女が言はうとする事と、前に言つた事を較べようとしてみたのだ。何故なら彼には、彼女といふものがほんとによく解つてみたのだ！

『で僕のお父さんはほんとに貴族なのですか？』
彼は時を移さず聞いた。

『貴族ともさ、お前』

『侯爵ですか？』

『いゝえ、男爵なの！』

『でも僕はさうだと思つてゐた……母さんが言つたのです……』

『いゝえ、いゝえ！ 侯爵なのはド・ビュラツク家の總領から出た方よ。』

『ではお父さんは、そのド・ビュラツクの親類なのですか？』

『さうですとも……分家の方の當主だつたのだよ』

『で、お父さんの……名前は！』

『ド・ビュラツク男爵、海軍大尉だつたの。』

24
たとひ其の露臺が雲齋張りのヴェランダと、中にあつた總べての物もろとも崩れてしまつたにしろ、ヂヤツクは之以上の激動を覚えはしなかつたらう。がまだ彼はかう言つて聞くだけの勇氣を持つてゐた。

25
『ずつと前になくなつたのですか？』

『おゝ！ ずつと／＼前ですとも……』

シヤロットは答へた。そして彼女のためには朦朧として來たこの存在を遠い過去の裡に突き戻さうとするやうな身振りをした。

父親は死んだ、多分夫は本當だらう。ではド・ビュラツク家に屬するのか、ド・レバンか、母親が今度嘘を言つたのか、それとも前に言つたのが嘘だつたのだらうか、要するに恐らく彼女は嘘を言つたのでは無いのだ、多分彼女は自身何も知りはしないのだらう。

何といふ恥しい事だ。

『まあ、ヂヤツクや酷く顔色が悪いぢやないの。』

彼女の所謂海軍大尉の事からはじめて、小説めいた長い長い物語りを急に罷めてシヤロットは言つた。

『手が氷のやうだわ。露臺に連れて來ていけない事をしたわね。』

『どうもありません。歩いてゐるうちにちきになほります。』

ヂヤツクはやつとの事で言つた。

ルシセ
『まあ！ もう歸るの？ でも考へて見りやお前の言ふ通りよ、早く歸る方がいゝのだわ……お天氣が悪いのだから……さあ、接吻しておくれ。』

彼女はささいとしさうに彼を接吻すると、上着の襟を立てゝやり、寒いからといふので自分の外套を

ザ 與へ、お金を少しばかりポケットに入れてやつた、彼女は彼が悲しそうな顔をしてゐるのは、自分が出
ツ ヲ られないまとの準備を眼にしてゐるからだと考へた。で一寸も早く送り出さうと考へてゐるところに
ク 女中が呼びに来た。

『奥様髪結がまゐりました……』

彼女はいゝ仕合せにした。

『ねえ、お別れにしなければ……體を大切になさいよ……そしてもつと度々手紙をおくれ。』

彼は手摺に掴まりながら、靜かに階段を降りた。彼は頭が滅茶々になつた。

26 おゝ！ さうだとも、彼の胸が一杯になつたのは、その晩の彼等のまとのためではなかつた。が生
涯に只の一度も連る事の無かつたほかのまとのひ、愛するため、うやまふための父親と母親を持つ小供達
のまとのひ、自分の苗字と家庭と自分の家族を持つ者達のまとのひを考へてだ。彼は又慘酷な運命が彼を除
け者にするだらうところの他のまとのひ、美しく正しい或る物もて人々を永久に結びつける幸福な愛の夫
をも知つてゐた。彼は夫にも與かれないのだらう。そして不幸な彼はひたすら悲しんだ、かうした總べ
ての幸福を慕ふのは、最早それを得るに値するといふ事、彼のいたましい運命を明らかに見る眼があい
たのは、嘗ての喪心状態から遙かに隔りが出来たので、かくてはじめて夫と闘ふ力を得られるのだと
いふ事を知らずに、かうした悲しい思ひに耽りながら、彼はリヨンの停車場をさして貧民街の道を歩い
て行つた。其處では泥濘（ぬかるみ）がよりどろ／＼で、霧がより重く濃いやうに見えた。何故なら其處の家は暗く、

27 溝川はきたならしく溢れてゐた。そして人間の悲慘は自然の憂鬱を増させるものだつたから。工場の退
け時だつた。瘦せて疲れた人々、失意と悲觀を彼等と俱に引摺つてゆく人間の波が往來に溢れて酒屋の
店へと吸ひ寄せられて行つたので、夫等の或る物はまるで酩酊と忘却が不幸な人々の唯一の遁れ場だと
言はぬばかりに、ア・ラ・コンソラション！（來り、慰め！）と言ふ言葉を看板にしてゐた。

寒い雨降りのこの秋の夕方と同じに、彼の生涯の地平線が到るところかたく鎖ざされてゐるのに胸を
かきむしられてゐたチャツクは、忽ち思ひ出したやうに絶望の叫びをあげた。

『さうだ、それでいゝのだ……夫より他には道が無い……飲まないのは嘘だ！』

そして酔拂ひのだらしない睡りでなければ刃物三昧に汚がされた鬨の一つを越えるなり昔の火夫はブ
ランデーを二杯ぶり持つて來させた。が騒々しく煩い群集の眞中でコップを取り上げようとした刹那、
煙草の煙、酒臭い息と雨にぬれた仕事着のむつとするこもつた空氣の中に聖い笑顔が彼の前に現はれ
て、深味のある優しい顔が耳のはたで囁いたやうに思はれた。

『ブランデーを召上るの、チャツクさん？』

いや、確かに彼は飲みはしない。もはや決して飲まないのだ。彼はいつばいになつたまゝのコップを
勘定場に置いたまゝお金を投げ出すと、皆の驚きを後に酒場を飛び出した。

二 豫 後

この悲しい旅から歸つて病氣になつたチャックが第二のマヅウにされて香料療法の実験の犠牲になりながら、どんなにして二週間もヒルス醫師の虜にされてゐたか、どのやうにしてムツシウ・リヴァルが救ひに来て無理やり彼を連れて行き、命を助けて丈夫にしたかを語るのは多分あまりに長過ぎるだらう。で自分は直ちに我がチャックが薬部屋の窓際の氣持のいゝ腕椅子にもたれてゐる姿を諸君に見せようと思ふのだ。何冊かの書物は手の届くところに置かれ、彼のぐるりには憩ひ、穩かな環境と靜かな家、それから恢復期の病人が絶對の無爲の永い一日を一層樂しむためにちやうど必要なだけの生氣をもたらず、セシルの軽い足音から來る快い憩ひが充ち満ちてゐた。

彼がどれほど幸福だつたかといふのに、自分では口を開く事さへするのではなくて、この愛する者の姿にうつとりと眼を注ぎながら、彼女が動かす針の音でなければ、會計簿の罫紙の上を滑るペンの音に聞き入るだけで足りるのであつた。

『おゝ！ あのお祖父さんたら！ 往診を半分も誤魔化してゐるのよ……然も二度ばかり尻尾を出したわ……グウドルーの處にどうしても行かないと言ふ口の下から、おかみさんが大分快くなつたなんて言ふのですもの。貴方だつて氣が付いたでせう、チャック？』

『何？……』

はつとして彼は聞き直す。彼は聞いてゐなかつた。何時も單純でむらが無く、そして浮調子といふ事を一つの愛嬌と心得て無理に夫をするやうな娘達のわざとらしい子供らしさとか、お轉婆とか云ふやうなところの無いしとやかな彼女を眺めてゐたのだ。彼女にあつてはすべてが眞摯、すべてが深刻だつた。彼女の聲は思想のもたらす響であり、その瞳は光を吸つてそれを保つてゐた。それで此の魂に出でいる總べては遠く來り遠く去る物のやうに思はれた。だから此處彼處に散らばり、磨り減らされ、形をかくす貨幣とも云ふべき言葉が一度彼女の口から出る時は、音樂の夫の如く忽ち驚くばかりの生彩を放つのだ。ちやうど夫等がヘンデルとか、パレストリナのいみじき曲もて歌はれでもするやうに。若しセシルが『モンナミ・チャック』と言つたとする。チャックには嘗て何人からもそのやうに呼ばれた事が無いやうに思はれるのだ。又彼女が『アデュウ！』と言ふ。彼はもう此の後決して逢ふ事が出来ないかのやうに思はれて胸を痛めるのだ。考察的で平靜な彼女に依つて言はれる時、すべては決定的の意味を持つのだ。僅かな風に當つても身を顛はせ、少しばかり陽が當つても暑がるといふやうに、精神的にも肉體的にも敏感な恢復期にあつて、チャックはかうした總べての魅力に深い感動を受けたのだつた。

後 豫
おゝ！ この祝福された家で過した樂しくもよき日よ！ そして彼を繞る總べてがどれだけ其の恢復を早くしたらう！ 生地のままの板の高い戸棚にかこまれて紗のカーテンを垂れ、殆んど何の飾りも無い廣い藥部屋は、南をうけた村道のはづれ、刈入れのすんだ畑に臨み、快い靜寂と乾草や見事な花盛り

ヤ につままれた植物の、薬臭い香を彼の周圍に漂はせてゐた。茲で自然はやはらぎなごんで病人のかたへ
にあり、彼は酔ひしれた心でその思ひ出をなつかしんだ。小川は彼の爲めに香脂ポムのかをりもて走り、森
は其の緑の穹窿を古い樫の根本に群る矢車菊の匂ひの上にひろげてゐた。

ツ 體力が返つて來るにつれて、ヂヤツクはつとめて讀む事をした。圖書室の古本をひつくりかへして前
に習つたのを見付け出し、理解力の進んだ頭でもう一度讀み返した。セシルは毎日の務を休みなく續
けてゐた。それでドクツールは外出勝だつたので、この若い二人は小娘の下女に見張られてゐるだけだ
つた。それだけで噂を立てさせるに十分だつた。でこの若者が美しく若い娘のそばに絶えずはりついて
ゐる事は用心深い母親達をいたく驚かした。若しもリヴァル夫人が生きてゐたとしたら、確かにそんな
事は行はれなかつたにちがひない。しかしドクツール自身が此の二人の子供と同じやうに子供だつたの
だ。それにこの善良なドクツールには、彼には彼の考へがあつたのかも知れない。

30 ところでヂヤツクがリヴァルの家に寢泊りしてゐるのを聞き込んだダルヂヤントン
で、それを自分に對する侮辱ととつたのだ。『お前が其處に御いでなのはよくありません。』シャロット
から息子に手紙が行つた。『村の人達は何と考へさせるでせう……きつと皆は私達がお前を世話する事が
出來ないのだなどと言ふでせう……私達がお前から非難を加へられてゐるみたいです……』この最初の
手紙で効果が無かつたので、今度は自身、恐れ多くも彼自身でペンを執つた。『お前の病氣のためにヒル
スを遣つたにも拘はらず、彼を無視して田舎醫者を信頼するとは心得ぬ次第なり。よく考へて見るべ

31 し。兎も角もはや恢復したる事なれば、二日以内にオーネットに立ち歸るべし。若し二日すぎても歸ら
ざる時は、自分に對する明らかなる反抗と見做して、今後一切構はざるものなり。分別せらるべし。』
が結局ヂヤツクは動かうとはしなかつたので、シャロットが出向いて來た。彼女は道々食べるための
チョコレートを手提袋に一杯持ち、詩人の口移しの種々な文句を暗記してそれは容態ぶつて遣つて來
た。ムツシウ・リヴァルは彼女を階下に通した。そして夫人のあらはな隔意にも、花のやうな唇をすぼ
めて溢れ出さうな言葉を抑へようと努力してゐる様子にもおくれを取る事無しに、いきなり一息に言ひ
立てた。

『夫人先づ申し上げなければなりません、ヂヤツクをオーネットに歸らさないでゐるのは此の私で
す……あの子の命にかゝはる事です！ さうです、夫人、命にです……貴女の御子は疲勞と衰弱に加ふ
るに少年期から青年期への替り目の實に危険なところなのです。幸ひに年が若いのでまだ體質の改善は
出来る。酷い打撃ではあつたが、實際耐へてくればいゝと思つてゐます。ですが全く貴女方は何だつて
あのろくでなしのヒルスにまかせたりしたのですか？ あの非人は療治をすると云ふ口實で、麝香や
ら、安息香で窒息させかけてゐたのです。多分貴女は夫を御存じぢやなかつたでせう。私は吸引器や吸
入器や香爐の間から、煙の渦を潜つて救ひ出して來たのです。そればかりかその道具を一揃ひ蹴飛ばし
てやつたので、若しかしたら醫者迄も一緒だつたかも知れません。』

後 それで今やうやくあの子は危険の域から去つたわけです。もう暫く私に任せてお置きなさい。前より

ヤも丈夫にして、そして辛い生活に再び入る事が出来るだけにしてからお返します。で若し又あの怖い藪醫者に任せようとなさるのだつたら、私は貴女が子供を邪魔にして厄介拂ひをしようとなさるのだと考へるでせう。』

『おゝ！ リヴァルさん、何を仰有るのです？……おゝまあ！ おゝまあ、そんな酷い事を言はれるやうな、私は何を一體したのでせう？』

この最後の間は無論涙の洪水を引き起したのを、ドクトールが二言三言やさしい言葉をかけておきと乾かせてしまった。それからお天氣の直つたシャロットは、薬部屋で一人で本を讀んでみたチャックに逢ひに昇つて行つた。彼女には彼がちやうど何か不細工な上つ張りを脱ぎでもしたみたいに美しく變りはしたが、變化のための努力で疲れ衰へてゐるやうに見えた。彼女は少なからず心を動かされた。彼は彼女が這入つて来るのを見ると顔色を變へた。

『迎へに來たのですね？』

『いゝえ……いゝえ……お前はほんとに此處で仕合せなのだもの、それに若しも私がお前を連れて行つたら、お前をあなたに可愛がつてゐる親切なドクトールが何とお言ひだらう？』

32 チャックは生れてはじめて母親から離れてゐても幸福でゐられるといふ事を考へてゐたのだ。で若しもこの家を去らなければならないのだつたら、病氣は又ぶりかへしたにちがひなかつた。彼等はしばらく二人きりで話してゐた。シャロットは少しばかり打明話をした。彼女は満足してゐなかつたらしい。

『ほんとだよ、お前文學者の生活といふものはとてもざわ／＼するものだよ。今ちや一月に一遍宛大きな集會があるの。そして二週間毎に朗讀會さ……大した騒動なの……前から私がかうした頭なのだもの、どうすれば耐へて行かれるか、自分でも解らないのだよ……ムツシウ・モロンヴァルのところの日本の貴公子が大層な詩を書いたの、無論日本語だよ、でそれをあの方が譯さうといふ事になつたの、一行一行……で日本語を稽古したのだよ、私までもさ！ とても耐らない……おゝほんとに私、文學なんて、私にはとても向かないと考へ出したのだよ。實際何をしてゐるのか、何を言つてゐるかも解らない時があるのだもの。それにあの雑誌といつたら一錢も這入つて来るのぢやなし、一人の購讀者も無いのだし……さう言へば、お前あのボンナミを知つてゐるわね……あの方はなくなつたよ……私はほんとに悲しい思ひをしたつけ……お前あの人の事覚えてゐるかい？』

ちやうど此の時セシルが這入つて來た。

『あゝー マドモアゼル・セシル……まあ、大きくなつて……それに何とまあ美しいのでせう！』

彼女は大きく腕を擴げると、若い娘を抱擁するために半外套のレースを波打たせた。がチャックは聊かてれてゐた。ダルチャントンの、ボンナミだのといふ名前をどんな事があつてもセシルの前で口にしたくなかつた。そしてさうした事に氣を留めない母親のお喋舌を何度かそらさうとした。彼は深くシヤロットを愛しながら、其の子としての情愛には嘗て最初の烈しい愛情にまじつてゐた尊敬と同じだけの憐憫といふものが加つてゐたのだ。

ザ ドクツールはマダム・ダルジャントンを夕飯に引き留めようとしたが、彼女は永く居過ぎた。詩人の
ヤ 暴虐なエゴイズムから言つて、あんまり長居をしすぎたと考へてゐたので、歸る間際になつて、しきり
ク ツ 心配しだしてゐた。そればかりぢやない、家に着くなり、言譯を言ふ時の口實を前以て考へて置いた
のだった。

『それからね、ヂヤツクや、私に手紙をお書きの時には巴里局止でよこすのですよ。お解りだらう、あ
の方は今お前に對して、それは怒つて御いでなのだからね。私迄が怒つてゐるふりをしたければならな
いのだよ。だから私から叱言を言つて上げたからといつて驚かないでもいゝのよ。何しろ私が手紙を書
く時にはいつもそばについておいでなの。時々は自分で言つて書かせるのだよ……さう！ かうしよう
……さうした時には手紙のおしまひに小さな十字架を描いて置くからね。そしたら氣にしないでいゝ
といふしるしだから。』

かうして彼女はどれだけ自分が束縛されてゐるかといふ事を何の飾り氣もなく告白してゐたのだ。そ
れで母親がかうした壓制を受けてゐたにも拘はらずヂヤツクがわりに平氣でゐられたのは、この可憐な
お馬鹿さんがよい着物を着飾り、手に持った旅行鞆をちやうど何物であれ、一生涯彼女を苦しめる心の
重荷を少しも感じない程に軽々と提げながら、若々しい姿でさも楽しげに歩いて行く様子を見たからだ
つた。

34

時として水藻の花を見た人があるだらうか。彼等の長い莖は河の底から出て伸び育ちつゝ、さまざま

35

な障礙にあつて撓みくねりながらも、やがて水面に浮び出て、盃のやうに圓かな見事な花瓣を開くの
で、いと甘い其の香は荒い河波のためにやゝ野生的の趣きを帯びる。愛はかうしてこの若い二人の心の
中に成長したのだ。この愛は遠く彼等のいとけない少年時代、言はず其處に投げられた種子の總べては
芽ぐんで、美はしき花盛りの未來を持つといふその時代から育まれて來たのだつた。セシルにあつて
は、夫等の聖き花は澄み切つた魂の中にすつくと生ひ立つてゐたので、少しでもあきらかな眼を持つて
ゐる者はたやすく夫を見出す事が出來た。ヂヤツクの夫はきたならしい泥の底にすくんでゐたので、ま
はりにまつはり群る種々な植物にその成長を阻まれてゐた。が終に夫は空氣と光の境域に達したので、
立ち直り伸び上つて、殆んど水面に其の顔を覗かせてゐたので、漣はなほもかすかにその面を洗つてゐ
るのだ。おゝ、花はぢき、もうわけもなく開くのだ。太陽と愛のたゞ一刻の働きで足りたのだ。

ムツシウ・リヴァルが或る晩若い二人に言つた。

『どうだ、明日クートレへ皆で葡萄摘みに行かうぢやないか。小作人が馬車をよこすといふのだ。二人
は朝から行くとして、俺は晩飯迄に落ち合はう。』

後 二人は喜んで承諾した。十月の末の晴れた朝、彼等は車の輪の一轉り毎に消えて行くみたいな、美し
い景色を包んでゐた軽やかなガーゼのやうな霧の中を出發した。刈入れの済んだ畑、黄金色の刈麥、季
節の最後の收穫である瘦せ細つた野菜の上に、すべく／＼と眞白な細長い絲がまるで空に舞上つて行く霧
の細片のやうに、且漂ひ且散り敷いてゐた。夫等は秋が果しない壮大さも示してゐる此の平らかなひ

ヤ
ろがりの涯から涯を銀絲の布となしてゐた。川は廣い道の下の古い屋敷と、夏が逝つて、赤く染まつた
深い樹の茂みの間を流れてゐた。あたりの爽かさと軽い空氣が、兩足を藥の中に突き入れて、兩手で車
の横を掴みながら硬い腰掛の上でゆすぶられてゐた乗り手を一層上極嫌にした。小作人の娘の一人が小
さな灰色の強情つ張りの驢馬を馱し、驢馬は摘みとつた果實が甘い香を發散させるこの時分にそれは多
い黄蜂の群にたかられて、長い耳をしきりに振つてゐた。

馬車は走つた、走つた。エチオルとスアヂーは旅の喜びである景色の變化を見せながら、道の兩側を
後ずさりして行つた。町を一里ばかり川に沿うて離れて、ユルベイの橋を過ぎると葡萄摘みの眞最中
だ。

セーヌ河に降つてゆく丘の上に一群の働き手が、まるで蠶が桑の葉を食べる時に立てる叢のやうな音
をさせながら、大童になつて房を摘み、葉をむしつてゐた。ヂヤツクとセシルはめい／＼柳の籠を持つ
て、あてなしに驅け出した。おゝ！何といふ美しい場所だらう！葡萄の葉越しに見た田舎の景色、
パールのあたりから見るライン河の微細畫ミニアチュウと言つたみたい、いつもかはらない緑の小島が點在してゐ
る細くうねつた美しいセーヌ河、水の音と泡の渦をあげながら遠くもないところをたぎりおちてゐる
堰、それと之等の物の上の金色の鶯の中を昇つて来る太陽、その傍には白い三日月がこの麗かな日より
長い夜と、早く燃さなければならぬ爐の火の事を思ひ出させてゐた。

36 實際とても楽しかつた此の日はほんとに短かゝつた。少くともヂヤツクはほんとに短く感じた。彼は

37 一分間もセシルから離れなかつた。絶えず眼の前には、其の縁の小さな麥藥帽子と、花模様のジユツ
ブ、粒の實をまるで艶消硝子のやうに半透明にしてゐる鱗のやうな曇りのかゝつたのを、彼が注意深く
摘み取つたそれは見事な房でみたした彼女の籠があつた。彼等は二人して此の花のやうな實を眺めてゐ
た。そして眼をあげたヂヤツクはまた彼女の頬の上と、顚顚や唇の隅に同じ柔毛、黎明と青春と孤獨と
が枝を離れない房と、まだ戀をした事のない心に留めるところのあらゆる表情を見た。その上髪の毛ま
でが軽く風になびいてゐた。嘗て彼は之ほど晴々しい彼女の様子を見た事は無かつた。體を動かすの
と、美しいその仕事の昂奮、葡萄摘みの人達の呼ばはり合つてゐる聲や、唄や笑ひ聲によつて葡萄畑
中に充ち満ちてゐた「陽氣」が、ムツシウ・リザアルの家の物靜かな主婦をすつかり變化させてしまつ
たのだ、彼女は昔の小娘に立ち還つて、土手の上を走り廻つたり、籠を肩に載せて片腕をあげ、荷物を
かしがせないためにあどけないその顔をしかつめらしく緊張させながら、ヂヤツクが思ひ出したブルタ
ーニユの水汲女が水甕を頭に載せて早足に行く時のやうな恰好で歩いた。

だが一度疲れのために二人して、桃色のヒースが咲き亂れ、落葉が鳴つてゐた小さな林のふちに腰を
下した事があつた……

それで？

豫

それで何でも無かつた。二人とも何事も言ひ出さなかつた。彼等の愛はそんなにも早く口に出して言
後つたり、形に現はれたりするやうなものではなかつたのだ。彼等はお互に彼等の生活に就いて夢見てゐ

ヤ た。白やかな楽しい夢の上にひそかに宵闇を降り立たせた慌しい秋の夕暮が、愛する人々に満たされて
ク ツ ヤ るる楽しい住家への歸りを思はせるやうな、眼に見えない窓や戸口を地平線のところ／＼にともし出し
て、忽ちなごやかな魅力を添へなした。風が冷たくなつたのでセシルは持つて来た首巻を無理にヂヤツ
クにさせようとした。布のしなやかさ、あたゝかな心盡しの夫をまもつてゐる其の感じ……ちやうど愛
の抱擁のやうに戀する若者の顔を蒼ざめさせた。

『どうしたの、ヂヤツク？……何處か悪いの？』

『いえ、いえ、セシル！……僕はこんな氣持のいゝ事今日が始めてなのだ！……』

彼女は彼の手を執つた。そして彼女が自分のを引込めようとした時、今度はヂヤツクが夫を執つた。

そして二人は指と指とを組合はせたまゝ、一しきりさうして口を利かずにあつた。

たゞ夫だけだつた。

38 二人が小作人の家に降りて行つた時、ちやうどドクツールが来たところだつた。廣苑の方で、率直な
笑ひ聲と、馬を解いてゐる車の軋る音が聞えてゐた。爽かな秋の夕方は詩そのものなので、ヂヤツクと
セシルは夕飯の火が燃えさかつてゐる天井の低い廣間に入るなり、それを味ふ事が出来た。粗末なテー
ブル掛、花模様のお皿、百姓の食物の強い香、かう言つた物のすべてがテーブルの上にぶちまけた葡萄
の山、部屋から嘗への御百度、古いのと新しい地酒との較べ飲みで終るお祭騒ぎの鄙ぶりをたすけてゐ
た。ヂヤツクは並べて坐らせられたセシルに氣をとられながらも、貯藏室から持つて來られた埃まみれ

39 の曇がさも厭はしさうだつた。ドクツールは反對にこの葡萄摘みの日の食事の習慣をすつかり尊重し
た。どれほど尊重したかと云ふのに、孫娘はそつと立ち上り、馬を馬車につけさせて、自分も外套にく
るまつた。と彼女がすつかり支度を終つたのを見た好人物のリヴァル老人は飲みかけのコップをテー
ブルに残したまゝ、主人側の憤慨をよそにテーブルを離れて、馬車に乗るなり馬の手綱を取り上げたのだ
つた。

彼等三人はかうして其のやうに、淋しい野道を歸つて來たので、たゞ前よりか少し窮屈に寄り添つて
ゐなければならなかつたといふ理由は、馬車そのものは大きくならなかつたからだ。そして滅茶々に
いたんだ發條は、道々鳴りつゞけてゐた。がこの音にしても、私は殊に多い星が澄み渡つた空に降りか
かる金の雨のやうに追ひかけて來る此の馳走の樂しさを少しも減じはしなかつた。人々はこのあたりに
多い貴族の居城をめぐる塀に沿うて走つた。木々は枝を伸ばして車を撫で、塀のはづれは多くの場合思
はせぶりな小亭になつてゐて、その過去をば暗闇にひめてゐるやうに、すべての鎧戸が閉ざされて
ゐた。片方はセーヌ河で、たゞ開門看視人の家があるばかり、河の上には流れのまに／＼長い筏や荷足
舟が前後にともした灯を静かに水にうつしながら降つてゆくばかりだつた。

『ヂヤツク、寒い事は無いかい？……』

豫

ドクツールが訊ねた。どうして寒くなどあつたらう。セシルの大きなショールが縁で彼にさはつてゐた。

後 し、彼の思ひ出は陽で輝いてゐた……

ザ あゝ！ このやうな楽しい日にどうして明日といふものがなければならなかつたのだらうか？ 何故
ク ヲ 現賢が私達を夢から引さ戻さなければならぬのだらうか？ 今ヂヤツクは自分がセシルに戀してゐる
事を知つてゐるが、彼はまだ、その戀が二人を限りなく苦しめるものだといふ事を考へないではゐられ
なかつた。彼女は彼の手の届かない高い處に居るのだ。たとひ彼女の傍に暮してゐて、彼が大いなる變
化をし、醜い上皮を幾別脱ぎ捨てたとは言へ、彼は自分をそのやうに變らせた美しい仙女に恥ぢないも
のとは考へられなかつた。たゞ彼女が自分の情熱を察してしまつてゐるにちがひないといふ考へが彼
女の傍に居辛くさせた。その上健康も彼に還つて來た。そして彼は藥部屋で終日何もしないで遊んでゐ
る事を恥かしく思ひ出したのだ。セシルはあんなにも甲斐々々しく、あんなにも働き者だ！ 若しも彼
が何時までもぐづくしてゐたら何と考へるだらう？ どのやうな事があつても出て行かなければなら
ない。

或る朝彼は禮を言ふためと、その決心を打明けるためにムツシウ・リヴァルの室に這入つて行つた。
『お前の言ふ通りだ』 好人物は言つた『お前はすつかり強く丈夫になつた、働かなければならぬ……
お前の持つてゐる職工手帖でたやすく仕事は見付かるだらう。』
一しきり沈黙が続いた。ヂヤツクは胸が一杯だつた。そればかりかムツシウ・リヴァルが異常な注意
で彼を凝視してゐるのに少しばかりれてゐた。

40 『お前何か俺に言ふ事は無いかね？』

41 いきなりドクツールが言つた。

ヂヤツクは眞赤になつてうろたへながら答へた。

『いゝえ、リヴァルさん。』

『あゝ！……だが俺は、年寄の祖父のほか親といふものを持たない娘を戀したとすれば、その祖父に
許しを願はなければならぬものだと思ふがね。』

ヂヤツクは返事をするかほりに兩手で顔をかくした。

『何故泣くのだ、ヂヤツク？ 心配する事はない筈だ。かうして俺から言ひ出す位ぢやないか。』

『おゝ！ ムツシウ・リヴァル、そんな事が出来るでせうか？ 僕のやうなつまらない労働者が！』

『さうでなくなるやうに勉強するがよい……それから浮び上る事が出来るのだ。聞きたければ教へ
よう。』

『夫ばかりではありません……そればかりぢや無いのです。貴方は一番大切な事を御存じないのです。』

僕は……僕は……』

『さう、俺は知つてゐる、お前は私生兒だ。』

ドクツールは靜かに言つた……『ところであの娘もさうだ、私生兒なのだ。そればかりぢやない、もつ
と痛ましい……さあ、もつと傍に來て俺の話す事を聞くがよい。』

三 リヴァル家の不幸

彼等はドクソールの書齋に居た。窓からは美しい秋の景色、葉の落ちた並木の植わつてゐる田舎道が見えてゐた。その又向うには十五年前から閉ざされた儘の、元の古い墓地の丈の高い草に埋もれた水松と、他の場所よりもいたみつけられた墓場の土のくづれで傾いてゐる十字架が見られた——『お前はただ一度も彼處に行つて見ないのだね』遠くから古い墓地を指差しながらムツシウ・リヴァルはデヤツクに言つた……『彼處の茨の真中にたゞ一字マドレヌと記したゞけの白い大きな石がある筈だ。その下に埋つてゐるのが俺の娘、セシルの母親だ。彼女は俺達から離れて只一人別に葬られる事、それと両親の苗字を名乗る資格が無いのだと言つて、墓の石に自分の名前だけを書く事をたつて望んだのだ……可哀想に！ それほど正直で高潔だつたものを……でどうあつてもその決心を動かす事は出来なかつたのだ。解るだらう、二十一やそこらの若い年で死なせてからが、たつた一人きりで眠らせて置かなければならぬと考へるのは俺達にとつてどんなに辛い事だつたらう！ が死者の望みは成就しなければならぬ。それによつて彼等はなほ私達の間に生きてゐるのだ。かういふわけで彼女はその望み通りたつた一人きりで居るのだ。しかし彼女にはかうして死んでから、ひとりぼつちにされるやうな罪があるのぢや無い。若しも罰せられなければならぬものがあつたとすれば、それは寧ろこの俺だ。取返しのか

ないといんでもないうづかりで我々の不幸を醸し出した此の老いぼれの馬鹿者だ。

今から十八年前のちやうど今と同じ十一月の或る日だ。毎年セナルの森で三四回はれる大規模の獵の間に起つた事件で呼びに來られたのだ。驅り立ての最中に一人の狩獵家がルフオシウ家の誰かゞ撃つた弾丸をそつくり脚に受けてしまつたのだ。俺が行つた時怪我人はアルシャンボウの家の大きな寢臺の上に運ばれて來てゐたのだが、三十ばかりの逞しい男で、ブロンドの頭を少しちよめて、眉毛の下にはそれは澄んだ眼、白い氷のために際立つてさう見えるやうな北國人らしい眼を持つてゐた。彼は一つ宛丸を抜き取るのを立派に堪へた。そして手術がすむと、歌をうたつてゐるやうな優しい外國人口調の、訛りのないフランス語で禮を言つた。他へ移すのが危険だつたので、番人の家に置いた儘で、續けて俺が療治をしてゐた。俺は彼がロシアの貴族である事を知つた。ナジヌ伯爵、狩獵仲間はかう呼んでゐた。

傷はひどかつたにも拘はらず、ナジヌは直きと危険を脱する事が出來た。若いのと丈夫なのと、それからメール・アルシャンボウの手厚い看護のお蔭だつたが、相變らずよくは歩けなかつた。それに俺は彼のひとりぼつちがどんなに辛いか、贅澤な上流社會の生活に慣れた若者にとつて、何處を見ても木の枝ばかりの森の中で、無口のアルシャンボウの煙管だけしか友達の無い病上りの冬がどれ位苦しかつたか解つてゐたので、時々俺は往診の歸り道に馬車に乗せて家に連れて來た。夕飯を私達と一緒に執り、天氣のあまり悪い時などは時々泊つて行つたのだ。

正直な話、俺はこの悪漢（しんがの）にすつかり感心させられてゐた、何處でどうしてあれだけの事を知つてゐたか俺には判らない。が實際彼は何も彼も知らない事がなかつた。航海もしてゐた。軍人だつたのだ。海軍や戦争の事も知つてゐた。家内には自分の國の藥について教へ、娘にはウクライナの民謡を教へた。俺達はすつかり彼に魅せられてゐたので、殊更自分がさうだつた。夕方馬車の中で揺られながら雨や風に打たれて行く時、俺は自分の家の火の傍に彼の姿を見出す事を考へるのが嬉しかつた。そして心の中で眞闇な夜道の涯（たて）に自分を待つてゐるあかるいグループの中に彼を仲間入りさせてゐたのだ。家内はこのひつきり無しの入りびたりに大分反對したのだつた。さうした取越苦勞は、あんまり俺が呑氣すぎる

ところから起つた癖だつたから俺は少しも氣にかけなかつた。

その間に怪我人はだん／＼、恢復して行つて、冬の残りを巴里で過されるだけの體にさへなつた。が彼は立たうとしなつた。此の土地が氣に入つて、夫で引き留められてゐたのだ、どのやうな絆で？ 俺は考へて見ようとも思はなかつたのだ。

と或る日家内が自分に言つた。

『ねえ、貴郎、ムツシウ・ナジヌは釋明なさるか、それでなければ之程始終家に來ないやうにして貰はなければなりません。マドレヌの事で人がいろ／＼と言ふやうになつたのです。』

マドレヌ？…… 馬鹿な？……

44 俺は伯爵がエチオルを去らないのは俺の爲、毎晩のチャツケの勝負の爲、グロツグをやりながら時

45 のたつのも忘れてゐる海上生活の思ひ出話の爲だとばかり無邪氣に考へてゐたのだ。大馬鹿者！ あの男が這入つて來る時の娘の様子を氣を付けて見さへすればよかつたのだ。顔を赤くして刺繡に精を出す様子、彼が傍に居る時ちつと黙つてゐる様子、窓に凭りかゝつて彼が遣つて來るのを待つてゐる娘の様子に氣が付さへすればよかつたのだ。しかし見ようとならない眼に何も見える道理はない。俺は盲目だつたのだ。しかしマドレヌが母親に彼等の戀し合つてゐる事を打明けて見れば、どうしても事をあきらかにしなければならなかつた。俺は彼の釋明を聞くためにすぐと伯爵を訪ねた。

なるほど彼は釋明した。淡白な眞實の調子で俺の胸に響いた。彼は娘を戀してゐたのだ。そして頑固な貴族主義のその家族が自分達の計畫に反對するにちがひない種々な邪魔を打明けた上で、娘を所望するのだつた。又彼は最早結婚するのに親の承諾がいらぬ年になつてゐる事、それに第一彼が持つてゐるだけの財産に自分がマドレヌにやる物を一緒にすれば十分家を持つて行かれる事を言ひ足した。俺には財産のあまりかけへだてゝゐる方が怖しかつたに違ひない。で彼が話した財産の少いといふ事がすぐと自分を魅し去つた。それと若殿様と云つたやうなうぶな態度、すべてを譯なくきめてしまふ簡單さかげんと、何にでも眼をつぶつて署名するといつた無雜作加減……とどのつまり彼は俺達の未來の婿として居つてしまつたので、今でもまだ一體どの入口から這入つて來たかを疑つて見る位だ。その時分俺にしても少しばかり早まり過ぎ、滅茶苦茶過ぎると思はないでは無かつたのだが、娘の幸福といふ事に眼を眩まされたのだ。それで母親が『よく調べて見なければ、行きあたりばつたり娘を遣る事は出來

ク ヲ ヲ
車の奥に寄添つてゐた二人の姿が今も俺は眼に残つてゐる。それがやがて嬉しげに舞ひ上る埃の雲につつまれて、鈴の音と鞭の音を聞くばかりになつた。

すべてかうした場合行く者は幸福だつたが残る者は不幸だ。夕方母親と俺とで食卓につく時二人の間に空いてゐる場所はたまらなく淋しく感じさせた。それに事があんまり早く運んだので、俺達は別れる覺悟をする暇さへもなかつたのだ。俺達はぼんやり顔を見合はせてゐた。それでも俺には外、往診と病人があつた。が可哀想な母親は居ない娘を思ひ出させる家の中のすべての隅で、悲しみ悔んでゐるばかりだつた。之が女といふものゝ運命だ。彼女等のすべての悩み、すべての喜びは家の肉親から出るので、すべて夫等は其處に集り、其處にこびりつくので、彼女が片付けてゐる衣裳戸棚や、針を運んでゐる刺繍の中にも見出されたのだ。仕合せな事にビーズからもフロランスからも來た彼等の手紙は愛と日光に照り輝いてゐた。それから俺達は子供等の事で時を過した。俺は家のすぐ傍に彼等のために小さな家を建てさせたのだ、壁紙や家具を擇ぶのに頭を使つた。それから毎日噂ばかりしてゐた『今はどこそこに居るのだ……遠くなつた……少し近く迄歸つて來た。やがて俺達は旅人が夫よりも先廻りをする氣で出す事のある歸途かへりみちからの手紙を待つてゐたのだ。

48
或る晩俺が大層おそく、家内が寝てしまつた後で往診から歸つて、此處で一人食事をしてゐると、庭を急いで來る足音が聞えて、やがて階段を昇り始めた。戸があいた、娘だつた。もはや一月前のあの美しい若い娘ではなかつた。瘦せて、蒼ざめて、すっかり様子が變つてゐた。粗末な着物をまといつて旅行

49
鞆を提げ、氣が觸れたみたいになさん／＼な様子をした可哀想な女ぢやないか。

『私です……歸つて來たのです……』

『あゝ！一體どうしたのだ？ でナジヌは？』

彼女は返事をしなかつた。眼を閉ぢてぶる／＼震へ出した。私わががどんなに心配したかは解るだらう！

『頼む！ 聞かせてくれ、娘！……お前の良人は何處に居るのだ？』

『私には良人は無いのです……もう無いのです……前にも無かつたのです……』

そしていきなり俺の傍、ちやうど今お前が居るところに腰をかけると、俺の顔を見ないやうにしながら、彼女は小聲で怖い其の物語りを始め出した。

彼は伯爵でなど無い、ナジヌと云ふ名でも無いのだ。レッシユといふ猶太系の小亞細亞人で偽物師いかりのしの山師、何一つどれが職業ときめるだけの力がなくて何もかも遣るといふ態の人間なのだ。彼はリガでも結婚した、サン・ペテルスブルグでも結婚した。彼の書類といふのは眞赤な嘘で自分勝手に作つたものだ。彼の財源は露西亞の銀行の手形を上手に偽造するのにあつた。犯罪人引渡條約に依つてチュランで逮捕されたのだ。知らない町でいきなり良人から引き離され、しかもその男が重婚の手形偽造者だと判つた娘の心はどんなだつたらう。何故なら悪漢は彼女にすっかりその悪事を白狀したさうだ。彼女は只一つの事より考へなかつた。茲俺達の處へ逃げて來ようと云ふのだつた。どれだけ氣が顛動してゐたか、後になつて自分で言つたのだが、停車場で驛員から何處に行くのだと聞かれて『彼處へ、お母さんのと

「ころへ！」と言ふなりどうしても他の言葉が出て来なかつたさうだ。彼女は買つて貰つた着物や寶石や何もかもをホテルに残した儘で一氣に逃げ戻つて来たのだ。たうとうこの隠れ家、この塙に辿りついて彼女は其の災難以來始めて泣いたのだ。

「泣いてはいけない……静かに……お母さんをおこすぢやないか！」

しかし俺は彼女よりもなほ酷く泣いてゐた。
翌日家内はすべてを知つた。彼女は少しも俺を責めなかつた。「私にはこの婚禮できつと何か不幸が来る事がよく解つてゐたのです。」彼女はさう言ふのだ。彼女は此の男が出入りを始めた最初の日から豫感があつたのだ。あゝ……俺達醫者の診断を不思議がるものがある。が運命が或る婦人の耳に囁くかうした警告や密語と比較する事は出来ない。娘が歸つて来た事はぢきと村中に知れ渡つた。

「やあ、リヴァルさん！ 娘さん夫婦は歸つて来たさうですね。」

人々は様子を訊ねようとした。が俺の顔を見て自分が幸福で無いといふ事を知つた。皆は伯爵の姿が見えない事、マドレヌも母親もそれ以來少しも外に出なくなつた事に氣が付いた。間もなく俺は憐憫に満ちた同情の眼を自分の周囲に感じて、何よりも夫が苦しかつたのだ。

50 それにしても自分はまだ俺の不幸を根こそぎ知つてゐなかつた。娘は祕密を打明けてゐなかつた。此の虚偽で不合理で不名譽の結婚から子供が生まれようとしてゐたのだ……その時の家の中はどれほど悲しいものだつたらう！……家内と俺ががっかり黙り返つてゐる間でマドレヌは産衣を縫つた。世の母親の

51 誇りと喜びであり、そして少くとも俺の考へでは、彼女に羞恥なしで見る事が出来なかつた小さな着物や其の他の物をリボンやレースで飾つた。彼女を欺いた悪人についてならば夫がどのやうに些細なほめかしであつても彼女は色が蒼ざめて體が震へた。「あの事」に就いての考へはまるで「けがれ」のやうに彼女を惱ましたのだ。が俺よりもよく事が解つてゐた家内は時々自分に言つた「貴郎は間違つてゐます……あの娘はまだ確かに彼を愛してゐるのですよ。」さう、彼女は彼を愛してゐた。それで侮蔑と憎悪がたとひどれだけ強くても、彼女の心の中の愛はより以上に強かつたのだ、彼女を殺した原因はたしかにさうした破廉恥漢を何時迄も愛してゐる事の悔恨にちがひなかつた。何故といふのに彼女は、孫娘のセシルを俺達に與へると四五日して死んでしまつたのだ。死んで行くのに只夫だけを待つてゐたみたいだ。枕の下に、俺達は、ナジヌが結婚前に書いた只一通の手紙の、涙で字も判らなくなつてゐるのが疊んだまゝぼろ／＼になつてゐるのを見付けた。彼女は何度も讀み返してゐたのだ。が何處までも彼女は誇り高く夫をかくしてゐたので、確かに唇に出かゝつてゐたその名前を只一度も口に出す事なく死んでしまつたのだ。

幸不の家ルアヅリ
かうした村里の穩かな小さい家にも、ロンドンとか巴里といったやうな大都會の雜沓の中にでもありさうな複雑な悲劇かひそんでゐようとは、チャック、お前は驚かされたにちがひない。でかうした運命が生垣や榛の木の林のかげにすつかりかくされた一隅を偶然脅かす時、俺は畑のふちに立つてゐる百姓とか、學校歸りの子供を殺す戦争の時の外れ弾を思ひ出させられる。同じ盲目の野蠻沙汰だ。

若しも孫娘のセシルが居なかつたら、家内は娘と一緒にきつと死んでしまつたにちがひないと思ふ。その時から彼女の生活は止めどない悔恨と非難の永い沈黙に他ならなかつた。お前も見て知つてゐる……が子供を育てなければならなかつた。その不幸な生れをかくして、家の中で育てなければならなかつた。何といふ難しい役目だつたらう！ 父親は判決がすんで何ヶ月目に死んだので、成程その方の心配は無くなつた。が困つた事に村に二三人すつかり譯を知つてゐる者があつたのだ。でお喋舌がセシルの耳に這入らないやう、わけても子供達が罪の無い笑顔で聞いたゞけの事をすつかりぶちまけてしまふ無邪氣な慘酷を怖れなければならなかつた。お前の知つてゐる通り、お前を識る迄はあの子はほんとの一人ぼつちだつた。かうした用心のおかげで、あの子は今でもどのやうな怖しい暴風雨の中で自分が生れたかといふ事を知らないでゐる。只孤兒だといふ事だけは言つてゐる。そしてリヴァルといふ苗字を名乗つてゐるのは、母親が親類同士結婚したからだと思つてゐるのだ。

どつちみち普通から言つてひどくお喋舌好きなかうした小さな村の誰も彼もの暗黙の了解は世の中に譯の解つた人が澤山居るといふ事の證據だ。俺達の不幸を知つてゐる人達の中で誰一人として、セシルの前で言はれては困るやうな事を言ひ出す者もなければ、その揺籃のまはりで演じられた悲劇を一寸でも暗示するやうな言葉を出す人も無い。さうではあつても可哀想なお祖母さんを續け様の不安から救ふ事は出来なかつた。わけても彼女は子供の質問を怖れたので、自分にしても同じ事だつた。が俺は俺で、より慘酷、より深刻な心配があつたのだ。遺傳の神祕といふものは實に怖しい！ 俺の娘の子供が

生れながらに恐るべき何かの素質、悪人達が彼等の子供に他に譲る物が無くて屢々残す事があるその惡の遺傳を持つてゐるはしないかといふ事だ。さうだ、チャック、俺は彼女のすべてを知つてゐる、お前に夫を言ふ事が出来る、俺は絶えずあのきよらかな面ざしの裡に父親の姿が現はれ出はしないか、無邪氣な聲の中に、女のべたつきで一層頹敗した父親譲りを見付けはしないかといふ事を怖れたのだ。が子供の裡に一層立ち優つた母親の傍、さうだ、人が哀惜の切なる思ひに一層心を惹かれたながら、追憶を以て描く肖像畫とも言ふべきものが完成されて行くのを見た自分の誇りと喜びは又どれ位だつたらう！ 俺はあの善良な、が少し揶揄するやうな笑ひ、柔和ではあるが誇りを持つたマドレヌのよりもつと誇りに富んだ眼、優しいそれであつて「否」といふ事がはつきり言はれる威嚴を持つた口と、祖母のあらゆる端正な點、その勇氣と信念とを彼女に見出した。

しかし未來を考へて俺は身震ひせずにはゐられなかつた。孫娘は何時迄も自分と俺達の不幸を知らずにはすまない。役場の帳面が大きく開かれなければならぬ時がある。夫で彼女はエチオルの夫に「父不明」といふいたましい文句と共に記されてゐるので、若しも彼女が誰かを戀し、そして其の男が彼女を私生兒で、手形偽造者の子だと知つて引下らうとする時にはどのやうな事になるだらう。『あの子は私達しか愛しはしないでせうよ。結婚なんかしないでせう……』祖母はさう言つた……がそんな事が出来るだらうか？ 俺達が死んでしまつたらどうなるのだ？ あの子は美しさで保護者無しに生きてゐるといふのは何といふ悲しい、そして何といふ危険な事だ！ がどうすればいゝのだ？ あのかうした特殊な運命

ナは同じやうに特殊なそれとでなければ一致する事は出来ない。何處に行つたら夫が見付けられるだらう？ 村では駄目だ。其處では銘々の家の内部は明るみにあけつばなしにさらされてゐるので、お互はお互を知り、見張り合ひ批判し合つてゐるのだ……巴里には誰も知合ひが無かつた。おまけに巴里は怖しい淵だ……とちやうどその時お前のお母さんが村に住むやうになつたのだ。誰もあのデルジャントンと結婚してゐるのだと思つてゐた。が俺はつきあふやうになつた時、アルジャンボウの女房から正當の夫婦で無いといふ事を極く内證で教はつたのだ。それは俺にとつての『光明』だつた。俺はお前を見て心で思つた。『之こそセシルの良人になる者だ』この時から俺はもうお前を自分の孫のやうに思つてゐたので、お前を教育する事を始めたのだ……

おゝ！ 勉強がすんで、お前達二人が薬部屋で、お前は彼女よりも強く逞しく、彼女はもはやお前よりも理性に眼覺めながら、さも幸福にさも仲善くしてゐるのを見ながら、このお互が惹き合つてゐた無邪氣な友情の前にどれだけいとほしく、深く心を動かされたらう。それでセシルが清い小さな魂を一層お前にひらき、お前の知識が一層磨かれて熱心に高尚な事物に心を向けようとすればするだけ、俺は一層自分の考へが誇らしくも満足でもあつたのだ。俺は心の中ですべての計畫を立てゝゐた。二十になつたお前達がかう俺達に言ひに来る姿を心に描いてゐた。

54 『お祖父さん、私達は愛し合つて居ります。』
そして俺は答へるのだつた。

55 『お前達は愛し合はなければならない。強く強く愛し合はなければならない、世の中から捨てられた可哀想な者達よ……何故なら世を渡るのに、お前達はお互に助け合つて行かなければならないのだ。』

夫だからこそあの男がお前を職工にしようとした時にあんなにも酷く腹を立てたのだ。俺は自分の子供、セシルの婿を取り上げられたやうな気がしたのだ。ちやうどお前自身が突き落されたと同じだけの高さから放り出されたみたいに俺の素晴らしい計畫は滅茶々にされてしまつたのだ。どれだけ俺はあの氣狂ひ共と、其の人道主義的計畫といふものを呪詛した事か！ が自分はまだ一つ望みをつないでゐた。俺は考へた。『少年時代の烈しい試練は度々人間を立派に鍛へるものだ。若しもチャックが悲しみに打ち克つて、澤山本を読み、腕を働かせながらも頭は理想を捨てないでゐたら、自分が彼のものときめてゐる女に恥ぢない者であり得よう。』お前から来たあんなにも優しくあんなにも高尚だつた手紙は一層この考へを深くさせた。俺はセシルと一緒に夫を読みながら毎日お前の噂をしてゐた。

と突然あの盗みの話だ。あゝ！ 俺は叩きのめされたみたいだつた。俺はお前の生涯をあやまらせたお前のお母さんの弱氣とあの野郎の壓制をどれだけ恨んだか解らない。が俺は孫娘の心の中の、お前に對する同情と愛とを尊敬した。で俺は彼女が最初の當外れをよりよく耐へ忍ぶために、もう少し年をとつて一層堅固な理性が眼覺めるのを待たうとしたので、すぐと彼女に知らせる事はとても出来なかつたのだ……それに第一俺はあの娘の母親の例で見ても、其處に投げられた總べてが根を張つて障礙があればあるほど一層強くなるといふそれは執着の強い地面のある事を知つてゐた。俺にはお前といふものが

ク　ツ　ヤ　チ
あの小さな心の中に堅く根を下してゐるのが解つてゐた。で其處から抜き取るために時の経過と忘却といふ事を當にしてゐた。ところがさうぢやなかつた、すべては何の役にも立つてゐなかつた。俺は夫をあの森林監視人の家でお前に出逢つた日、翌日お前が来る事をセシルに話した時に解つたのだ。どのやうに眼を輝かせ、一日中どれだけ熱心に働いたらう、お前に見せたかつた、さうするのが彼女のきまりだつた。彼女がはげしく感動した事はその一層の勤勉で知られるのだ。まるで惶しい心臓の鼓動をベツなり針なりの運動で規則づけようとするみたいだ。

56
そこでチャックお聞き。お前は娘を愛してゐる。お母さんの無分別がお前を陥し入れた身分から浮び上つて彼女を贏ち得るかどうかと問題だ。俺はこの二月の間よく／＼お前に氣をつけてゐた。精神も肉體も健全だ。さて茲でお前がしなければならぬのは醫者になるために勉強する事だ。そしてエチオルで俺の跡を繼ぐ。最初はお前を此處に引き取らうと考へたが、開業免狀をとるために――茲の田舎ではそれで十分だ――四年間はみつしり勉強しなければならぬ。で其の間お前が此處にゐる事は今話して聞かせた悲しい物語りを今更村の者に思ひ出させる事になる。夫に自分で自分の麵麩を得ないといふ事は正しい人間にとつて苦しい事にちがひない。お前は巴里で二通りの生活をするのだ、晝間は職工をする、そして夜は自分の室でなり、臨床講義でなり。又は諸方の夜學に行つて勉強するのだ。毎日曜日は此處へ来る。俺は一週間のお前の勉強を調べてあげる。そしてセシルに逢つて勇氣をつけられる……俺はお前なら確かに出来る、しかも早く出来ると思つてゐる……お前がしようとする事はヴェルボーや

57
その他大勢がやつた事だ。どうだ、遣つて見るかい？　この努力の果にはセシルが居る。』

チャックはどれだけ感動し、どれだけ狼狽したらう。彼が聞かされた話はそんなにも哀れ深く不思議だつたし、彼のためにひらかれた未來の道はそんなにも美しかつたので、彼は只一言の返事の言葉を見出す事が出来ず、答へる代りに善良な老人の頸つ玉に飛びついた。

が一つの疑ひ、一つの怖れがまだ彼に残つてゐた。多分セシルは彼に對して姉妹としての友情しか持つてはゐないだらう、それに四年とは随分長い、彼女は夫迄待つ事を承諾するだらうか？

『いや！』ムツシウ・リヴァルは快活に言つた『それは全く銘々同士の事で俺には返事が出来ない……が俺が許すから自分で確めて来るがい。彼女は階上^{あへ}にゐる。今上つて行く足音がした、行つて話しておいで。』

彼女に話す！　夫は大層難しい事だつた。心臓が破れるばかりに高鳴り、感動に胸が塞る、さうした時、只一言でも言つて見るがい。

セシルは薬部屋で何か書いてゐた。チャックには嘗て、それどころか七年目に始めて逢つた其の日さへも彼女がこんなにも美しく、こんなにも氣高く見えはしなかつた。が彼も今朝からどれだけ變つてゐたらう！　昔の美が再びそのおもさしを氣高くし、おど／＼した様子はすつかり失はれた。

『セシル』彼は言つた『僕は之から行く。』

幸不の家ルアヅリ
此の出發の知らせを聞くと彼女は眞青になつて立ち上つた。

『僕は辛い仕事に歸つて行く。でも今ではもう僕の生涯の目富が出来たのです。貴女のお祖父さんが、僕が貴女を愛して来た事、貴女を僕のものとするために働きに行く事を貴女に話す事を許したのです。』

セシル以外の者だつたら、とてもその言ふ事が解らなかつたにちがひないほど、彼はそんなにも體を震はせ、そんなにも其の聲は低かつた。が彼女はよく聞き取つた。そして廣間の隅々で喚びさまされた過去が夕日の光の中で踊り狂つてゐる時、少女はこの愛の告白を十年の昔からのあらゆるその思ひ、あらゆるその夢の反響であるがやうに聞いてゐた……それに彼女は何といふ不思議な娘だつたらう。かうした場合良家の娘達がするやうに顔を染めたり、かくしたりする事無しに、涙をたゞへた眼に美しい微笑を泛べながら立つてゐた。彼女は此の愛がさまざまの試練、永く待つ間の別れてゐる苦しみを味はなければならぬ事をよく知つてゐた、が彼女は一層ヂヤツクに勇氣を與へるために強くあらうとした。それで彼が彼女に其の計畫を説明し終つた時、その忠實な小さい手を彼に差出しながら答へた。

『ヂヤツク、貴郎のために四年間待ちます、何時迄も待ちます。』

四 カマラード

『おい、刀痕、お前鐵工所の方は知らないか？……この男は船に居たのだが職工になりたいと言ふのだ。』

ラバラーフルと呼ばれた、何かの事件を語つてゐる長い刀痕が斜めに顔を貫いて、職工服を着た丈の高い男は勘定臺に近寄ると、——何故なら職工連の雇入とか引抜きと言へば大抵場末の居酒屋で行はれたものだ——問題の職工を頭から爪先まで見上げ見下しながら、腕にさはつて見た。

『少し肉付きが悪いな、』しかつめらしく言つた『が、船にどれだけ居たかい？』

『三年です。』

ヂヤツクが言つた。

『ホウ！ して見るとお前見かけよりよつほど強いと見えるな。オベルカンプ通りのエイサンデツクへ行け。切斷機とバランスシエの方の職人を頼まれてゐる。職工長に逢つて、ラバラーフルから言はれて来たと言へ——さてそこで一本奢らないか？』

ヂヤツクは言はれた通り一本奢ると、教はつた工場に出て行き、一時間後には一日六法でエイサンデツクに約定が出来て、フオーブルグ・ジュ・タンブルの通りを眼を輝かし、頭を眞直に立て、工場か

ナ
ク ツ ヤ
からあまり遠くない下宿を探しながら歩いてみた。夕方になった。町は今では巴里の場末の休日となつて
ゐる月曜日のためにそれは活氣付いてみた。で坂になつた通りは街へ降つて行く人々と、昔の關所の方
へ上つてゆく人達のひつきり無しの往來で渦巻いてみた。開け放つた居酒屋の客は人道にまで溢れてゐ
た。廣い馬車通用門の下には、馬を放して轅を高く上げた荷馬車や樽運搬車が一日の終つた事を物語つ
てゐた。殊に運河の向うは何といふ騒ぎだつたらう、絶えず小川に沿つて曳いて行かれる手車のために
別にされてゐる切岸の上の小砂利道は何と云ふ雑沓だつたらう。夫等の車は食料品、安い野菜やお魚を
満載して居るので、女工達——毎日の仕事のために家を離れてゐる可哀想な女達——が間際になつて家
族の夕飯を買ひに集る振賣りの市場だ！ それから市場の叫びと巴里のどよみ、あるものは快活な癩高
い調子で、又或るものはゆつくりと單調にまるで呼ばはつてゐる品物のすべての重量を引き摺つてゝも
ゐるみたいだ。

鳩の雛は如何……

フライにいゝ鯨！ 鯨！

一東六リアールの水芹！……

60
ヂヤツクは此の雑沓にまぎれて風に鼻をさらしながら、消え残つた光の中に昏間の黄色い札を探して
歩いた。幸福な彼は自分の計畫してゐる職工と學生の二重の生活を初めるのを待ち遠しく思ひながら勇
氣と希望に充ち満ちてみた。人々は彼を押し、彼を小突いた。が少しも彼は氣が付かなかつた。彼は十

61
二月の夕方のこの寒さも感じなければ、摺れ違つた若い女達の言葉も耳に入らなかつた。「まあ、美男子
だよ。」たゞ彼はこの廣い郊外の町が彼の愉快と信念によくも調和し、暢氣できさくな巴里パリつ子氣質かたぎの奥
にある此の根強い上機嫌でもつて彼に勇氣付けようとしてゐるのを感じてみた。ちやうど此の時歸營ラ
ツバの音が往來で響いたかと思ふと、兵士の一隊がラツバのアンヂエリユスに足並を揃へて群集の間を
通り過ぎたので、子供達は口笛を吹きながら後を趁つて行つた。疲勞した周圍に投せられたこの力強い
調べを聞いただけで人々の顔は輝いた。

「生きてゐるのはほんとに幸福だ！ 何處迄も働かなければ！」ヂヤツクは歩きながら獨語を言つた。
突然彼は中折帽や烏打を一杯入れた四角い大きな籠に突き當りさうになつた。此の壁に寄せかけた籠を
見付けた彼の心にはすぐさまペリゼールの姿が浮んだ。此の籠が彼の物らしかつたばかりでなく、一層
さうと思はせたのはこの帽子の籠が革臭い靴屋の入口に置いてあつたので狭い硝子棚にはびか／＼光る
太い釘の頭で飾られた靴の裏がずらりと見えてゐた。

ヂヤツクは友達トーマカの行商人の絶間無い苦痛、寸法に合はせて拵へるといふ靴のつひぞ實現されない夢の
事を思ひ出した。そして店の中を覗き込んで、相變らず醜くはあつたが、小ざつぱりと、元よりは眼に
見えてよい服装なつをしてゐる帽子商人の間の抜けた姿を見付けた。ヂヤツクは彼に逢つた事を心から喜ん
だ。そして二三度硝子戸を叩いてから中迄這入つて行つたが、まだ彼は靴屋が出した靴を見るのに夢中
になつてゐて少しも氣が付かずにゐた。彼が買はうとしてゐたのは自分のではない、大きな頭を瘦せた

肩の上でぶら／＼振つてゐる五つか六つ位の青ぶくれの小さな男の子のだ。靴屋が編上げの靴を履かせて見てゐる間、ペリゼールは例の穩かな笑ひやうをしながら子供に話しかけてゐた。

『ねえ靴を履くといふだらう、誰のあんよがあつたかになるの！ ウエペール君のたな！』

『おや！ 貴方ですか？』

まるで昨日も逢つてゐたみたいな靜かな調子で言つた。

『どうだいペリゼール！ 何をしてゐるの？ 此の子は君のかい？』

『おゝ、いゝえ！ マダム・ウエペールの子供ですよ。』行商人は歎息をつきながら言つた。それには確かにかう云ふ意味が含まれて居たのだ。『若しも俺のやつたらな。』

彼は靴屋に向つて言つた。

『大丈夫ゆつくりしてゐるでせうね……趾が眞直に伸びてゐなければ……窮屈な靴を履いてゐるのは實際辛いからな！』

さう言ひながら氣の毒な男は自分の足を眺めてゐたが、そのがっかりしたやうな様子はマダム・ウエペールの子供の靴を寸法に合せて作つてやるだけ金持だつたらなと言つてゐた。それどころかかうして自分のを注文するなどは思ひもよらぬ事だつた。

62 さて子供に工合がいゝかを二十遍も訊ね、歩かせて見たり、足踏みをさせて見たりしたあげく、行商

人はポケットから赤い皮の長い財布を辛さうに取り出すと、銀貨を何枚か選り出して、下層社會の人達がお金を出さなければならぬ時にする、さも大事件だといったやうな様子で靴屋の手に渡した。

外に出ると彼はチャツクに向つて『どつちに行くのです？』と聞いたが、如何にもかう言つた意味が隠されてゐるやうな調子だつた。

『貴方が此方へ行くのなら、私はちやうど反對の方に用があるのです。』

此の冷淡ぶりが少しも了解出来なかつたチャツクは答へた。

『さう言へば僕も何方へ行つていゝか解らないのだ……僕はエイサンデツクの職工になつたので、工場からあんまり遠くない下宿を探してゐるのだ。』

『エイサンデツクの？……』郊外のすべての工場をよく知つてゐる行商人は言つた『彼處に這入るのはやさしい事ぢや無い。よつぽどいゝ手帖を持つてゐなければ。』

行商人はチャツクを眺めながら眼をしばだたき、彼は又よい手帖と言つた言葉ですべてが讀めたのだ。ムツシウ・リヴァルの時と同じだつた。此の男もやはり彼が六千法を盗んだと信じてゐたのだ。實際あの時の嫌疑はあゝして立派に晴らされてゐたにも拘はらず、不滅の汚點を留めてゐたのだつた。それでアンドレでの出来事を聞き、支配人の證明を見た時、ペリゼールの様子は忽ち變つてしまつて、しかめつつらの笑顔は昔と同じやうに土氣色の顔を輝かした……

ドーラママカ 『ではチャツクさん、下宿を探すにはもう時が遅いですよ。私のところにいらつしやい。何故なら私は

ナ 一本立ちになつたので、大きな室に居るのですよ。今夜は其處でお泊りなさい……いや、さうなさい……
ッ ……さうなさい……それに素敵な相談があるのです……が晩飯をやりながら話すとしませう……さあ、歩
ク いたり！」

さてそこで此の三人、ヂヤツクと行商人と新しい靴で元氣の出たマダム・ウエベールの息子は、ベリ
ゼールの住んでゐるパノアイヨ一通りの方へと歩き出した。道々彼はヂヤツクに向つて、ナントの姉が
寡婦になつたのを連れて巴里に歸つて來たので、もはや田舎廻りをしなくなつた事、それに商賣の景氣
も悪い方ではないと云ふ事などを物語つた……そして時々物語りの最中に例のシヤツポウ！ シヤツポ
ウ！ シヤツポウ！ の呼聲をかけるために言葉を罷める。其の道といふのは何處の工場にも馴染があ
る彼のいつも通る道筋だつたのだ。家に近くなつたところで彼は小さな聲でぐづり出したマダム・ウエ
ベールの息子を抱いてやらなければならなかつた。

64 『可哀想な坊主！ 歩き慣れないのですよ。ちつとも外に出ないので、それで時々私が連れて出てや
るために、寸法通りのこんないゝ靴を買つてやつたのですよ。母親は一日留守なのです。麵麩の配達を
してゐるのです。随分辛い仕事でさ！ 實際勇氣のある感心な女です……朝五時に出かけて晝迄麵麩を
運んで、一寸お晝を食べに歸つてから又夕方迄麵麩屋に働きに行くのです。子供は其の間留守番してゐ
るのです。隣の室のおかみさんが見てゐるのですが、誰もかまつてゐる事が出来ない時には、テーブル
の前の椅子に縛りつけて置くのです。火いたづらが危いので……さあ此處です。』

65

彼等が這入つて行つたのは澤山の狭い窓がずらりと列んでゐる職工達の住む大きな建物で、長い廊下
の中に甕やら、外套掛などがしつらへてあるのが、狭い部屋の中のどんなにこたく／＼してゐるかを物語
つてゐた。どの戸もあかつてゐて、煙と子供の叫び聲で一杯になつてゐる部屋の内部を覗かせてゐた。
ちやうど夕飯時だつた。ヂヤツクは通りすがりに、一本の蠟燭の光で食事をしてゐる人達を眼にし、裸
のテーブルの上で粗末なお皿の立てゝゐる音を聞いた。

『よろしうおあがり、皆さん！』行商人が聲をかける。『やあ、お歸り、ベリゼール！』一杯頬ばつた口
が親しみ深い嬉しさうな聲で答へる。或る處は又悲惨だつた。火もなければ燈も無い。女房と子供達か
この月曜日の夕方、父親が土曜日の給料の残りを持つて歸るのを待ちあぐねてゐるのだ。

行商人の室は六階の廊下の一番奥にあつた。ヂヤツクは此のみすぼらしい職工達の住居がまるで蜂の
巢の内部のやうに喰付き合つてゐるのを見た。で彼の友達はそのてつぺんを占領してゐるのだ。にも拘
はず可憐なベリゼールは大層得意だつた。

『見れば解りますが、私の室はなか／＼いゝですよ、場所も廣いのです……只一寸待つて下さい……そ
の前に子供をマダム・ウエベールのところに置いて行かなければ。』

カ マ ラ フー 彼は自分のに隣つてゐる戸の前の靴拭の下から鍵を捜し出すと、内部の事をさもよく知つてゐるやう
な様子で、夕飯のスープがお午ひるからとろ火にかけてあるストーブのところまで眞直に進み寄つて蠟燭に
火をつけた。それから子供をテーブルの前の高い椅子にく／＼りつけて、鍋の蓋を二つ玩具おもちゃに持たせた。

「さあ大急ぎで行きませう。マダム・ウエベールはもう直き歸つて來ますよ。子供の新しい靴を見てどんな顔をするか、観物ですよ……面白いぞ……何しろ誰が遣つた事だか判らない、氣が付く筈は無いですよ。この家には澤山人が居るんで、誰もあの子を可愛がつてゐますからね……あゝ！ きつと面白いですよ。」

彼は前もつてさんぐ笑ひながら、室の戸を開けた。天井裏の細長い室で、硝子張りの寢臺置場で二つに割られてゐた。帽子の類の高く積み重ねてあるのは主人公の職業を物語り、裸の儘の壁はその貧しさを語つてゐた。

「そりやさうとペリゼール、では君はもうお父さん達と一緒に居ないのだね。」

「さうなのです。」行商人は間誤付いて、かうした時の何時もの癖で頭をかきながら答へた。「さうですよ、大人數の家内ではどうもうまく事が行きません……マダム・ウエベールは私が自分は少しも得をする事無しに皆のために働くのは正しくないといふのです。彼女は私に別居しろとすゝめてくれました……なるほどかう遣り始めてから、二倍儲けられるのです。親達を養つた上で、まだのけて置く分があるのです。マダム・ウエベールのおかげです。全く頭の女でさ！」

語り語りペリゼールはランプをともし、商品を片付けて、夕飯の支度にかゝつた。燻製の鯉で味をつけた馬鈴薯のサラダで、三日も前から火にかゝつてゐたので素敵な味になつてゐた。彼は白木の戸棚から、花のついたお皿を二枚と錫のフォーク類を一揃と、もう一揃は木のを、それから麵麩と葡萄酒とラ

67 ジ(赤い小蕪)を取り出して、戸棚と一緒に場末の指物師の手で作られた跛の食卓の上に並べた。それにしても行商人は室と同じに道具についても大得意で、それは大した品物を持つてゝもゐるやうな斷乎とした調子で『戸棚、食卓』と言ふ事を憚らなかつた。

『さあ、食卓につきませう。』

意氣揚々と指差しながら言つた。實際大したものだつた。新聞紙をひろげたのがテーブル掛の役目を勤めてゐたので、雜報がチャツクのお皿の下に、政治記事は麵麩とラジの間にあつた。

『あゝ、何時ぞやの貴方の御馳走のハムとは較べられませんか……實際、素敵なハムだつた……あんな他では一度だつて食べはしませんでしたよ。』

お世辭で無しに馬鈴薯も又大變結構だつた。チャツクはその通り言つた。ペリゼールは賓客がおいしがつて食べるのにすつかり喜んで亭主ぶりを發揮しながら、灰の上に載せてあるお湯が沸つたかを見るため、曲つた膝の間で珈琲を挽くために絶えず席を立つた。

『ねえ、ペリゼール！ 何も彼も揃つてゐるぢやないか！ 一世帯あるね。』

『おゝ！ 此の中には私ので無い物が澤山あるのですよ……マダム・ウエベールが貸してくれてゐるのです、濟ませる迄……』

『濟ませる迄？……何をペリゼール？』

「婚禮を濟ませる迄。」行商人は勇敢に言ひはしたが、兩方の頬べたを眞赤にした。それからチャツクが

サ 冷やかさないのを見ると、後を續けた。「此の事は少し前から相談が出来てゐるのです。それでマダム・ウエベールがもう一遍結婚をする氣になつたのは私にとつては全く思ひがけない大きな幸福でした。彼女の前は前の良人に酷い眼に逢はされたのです。酒呑みで、呑むと撲つたのです……あのやうな美しい女に手をあげるなんて……それに勇氣があつて親切で……あゝ！ 私は決して打つたりしません、それで彼女が撲ちたかつたら、私はいつでも撲たれます。」

『で、何時家を持つつもりなの？』ヂヤツクが訊ねた。

『あゝ、それで！ 私は直ぐにもしたいのです。ですが理性のかたまりと言つたみたいナマダム・ウエベールは、物價が高いから私達だけではとても世帯が持ち切れない、でカマラードを置かうと言ふのです。』

『カマラード？』

『さうですよ……場末の貧乏人がよくやるのです。獨身者か鰥の同居人を見付けて、食事にしろ、何にしろ共同にする。泊めてやつて洗濯もしてやる。お互に大した儉約でさ！ 二人前も三人前も殆んど同じ事ですよ……たゞ難しいのはよいカマラード、眞面目で働き者で、家の中をだらしないやうな人間を見付ける事です。』

『それぢや僕は、ペリゼール？ 僕は眞面目だと思はないかい？ 僕ぢや駄目かい？』

63 『本當ですか、ヂヤツクさん、さうする氣がありますか？ さつきは私もさう考へたのです。でもよう

69 言ひ出されなかつたのです。』

『何故？』

『夫はです……私達のところは本當にみすばらしいのです……名前だけの世帯です……多分私達の暮し方では、日に六法も七法も取りなざる貴方にはあんまり酷過ぎませうよ。』

『いや／＼ペリゼール、どんな暮し向きでも僕には決して酷過ぎると云ふ事は無い。僕は儉約をしなければならぬ、ごく／＼眞面目にしなければいけないのだ。何故つて僕も結婚をするつもりだから。』

『へえ？……それでは今の事は駄目ですね……』

行商人はがつかりして言つた。

ヂヤツクは笑ひながら彼の結婚は四年過ぎてからでなければ出来ない事、しかも其の間一生懸命に勉強しなければならぬのだと云ふ事を説明した。

『それではもう定まりました。貴方が私達のカマラードです、本當の、何時迄もの……ですが出逢つたのは本當に幸福でした！……坊やの靴を買ふ氣にならなかつたとしたら……おや！ 靜かに……マダム・ウエベールが歸つて来ましたよ。面白い事になるぞ。』

力強い急ぎ足の男みたいな足音が階段と手摺をゆるがした。子供は聞き付けたと見えて鍋の蓋でテーブルを叩きながら、犢のやうな叫び聲をあげてゐる。

ドーラマカ 『お待ち、お待ち、坊や！……泣くのぢやないよ』

ナ 麵麴の配達女は廊下から子供をなだめてゐる。

ツ ヤ 『聞いておいでなさい……』ペリゼールは小聲で言つた。戸のあく音がした。それからたまげたやうな叫び聲に續いて若いよく響く笑ひ聲が聞えた。其の間ペリゼールの顔は満足らしくしかめられてゐた。

壁の板が薄いので、あたりの室一面に響き渡るやうなこの騒々しい満足の表現から、二人は壁越しに聲を懸け合つたが、やがて彼女はこの天井裏へ姿を見せた。三十から三十五位迄の逞しい大女で、麵麴の配達女が粉をかぶらないために着る涎掛けみたいなものゝ付いた藍色の上つ張りにくるまつてゐたので、よく整つた胸を一層引き立たせてゐた。

『あゝ！ 戯談屋！』彼女は子供を抱いて這入つて来るなり言つた……『お前さんでせうこんな眞似をしたのは？……がまあ、此の子を見て御覽なさいよ、いゝ工合に靴を履いてさ。』

そして彼女は笑つた、笑つた、眼尻に涙を溜めながら。

『ねえ、隅に置けませんよ……』ペリゼールも體を振つて笑ひながら言つた『どうして私だといふ事が判つたかしら。』

此の大層な喜びが静まると、マダム・ウエベールはテーブルの前に坐つて、前身は芥子壺か何からしいで珈琲を一杯飲み、それからチャツクが未來のカマラードとして引き合はされた。

70 彼女は最初この話をそれほど氣乗りするでもなく聞いてゐたが、この大層上品な候補者をよく／＼観察した上、チャツクとペリゼールは十年も前からの知己だといふ事を聞かされ、おまけに彼女の前に居

71 るその人がもはや何遍となく聞かされた例のハムの物語りの主人公であると知つた時、彼女の顔は忽ち不安を去り、そして彼女はチャツクに手を伸ばした。

『あゝ、それではペリゼールも今度こそは大丈夫ですね……貴方はあの人がどんなかを知つてゐますね。ほんとに人が好いつたら。もう半ダースやそこらカマラードを引張つて来て見せるのですけれど、中でも一番ましなのが絞^{しぼ}り首にするのに繩を使ふのも惜しいといふやうな代物なのです。人がよすぎで、ほんとに埒が無いのですよ。家の者の爲にどれ位苦しめられてゐたかと思ひますか？ 全くの犠牲、駄馬の用をさせられてゐたのですよ。皆を養つてやつて馬鹿にされてゐるのです。』

『おゝ！ マダム・ウエベール……』家族の悪口を聞かされるのが嫌ひな人の好い行商人は遮つた。

『何！ マダム・ウエベールですつて。私はお友達に、何故私がお前さんをあの人達から引き離したかどうあつても言はなければなりませんよ。それで無ければ他の女達のやうに利益の爲にさうしたと思はれますもの。どうです！ 貴郎は一人きりになつて、自分も少し商賣の得^{とく}をするやうになつて幸福ぢや無いのですか？』

それから彼女はチャツクに向つて續けた。

カ マ 『いくら私が氣を付けても無駄なのですよ。今でもまだ捲き上げに来るのです。本當に！ 小さな子供をよこすのです。何しろ彼處にや、今からあの猶太人の爺さんのパパ・ペリゼールのやうな鉤見たいな指をした縮れつ毛の子供達がどつさり居るのですからね。私が居ない時に茲へやつて來ちや何かしら持つ

チ
ヤ
ツ
ク
チ
テ行くのです。私が何もかもお話しするのはチャックさん、このあんまりなお人好しを私が他の人に對して、それからこの人自身に對して警戒するのを助けてお貰ひするためですよ。』

それからカマラードの寢泊りの事で相談した。結婚迄彼はペリゼールの處に居て、取つづきの部屋の折疊寢臺に寝る。食事は共同でチャックは土曜日毎に間代と食費の分前を拂ふことに話が付いた。婚禮がすんだところで、もう少しエイサンデックに寄つた方にもそつと廣い所を探すやうにする。

かうした緊急問題が議されてあつた間に、マダム・ウエベールは眠つた子供を抱へながらカマラードの寢臺を用意し、食事の後片付けをして皿類を洗ひ、ペリゼールは帽子を縫ふ事にかゝり、チャックは一分間も無駄にしないでこの働きの仲入りを立てるためかのやうに、白木のテーブルの片隅にドクツール・リヴアルの書物を積み重ねた。

72
何日か前まだエチオルにゐた頃、誰かゞ彼に向つて、その屈辱と疲労を感じる事なく彼が再び熱心に職工生活を始めるだらうといふ事、愉悅にみち／＼て元の地獄へと歸つて行く事を言つて聞かせたとしたら、どれだけ彼は驚いたか解らない。が兎も角事實はさうだつた。さうだ、全くもう一度地獄を横切る事だつた、が其の果にはユリチスが花嫁の被衣ツォアールをまつて忍耐深く待つてゐるのだ。彼は其の事を知つてゐた。そしてこの努力と困苦の目標は途中を容易いものにさせた。オベルカンプの新しい工場はア
ンドレを思ひ出させた。が其の規模はより小さかつた。此處では土地が無いために一つの室の中が三段

73
になつてゐた。チャックが働くのは一番てつべんの硝子窓の下で、工場中のすべての物音と汚れた空気と埃がまじり合つて昇つて來た。彼が働いてゐる廊下のやうな場所の手摺にもたれる時、彼は爐のはたの鍛冶工、作りかけの機械にたかつてゐる機械工、絶間なく動いてゐるこの怖い生きた人間の機械を眼にした。その又下には仕事着を着た恰好が若い見習職工と言つたやうに見える女工達が細かい仕事をしてゐた。とてもものに暑い。工場の周圍には空地も無ければ、海から通ふ風も無かつたし、廣い建物のまはり、軒並に同じやうな工場が窓と窓とを向ひ合はせて、其處でも亦同じやうに辛い労働が行はれてゐるのだと思へば思ふほど呼吸もつままるほどだつた。が夫が何だ！ この時のチャックは總べてを耐へ忍ぶべく十分苦痛に慣れてゐた。彼はその境遇の困難と悲哀のより高き處に自分自身を感じてゐたので工場でも彼はよく響くカテドラル天主堂の内部で、もあるやうにその努力を彼の耳に傳へてゐる労働者のすべての上に立つてゐた。彼にとつて其處はほんの腰掛に過ぎなかつたので、仕事は忠實に勤めながらも思ひは何時も外にあつた。

仲間達も亦夫をよく知つてゐた。彼等には、彼が彼等の争ひにも、張合ひにも頓着なく、皆とはかけへだてた生活をしてゐるのが解つてゐた。彼等の間では猿と呼ばれてゐる職工長に對する反抗にも、退け時間の戦争騒ぎ、新入り達の振舞酒、酒場への入浸り、彼は何の仲間にも這入らなかつた。

ド
ー
ラ
マ
カ
彼は其の襤褸もて周圍のすべての豪奢を一層照り輝かせながら、華麗な都市の眞中に埋もれてゐる猶太町で、もあるやうに、この大いなる郊外の微かな歎息や、反抗の怒號を耳に入れなかつた。彼は窮迫

ヤ そのものが其のどんぞこに沈吟しながら、彼等の悲惨な運命を、一朝にして轉化させるところの大變動を恐れてゐる資本家達にあまりに接近してゐる薄倅者等を唆かす、社會主義的理論に心を傾ける事も無かつた。ラバラーフルや、のつぼのルイや、酒瓶のフランソアが勘定場の亞鉛を叩きたがら遣り出す一部一スウの小冊子の受賣りの物語りにしろ、議論にしろ、よい加減の主人公が出て來るヂユマのドラマや小説位にしか重きを置かなかつた。仲間から愛されてゐたとは私は言はない、が尊敬されてゐた。少少あくどい冗談を初めて聞かされた時、彼はそれは澄んだ眸、愚弄者を黙らせずにはゐない斷乎とした鋭い眸を以て應じたのだ。其の後又人々は彼が焚部屋から來た事を聞いたのだが、焚部屋の仕事の辛さと云へば機械工仲間でも隠れもない事だつた。

74 毛にリボンか、光つたピンか、何かしらのおしゃれの品をつけてゐる。そして晝飯の時間に仕事臺の端しらの芝居沙汰で騒いでゐる彼女等の傍を通る時、いくら彼女等が微笑みかけても無駄だつた。女である事を罷めない彼女等は工場へ通ふのに舞踏會へでも行くやうな風をする。そして鑪屑にまみれた髪の毛にリボンか、光つたピンか、何かしらのおしゃれの品をつけてゐる。そして晝飯の時間に仕事臺の端

75 74 で貧しい食事を取りながら種々な口論に花を咲かせるのだ。

工場を出るとチャツクは何時もひとりで歸つた。彼は家に歸つて工場の仕事着を脱ぎ捨て、別の仕事にかゝる事を急いでゐるのだ。彼の書物、少年時代の澤山の思ひ出が縁に記されてゐる小型の教科書にとりかこまれて、彼は夜の仕事に取り掛る。そして何時も其の容易さ、教科書の何でもない言葉に、嘗て學んだ事柄のすべてが思ひ出されるのに驚かされた。彼は自分で考へてゐたにも増して識つてゐた。が度々思ひがけない難しさが行の間に湧いて出ると、この丈の高い若者が重い機械を扱ふために日一日と形が悪くなつて行く大きな手で、ぢれつたさうにペンを握んで夫を振りまはし、時に、甲斐の無い腹立ちまぎれに投げ出しさへもする様子を見るのは全く心が惹かれた。傍ではベリゼールが魔法使の魔法の場に臨んでゐる野蠻人と言つたやうな驚愕と敬虔な沈黙もて、商賣物の鳥打の庇や夏帽子の麥稈を縫つてゐるのだ。彼はチャツクの上を走る學生のペンの音、大きな字引を重たさうに繰る音が、健全である行商人の太い針の音と、紙の上を走る學生のペンの音、大きな字引を重たさうに繰る音が、健全で平和な仕事の氣分を屋根裏中に満たしてゐた。そして眼を上げたチャツクは、彼の正面の硝子戸のうしろに、夜業のランプの光と、何時迄でも夜を更かして精を出してゐる健氣な影法師、言はゞ巴里の夜の裏側。ブルヴァールに燈火が照り輝いてゐる間、映え明る内部のあらゆる歡樂の裏面を眼にするのだつた。

夜業の中頃、子供を床に入れて寝かしつけたところでマダム・ウエペールは炭と油を節約するために彼等の仲間入りをする。彼女は子供の着物類、それからベリゼールとカマレードのをつゞくるのだ。婚禮は春になつてからと云ふ事に定めてあつた。冬は貧乏人にとつて、重荷と心配澤山だからだ。其の間恋人同士はお互がお互の傍で勇しく働いてゐたので、之でも戀の逢瀬にはちがひなかつた。で既に彼等は三人の世帯を営んでゐたやうなものだつた。がベリゼールに見れば何かしらまだ足りないものがあるやうに見えた。と言ふわけは麵麩配り女の傍に坐りながら悲しさをうたつた様子で、博物學者が言つたアフリカの大龜が其の戀愛の期間に重たい甲羅の下で發するといふしやがれ聲の微かな歎息を吐いてゐるのだ。時々彼はマダム・ウエペールの手を執つて一寸の間さうした儘で居ようとする。が彼女は其のために仕事がおけると考へる、そして彼等は銘々の針を調子揃へて抜き抜き、太い聲をひそめようとするためにせい／＼言はせながら小聲で語り合ふだけで満足する。

「彼は日曜日、エチオル行きの日だけしか幸福ぢや無かつた。そしてペンを動かさし動かさし考へてゐた、彼は日曜日、エチオル行きの日だけしか幸福ぢや無かつた。」

どのやうな氣取屋の女のおめかしにしても、此の喜びの日の、朝の五時からともされたランプの灯のかけでした、ヂヤツクのそれにはとても及ばなかつたにちがひない。

76 マダム・ウエペールがあらかじめ洗ひたての眞白な肌着を用意して、紳士の服を椅子の背にかけて置く。

それから労働の痕跡を拭ふために、シトロンと輕石だ！ 彼は平生の日の労働者の俤を自分の何處にも少しも留めなくなつたのだ！ 若しもエイサンデツクの女工達が、かうした姿で彼處へ出て行く彼を見たとしたら、確かにロドルフ王子だと思ひ込んだにちがひない。

時間も無ければ分秒も無い絶えざる福祉の何といふ楽しい日！ 家中が彼を待つてゐ、彼を迎へる。客間にどつさり焚かれた火、マントルピースの上の緑の植木、それとドクツールの上機嫌、それからセシルの昂奮、彼女は只彼が傍に居るといふ丈で、まるで顔中に接吻されたかのやうに眞赤になるのだつた。お互が子供であつた昔の時みたい、彼は彼女の面前で教はつた。それで若い娘の賢い瞳は彼を勵まし、その理解を扶けた。ムツシウ・リヴァルは一週間中の宿題を直したり、説明をしたり、又次ぎの問題を與へたりしたので、先生はその爲に生徒と同じだけに勇氣を出した。それで老醫師は初めて學ぶために必要な箇所を記したり、註解したりするために、その青年時代の書物ともう一度首つ引きをするので、不意打ちの往診がない限り、暇な時間を作つて置くのだつた。勉強を済ませると、お天氣がよい時には森を一まはりしに行つた。其處では霜枯れた梢が打ち震へ、散り敷いた木の葉がかさこそと風に鳴つて、驅り出された兎と追ひ立てられた鹿とが驅けまはつてゐた。

75 ドーラマカ 一日の一番楽しい時だつた。人のいゝ醫師はわざと歩調をゆるめて若い者を先にやり、彼等は腕と腕を組合せて足どり軽く歩みながらも、何を話していゝかと解らずに邪心の無い其の人の好意にやゝてれてゐた。彼は若い二人をあまりに早く放任しすぎたので、今の彼等は愛がまだ口以上によく眼に物を

チ 言はせる、あの幸福な時期にあつたのだ。さうではあつたが、彼等は前の一週間の事を語り合つた。が
夫はこの二つの聲のオペラの、つゝましましやかなそれでゐて熱狂的な伴奏と言つたみたいだ、長い沈黙を
織りませでだ。

ク ツ ナ
グラン・セナルと呼ばれてゐた森のこのあたりへ入るには、オーネットの村莊の前を通つて行くの
で、其處にはまだ時々ドクツール・ヒルスが香料療法の実験に通つて來てゐた。まるで森と野原中であ
らゆる香の草を焚き較べてゞもゐるみたいに、屋根からは濃い煙が立ち昇つて、香のいぶるにはひが喉
をえがらつぽくさせた。

『やれ／＼！……毒殺者が來てゐるぞ。』ムツシウ・リヴァルは子供達に言つた『悪魔の料理の臭ひがす
るだらう！』

セシルは黙らせようとした。

『およしなさい、お祖父さん、聞えますよ。』

『よし！ 聞くがいゝさ！……俺が彼奴を怖れてゐると思つてゐるのかい？……彼奴が何をしようと思
い事が無いわ。俺をチャツク君のところへ行かせまいとした時から、彼奴はリヴァル老人の腕つ節がま
だ強い事を知つてゐるのだ。』

78
が彼がさうは言つても子供達はバルヴァ・ドミユスの前を通る時により聲をひそめ、より足を早める
のだつた。彼等には、其處には彼等にとつて幸先のいゝものは一つも無いと思はれたのだ。そして彼等

79
は鎖された雨戸のかけで窺つてゐるドクツール・ヒルスの眼鏡が彼等に向つて放つてゐた邪惡の視線を
察してゐるかのやうに見えた。いづれにしても彼等は傀儡の密偵をどうして怖れる事があつたらう？

ダルチャントンとシャロットの息子との間はもうすつかり済んでゐなかつたのか？ 三ヶ月以來彼等は
もはや少しも顔を合はせなかつた。そして波濤が絶えず兩方の間を往來しながら削つて行く河の岸みた
いに、不斷の憎惡の念に日一日とかけはなれてゆくばかりだつた。母親が情人を持つてゐる事を恨むに
は彼はあまりに彼女を愛してゐた。がセシルに對する愛が高潔といふ事を教へてから、彼は母親の情人
を深く憎み、暴力と壓制もて縛りつけられてゐたあの弱い女の過ちを、すべて此の男の罪に歸してゐ
た。シャロットは面倒の起るのを恐れて、二人を和解させる事をあきらめた。彼女はもはや子供に就い
てダルチャントンには話をしなかつたが、彼とは祕かに逢つてゐた。

それどころか二三遍ヴェールをかぶつて辻馬車に乗つて、オベルカンブ町の工場迄チャツクに逢ひに
來、彼は仲間の職工達にやゝ眼に立つあで姿の、まだ若さの残つてゐる女と馬車の上と下で話してゐる
のを見られた。彼がとても『素敵な』情婦を持つてゐるといふ噂がひろまつた。人々は彼に祝辭を浴せ
かけたもので、彼等は多少毛色が變つてはゐるが大して珍しくも無い、場末から足を洗つて出た曖昧
な女が一旦金持になつて位置が出來たところで又元の泥水を慕つて來ると言つたやうな情事の一つを見て
ゐるのだと信じてゐた。それはマダムが通ぶつてお出掛けになつた町はづれの居酒屋の舞踏でなければ
ば、貧民街を貫いてゐる遊歩道での出逢ひが元だ。かうした色事師の職工達は他の者より服装を飾つてゐ

ナるので、女王に見出された男と云つたにやけた風と、人を馬鹿にした上の空の様子をしてゐるのだ。

クツヤ 此の當推量はヂヤツクにとつて二重の侮辱だつた。それで彼はシヤロットを此の後工場に來させないために、その理由^{わけ}は言はずに仕事の時間に決して出てはならないといふ工場の規則を楯にとつた。それからの彼等は公園位で時たま逢ふだけになつた。が中でも一番聖堂を擇んだといふわけは、同じやうな境遇の女達が皆さうであるやうに、遣場のない感傷癖と説教の日唱歌隊の近くの祈禱臺に跪く事によつて美人としての最後の虚榮を満たしたさの名譽心から、年をとるにつれて信心家になりだしたのだ。さうした時々短い出逢ひにシヤロットは少し疲れたみたい淋しい様子はしてゐたが、相變らず喋つてばかりゐた。それで彼女は自分が大層氣樂で幸福である事、ムツシウ・ダルヂヤントンの文士としての未來を全く信じてゐるのだとも言つてゐた。が或る日かうしたお喋舌の後でパンテオンの聖堂から二人揃つて出ようとした時、『ヂヤツク、若しかお前お出來なら……』少しは言ひにくさうにしながら彼女は言つた『ねえ、私、豫算の勘定違ひをしたのだと思ふのだけれど、月末までお金がもたないのだよ。でもあなたの方にはとても言ひ出されないの、ちつとも仕事が行かぬのだからね！ おまけに病氣なの。ほんの四五日でいゝのだから……』

80 彼はおしまひ迄言はせなかつた。彼は給料を貰つて來たところだつた。そして夫をそのまま赤い顔をしながら母親の手に握らせた。それから往來の明るみに出た時彼は、微笑んだ其の顔の上に聖堂のうすくらがりの中で見る事の出來なかつた失望の痕、その若々しさが涙の小川の中に解けてなくなりでもし

81 たやうに赤斑をなして蒼ざめてゐるのを見た。

限り無い憐憫が彼の心を探へた。

『ねえ、母さん！ 若しも貴女が不幸なやうなら……何時でも僕が居ますよ……僕のところいらつし

やい……母さんの世話が出來たら、僕どんなに嬉しいか解りません。』

彼女は聲を震はせた。

『いゝえ、そんな事は出來ないわ。』彼女は小聲で言つた『あの方は今本當に苦勞してゐるのですもの。』

恥づべき事だわ。』

何かの誘惑に負けるのを恐れでもするやうに、彼女は急いで立ち去つた。

五 チヤツクの家庭

メニルモンタンはパノアイヨ一通りの小さな住居すまひのある朝だつた。まだ夜があけたばかりではあつたが、行商人と彼のカメラードはもう起きてゐた。一人は少し跛を曳きく、出来るだけ静かに歩きながら其處らを片附けたり、掃除をしたり、靴を磨いたりしてゐる。で如何にも鈍間らしく見える人間が、場末の家の廣い前庭に、その數多くの煙突の上にくつきりと浮き出させてゐた薔薇色がかつた淡碧の空、六月の曉の空の仰がれる開いた窓の前に陣取つた健氣な友達の邪魔をしまいと氣を付けながら、どれだけ器用に、敏捷に立ち働いてゐたかと言へば、全く夫は不思議な位だつた。書物から眼を離す時、チヤツクは正面に大きな冶金工場の亞鉛の屋根を見た。間もなく太陽がその上を照らすならば、それこそ夫はとても反射の耐へられない怖い鏡となるだらう。此の時は、生れ出たばかりの光は模糊とした穏かな色合に影を映してゐたので、まはりの屋根に渡した何本もの長い綱で丈夫にしてある建物の真中にしつらへられた高い煙突は、まるで、きら／＼光る澱んだ水の上を走つてゐる船のマストのやうに見えるのだつた。下の方では郊外の商人達が物置でなければ庭の片隅に拵へてゐる鳥小舎の中で牡雞が歌つてゐる。五時迄、それより他の聲は聞えない。

忽ち大きな聲が響き渡つた。

『ママ・ジャコブ、ママ・マチウ、麵麩ですよ……』

チヤツクの隣人がパンを配り出したのだ。まだ温いよい香のするさまざまの大きさの麵麩を前掛に一杯くるんで、廊下や階段や、牛乳函のさげてある戸口から戸口を廻りながら、彼女は立つた儘お得意の名前を呼んでパンを置いて行く。彼女は又彼等のために眼醒時めざましの役をつとめてゐるので、何故なら彼女は此の界限中で一番の早起きだつた。

『麵麩ですよ！』

それは生活の叫び、何物も換へる事の出来ない雄辯な呼聲だ。之こそ一家を喜ばせ、食卓を賑はせるところの得難き麵麩、一日の慰安のパンだ。それは父親の背負袋、學校へ行く子供の辨當籠の中、それから朝の珈琲、夕方のスープのためになくてはならないのだ。

『麵麩ですよ！ 麵麩ですよ！』

配る度に標しるしして行く書付板は配達婦の長い庖丁の下で音を立てゝゐる。板の刻み目が又一つ、借りが又一つ増えた、愈々もつて働かなければならない。がそんな事はどうでもいゝ！ 一日の何時にしてもこの時ほどのセンサーションを起させはしないだらう。おくれをとらないその食欲、動物的本能を伴ふ朝の眼醒め、眼と同時に口が開かれるのだ。それで階段を昇つたり、降りたり、一階毎にその足音の聞かれるマダム・ウエベールの呼聲を聞くなり、家中の人は眠をさまし、戸はひらかれ、賑やかに駆け降りる音は梯子段に鳴り渡り、子供等は喜びの聲をあげながら、自分達の體よりも大きな麵麩の塊を抱へ

サ　て又昇つて行く。金匱かねいを抱いたアルパゴン（モリエールの喜劇のけちんぼの名前）と云つた風、麴麴屋の店から出て来たどの貧乏人にも見る、麴麴を持つてゐるといふ誇らしげなその様子でだ。

ク　間もなくすべての人々は起きてしまつた。チャツクの正面の、工場でない方の側には澤山の窓が半開きになつてゐる。其處は彼が夜灯影がさしてゐるのを見てゐたので、今は勤勉な貧乏人達の秘密を見せてゐた。一つの窓では今淋しい様子の女が腰をかけたところで、ミシンを動かしてゐるその傍で娘らしい小さな女の子が一枚宛切を取つては渡してゐる。もう一つでは多分何處かの女店員らしい若い娘がもはや髪を結つてしまつて、暗い中で掃除した室の中に肩をこぼすまいとうつむきながら貧しい朝飯のパンを切つてゐる。其の先のは屋根裏の窓で小さな鏡が懸つてゐたが、陽がさしはじめるより早く、大きな赤いカーテンがひかれた。恐しい亜鉛の反射のためだ。すべて之等の貧乏人の住居は一軒の大きな家の裏、梯子段がくねり、水仕の水が流れ、龜裂ひびかれと煙突の樋が走つてゐる裏側に向いてゐるのだ、暗くもあればむさくるしい。が彼はそれを苦になどしなかつた。たゞ一つ彼の心を動かすものと言へば、毎日街の雑音に濁されない前の朝の空氣の中に、いつも同じやうな老婆の聲がまるで泣言みたいな哀れつばいお定まり文句を繰り返すのを聞く事だつた。『こんな日に、田舎に住んでゐる人達はほんとに仕合せといふものさ！』氣の毒な老婆はいつたい誰に話しかけてゐるのだらう？　誰にでも無い、いや、總べての人に、彼女自身に、多分、窓の戸にさげてある青い草の葉をみたした籠の中のカナリアに、多分、窓の前に並べた植木鉢にだ。チャツクも同じ考へだつた。で彼女と一緒に心からの遺瀨無さを言ひ現は

84

85　したかつたにちがひない。何故なら優しく健氣な彼の思ひは、まづ靜かな村の通りへ、『醫者の呼鈴』と記した札のかゝつてゐる緑色の小さな戸口へと馳せたのだ。さて彼が一しきり夢中になつて、嚙りついてゐる仕事の事を忘れて夢見に耽つてゐると、衣摺れの音が廊下に聞えて、鍵をしきりに緘ひびつてゐる。

『右へお廻はしない！』珈琲を入れてゐたベリゼールが聲をかけた。

鍵は左にまはつてゐる。

『右ですよ！』

鍵は益々左に廻はる。行商人は耐らなくなつて珈琲入を手に持つたまゝ開きに行き、飛び込んで来たのはシャロットだつた。この飾羽根とレースの關入に呆氣にとられたベリゼールは恭しくお叩頭をするやら、曲つた脚でびよん／＼跳る、有頂天になつて床をごし／＼摺つてゐる。がチャツクの母親は自分の前にゐるぼう／＼頭の人間が誰であるか判らなかつたので、斷わりを言ひながら戸の外へ後退りをした。

『御免なさい……間違へたのです。』

この聲を聞くと、チャツクは頭を上げて飛び出した。

『おゝ、母さん、間違やしません、間違やしません。』

庭家のクツヤザ

『あ、チャツク！ 私のチャツク！』

彼女は彼の頸にかちりつき、そのふところに隠れようとした。

『助けておくれ、チャック、禦いでおくれ……あの男、私が何もかも與へてやつた、自分の生涯も、子供のも、何もかも犠牲にしたあのろくでなしが私を撲つた、さうとも私を撲つたのだよ……今朝、二晩もあけて歸つて来た時、少しばかり言つてやつたの、私の権利ぢや無いかえ、えゝ！ するとあのろくでなしつたら、酷い事腹を立て、私に手を上げたのだよ、私に、此の私に……』

言葉のしまひの方は瀧のやうな涙と、怖しい泣きじやくりの中に消えてしまつた。不幸な女の最初の言葉を聞くより、ペリゼールはこの内輪の打明話を後に、そつと戸をたてゝ出て行つた。チャックは母親の前に突立つと恐怖と憐憫にみち／＼ながら彼女を眺めてゐた。何て彼女は變つたらう、何て眞蒼な顔だらう！ 時は朝、小さな室内に漲つてゐる朝日の光に照らされて、寄る年波は一層あきらかに顔を刻み、隠さないでゐた白毛が涙で濡れた額に輝いてゐた。涙を拭はうとも考へないで彼女は油紙に火がついたやうに喋つた。去つて来た男に對するあらゆる彼女の不満を順序もなしに滅茶々に語り出した。何故なら數へ切れないほどの言葉が唇で押し合つて彼女を吃らせたのだ。

『おゝ！ 母さんは、十年も前からどんなに苦しんだらう、チャックや！ あの男はどれだけ私を傷け、撲ちのめした事だらう！……人非人！……女達の居るカツフエやビアホールに入り浸りなのだよ、今ぢや其處で雑誌を作つてゐるの、とこで立派な出來榮えさ！……この前の號なんか、からつきしなつてやしなかつたのだよ！……それよりも、お金を持つてアンドレへ行つた時、私もすぐ向ひの村に居

たのだよ、そしてどんなに逢ひたかつたらうほんたうに！ だがムツシウがお望みでなかつたのさ、何といふ悪者だらう！ お前をそりや嫌つてゐるのだよ。お前が離れて来てしまつた事をそりや恨んでゐるのだよ。夫を一等根に持つてゐるのだよ、そのくせお前があの家で食べた麵麩を惜しがつてゐたぢやないか。何といふ強慾者だらう！……もう一つあの男がお前にした事を話さうか？ どんな事があつても言ふつもりぢやなかつたけれど。でも今日は根こそぎ言はないぢやゐられない。それで！ 私はあのアンドレの事件があつた時、ボンナミがお前のために呉れた一萬法と云ふお金を持つてゐたのだよ。あの人はそれを雑誌に注ぎ込んでしまつたのさ、さうだよ、お前雑誌に！……おゝ！ 大層な利を生ませるつもりでゐた事は解つてゐる、だがあの一萬法も他の皆と一緒に形無かたなしになつてしまつたのさ。それでおしまひに、お前にしてもあのお金がどれだけ役に立つか解らないと思つたので返してやつてくれと言つた時にどうしたとお思ひだえ？ ずつと前お前のために使つたといふ養育費、エチオルからルヂツクの家に住居した時までの食料までもひつくるめて長い書付けを拵へたのだよ、それが一萬五千法さ、が負けてくれるといふのだよ、ねえ、大層な御慈悲さね！……それでも、私は何もかも、お前の事で腹を立てゝどんな酷い事をしようが、アンドレの事件をあかりが立つた後までも、まるでさうでないやうに友達連中と話し合つてゐる憎らしい遣り方、さう、夫までも私はぢつと堪へてゐたのだよ。何故ならたとひあの連中が何と言はうと、私がお前を可愛がる事の、一日も百度もお前の事を思ひ出す事の邪魔は出來なかつたのだもの。だが二日も續けて待ち呆けさせて、さんざ氣を揉ませ、苛立たせてさ、何處の芝

居の女だか、それともサン・ヂェルマンの墮落女だか知らないかに見換へてさ（彼女に依ると、貴婦人達が皆彼を追ひまはしてゐると見える。）私が咎めたのを鼻であしらつて、腹立ちまぎれに私を撲つなんて、私を、此の私を、イダ・ド・バランシーを！ 私の誇り、私の自尊心はもう耐へられはしない。私は着物を着換へて、帽子を冠つたのだよ。それからあの男の前に突立つてかう言つてやつた。よく私を御覽なさい、ムツシウ・ダルヂヤントン、もはやお目にはかゝらないでせう。私は貴郎から去つて行きます。私の息子の處へ行きます。別のシャロットをお探しになるがいゝでせう。私はもう眞平です。そして私は出て来たの、そして此處に來たのだよ。』

ヂヤツクは遮らないでしまひまで聞いてゐた。たゞ新しい汚辱が語り出される度に顔を蒼ざめさせながら、彼女が語るすべてを彼女のためにどれほど恥しく思つた事だらう。母親の顔を見ようともしなかつた。彼女の言葉が終つた時、彼は靜かにその手を執ると、さもやさしく、さも愛のこもつた、が又さも重々しい様子で、

『お母さん、來て下さつて有難う！ 僕の幸福、僕の生涯の終りに只一つの物が缺けてゐました。夫は貴女です。今貴女は此處に居る、僕は貴女を持つてゐる、しつかり持つてゐます。僕の願ひの全部だつたのです。只よう御座いますか、もう決して行かせはしませんよ。』

『行く、私が！ あの男のところへ！……いゝえ、ヂヤツクや！ お前と一緒に居ますとも、何時迄も二人、たつた二人きりで……何時ぞや、何時かお前の世話になる日が來ると、私が言つたぢやないか』

え。その時が來たのだよ、そして私はほんとに夫を誓ひますよ。』

息子にいたはられてゐるうちに、心の激動は次第々々にをさまつて、やがて、子供が大泣きをした後にする大きな歎息となつて何處かへ消えてしまつた。

『ねえ、ヂヤツクや、私達は之からほんとにいゝ生活をしませうよね。今迄はお前をほつたらかしてばかりゐて、少しも可愛がつて上げなかつたのだもの。きつと取返しをつけますよ。安心しておいで。私どんなにせいゝしたらう！ 御覽な、お前の此の室はほんとに狭くて、まるつきり裸で、とてもやりきれない、まるで犬小舎そつちのけだけけれど、でも私此處へ來た時からまるで天國へでも行つたやうな氣がしてゐるのだよ。』

ペリゼールにしても彼にしても、大層よいつもりであつた住ひを、かうして少々けなされた事はヂヤツクに未來を心配させたが、何時迄も夫を考へてゐる暇はなかつた。工場へ行く迄にようやつと三十分程の時間が有るか無いかだつた。そして何處から手をつけていゝのか判らない事が山程あつた。彼はまづ行商人に相談しに行つた。其の頃彼は彼で根氣よく廊下を行つては歸り、行つては歸りしてゐたので、若し放つて置いたら、話が濟んだかどうかと見るために一度もドアを叩きに來る事無しに、夕方迄からして行き歸りしてゐたにちがひなかつた。

『ペリゼール、かう云ふ事になつたのだ、母が僕と一緒に住む爲に來たのだ、どうしたら旨い工合にやつて行かれるだらう？』

ザ ベリゼールは直ちに此の事を考へるなり思はず身を震はした。『彼はもうカマレードにはなつてゐられないだらう、又婚禮がのびるのか。』が彼は失望の色を少しも表はさずに、友達を當惑から救ふ事より考へなかつた。彼等の室はその階での上等だつたから、ヂヤツクが母親と一緒に占領し、行商人は帽子の荷をマダム・ウエペールのところに置いて、自分のための小さな部屋を同じ家の中に探すといふ事に話がついた。

『ちつともかまひません。ちつともかまひません……』氣の毒な男は何氣ない様子を一生懸命でしながら言つた。彼等は室に歸つた。ヂヤツクは母親に友達のリゼールを引き合はせ、今ぢや彼はオーネツトの美しい夫人をちやんと思ひ出して、此の引越しの日、行商人はイダ・ド・バランシーのためにまめまめしく働いた、といふのはシヤロットはもはや問題ではなかつたのだ。椅子を二脚、化粧臺と寢臺を借りて來なければいけなかつた。ヂヤツクは貯へを入れて置いた抽斗から金貨を三四枚取り出して母親に與へた。

『ねえ、母さん、若しも支度をするのが面倒だつたら、マダム・ウエペールが歸つてから晩の御飯をしてくれますよ。』

90 『いゝえ、そんな事。私がしますよ。たゞムツシウ・ベリゼールが店を教へてくれさへすれば。私はお前のために家政婦になるのだわ。そしてお前の生活をすつかり今迄通りにしてゐて欲しいのだよ。お晝飯に歸るのには工場は遠いのだから、おいしい晩の御飯事を支度して置くからね。お前が歸るまでにち

91 やんと用意して置くよ。』

彼女はさつさと肩掛を取ると、仕事にかゝるために甲斐々々しく袖をまくつて、裾をかゝげた。ヂヤツクはかうした彼女の決心を見ると耐らなく嬉しくなつて、心から接吻をすると、嘗て無い喜びにみたされて家を出た。彼はこのさき自分の身にかゝるさまざまの責任を思ひながら、この日どのやうな勇氣をもつて働いたらう？ 結婚の事が定まつてからといふもの、彼は幾度母親のいとはしい境遇に胸をいためた事だらう、それだけが彼の喜びと望みの邪魔だつたのだ。あの男が何處まで彼女を引き下げるのだらう？ 彼女の身は一體どうなるのだ？ 時々彼は自分といふ息子でなかつたら、誰でもがきつと賤しめずに置かないにちがひないこの倫落の女を、彼の愛するセシルに姑として與へる事を恥しく思つた。が今ではすつかり事が變つた。取り戻されて、最も注意深い、最も優しい愛もて護られてゐるイダは、やがて彼女が『娘』と呼ぶべき彼女に恥ぢないだけになるだらう。之だけの出来事で、ヂヤツクには彼とその許嫁との間の距離が短くなつたやうに思はれた。そして嬉しさのあまりにどれだけ彼が元氣よくエイサンデック鐵工所の重いバランシエを扱つてゐた事かと云ふのに、それは仲間達の眼につかすにはあなかつた。

『おい、上にゐるアリストを見ろよ、にこ／＼してゐるぜ……昔馴染とらまく遣つてゐると見えるぞ。』

さうだな！ アリスト！』

庭家のクツキヤ

『成程！ さうだ……』

チャックは笑ひながら答へた。

一日中彼は笑つてばかりゐた。が仕事で済んでオベルキャンプの通りを上つて来る時、ふと彼は恐れを抱いた。彼はまるで風のやうに來た彼女を再び彼の室に見出す事が出来るだらうか？ 彼はイダがどのやうな疾さでそのあらゆる氣まぐれに翼を添へるかといふ事を知つてゐた。それで此の弱氣な女が、彼女を結びつける鐵鎖に對していつもく／＼持つてゐるあさましい情熱が、彼のためには恐怖となつたので、斷ち切るより早く又もやそれを新たにしようといふ誘惑を感じたのぢやないかといふ事が思はれるのだつた。それで彼はぐん／＼道を急いだ。が階段を昇りかけるから、その怖れは去つた。職工の家族の住む家のざわめきにまじつて、爽かな珠をまろばすやうな聲がまるで新しい籠に閉ぢこめられた鵪かなんぞのやうに囀つてゐた。チャックはこのほがらかな聲をよく知つてゐた。

92 彼は其の『犬小舎』に一步足を踏み入れるなり、呆氣にとられて立ち留つた。隅から隅迄掃ききよめられて、ペリゼールの荷は取り除けられ、イダが借りさせた化粧臺と立派な寢臺が飾られて、室は廣くもなれば、すつかり見違へたやうになつてゐた。町を廻つて歩く花屋の小さな車で買った大きな花束があつちこち花瓶に挿してあり、すつかり用意の出來たテーブルが氣持のいゝ眞白なテーブルかけと、見事なバテを盛つた粗末な皿、封印付きの葡萄酒二本に賑つてゐた。イダ自身もやつと判るだけだつた。縫取りの短い裳、派手な色の上着をつけ、ふつくりさせた髪の毛の上に小さなボネを無雜作に載せたよけ、おまけに慰めと憩ひを得たよく囀る美しい女といった姿で。

『さあ！ どうお言ひだ事？』

彼女は腕をひろげて彼の前に驅けて來るなりかう叫んだ。彼は彼女を抱擁した。

『素敵です！』

『ね、一寸の間にしちやつたらう？ でもベルがすつかり手傳つてくれたのだよ……ほんとに親切な男さ！』

『誰です？ ペリゼールですか？』

『さうともさ、ベルちゃんよ、それからマダム・ウエペールも。』

『おや／＼！ もつすつかりお友達になつたと見えますね、』

『さうなのだよ！ 二人ともほんとに親切で人がよくて！ 晩御飯に呼んであるのだよ。』

『やれ／＼……それでお皿なんかは？』

『ほら、私少し買ったのだよ、ほんの少しばかり、隣の御夫婦がナイフやフォークを貸してくれたの。』

あのルヴァンドレの人達もほんとに親切なこと。』

94 そんなにも親切だといふ近所の人達をまだ少しも知つてゐなかつたチャックは、吃驚して眼を瞠つた。

『がチャックや、そればかりぢや無いのだよ……此のバテを見ないの。私わざ／＼ブウスの廣場迄買ひに行つたのだよ。其處だと何處の店よりも十五スウ安いのだよ。だがほんとに遠いつたら。歸りにたうと

ザら歩けなくなつて馬車に乗つたのだよ。』

何處までも彼女だ。十五スウを節約するために二法の馬車！ だが兎も角、彼女がいろんなよい店を知つてゐる事は判つた。小さなパンは并ユノアズ、珈琲とデセルはパレー・ロアイヤルの買物だ。

チャツクは呆氣にとられて聞いてゐた。彼女はそれに氣が付いた、で無邪氣に訊ねた。

『きつと私少し使ひすぎたわね。』

『いゝえ……何、そんな事ありません……』

『さうだよ、お前の様子がさう言つてゐるもの、でも仕方が無いのだよ。何しろ此處にはいろんな物が足りないし、それに人を呼ぶのだつて毎日の事ぢやないもの、第一私がどれだけきちんとしようとしてゐるかを見て御覽な……』

彼女は抽斗から緑色の長い帳面を引張り出して、意氣揚々と振つて見せた。

『マダム・レヴニツクのところを買つた此の小遣帳を見ておくれ。』

『レヴニツク・ルヴァンドレ……ぢや、もうこの邊の家を皆知つていらつしやるのですね。』

94 『さう言へばさうかも知れない、レヴニツクといふのはすぐ此の傍の文房具屋なの。よさうなお婆さんで、貸本屋もしてゐるのだよ、大變便利だわ、どうしても文壇の傾向は知つて置かなければならぬからね……で先づ小遣帳だけ先に貰つて置いたのさ。之だけはどうしても必要だよ。きちんとした家では之無しでは遣つて行かれやしないのだよ。今夜食事の後で、何なら今日の計算をして見ようよ、すつ

95 かりつけてあるのだよ。』

『おゝ！ つけてさへあれば……』

ベリゼールとマダム・ウエペールと、大頭の子供迄が這入つて來たので彼等は話を罷めた。

イダ・ド・バランシーが新しい友達に話す時の打ち解けた世話焼振りより滑稽なものは又となかつた。

『さあ、ベルちゃん、指圖するわけぢやないけど……マダム・ウエペール、戸をお閉めなさいな、坊やがくしやみをしたわ。』

それに物々しい様子、やさしい女王といった風な威嚴にこの人達をあしらふ態、氣兼ねをさすまいとする行き届いたもてなしぶりつたら。氣兼ねをしないとせば、マダム・ウエペールはすつかり夫だつた。己れのさゝやかな職業と腕の力をよく心得てゐて、彼女は少しも臆病がる事をしない勇敢な女だ。息子のウエペールにしても、パテの皮を頬ぼるのに少しも遠慮をしなかつた。只少しベリゼールだけが元氣ぢやなかつた。が夫には大いに理由があつた。ぢきと幸福が獲られるつもりで、しかも大が手の届きさうな處にまで來てゐながら、すべては當のない未來に遠ざかつてしまつて行くのを見るのは、何といふ悲しい事だ！ 時々彼はこの大切なカマラードをなくす事を、割合に平氣に思つてゐるらしいマダム・ウエペールでなければ、まるで戀人の心遣ひで母親の世話に夢中になつてゐる、嬉しさうなチャツクに悲しさうな眼を向けてゐるのだつた。あゝ！ 實際此の世の中の出來事といふものは、子供達が一

ナ 枚の板で遊ぶあのバランスアル、片方があがれば片方がさがる、あのバランスアルに似てゐる。チャツ
クは光の方へ昇つた。そして可哀想な仲間が楽しい夢の中から、辛い現實へと引き下されたのだ。まづ
彼は居心地のよい自慢の部屋から小さな硝子窓でしか空気の通はない、階段の壁に穴をあけて拵へた薪
部屋みたいな處へ移つて行くのだ。同じ階には他にあってゐる室が一つも無かつた。そしてペリゼール
はどんな事があつても、マダム・ウエペールから、たとひ梯子段一つでも遠くなるのが厭だつた。この
男の名前はペリゼールだ。が、あきらめ、親切、献身、忍耐といふのが又其の名だつた。彼はこのやう
ななほ幾つかの崇高な名を持つてゐたので、自分では名乗る事も、誇る事も決してしなかつたけれど、
彼の近くに居る者は次第にそれを知る事が出来たのだ。

賓客達が歸つてチャツクと母親だけが取り残された時、彼女は彼がテーブルの上を手早く片付けて、
大きな本をその上に列べ出したのを見ていたく驚いた。

『之から何をやるの？』

『ほら、勉強するのです。』

『一體何を？』

『あゝ、さうだつた……母さんはまだ知らなかつたのですね。』

そこで彼は彼の心の秘密、行手に華かな望の輝いてゐる現在の二重の生活について彼女に物語つた。

96 今迄はこの事を彼女に少しも話さなかつたのだ。幸福のための計畫を打明けるためには、あまり隙間だ

97 らけな輕率な頭をよくく彼は知り抜いてゐたのだ。彼は彼女がメルジャントンに話さないではゐない
といふ事を恐れたので、彼の愛の夢が、憎惡にしか値しないこの家の中で語られる事に耐へられなくも
あれば、それを怖れもしたのだ。彼は詩人とその取巻達に不安を感じたので、彼の幸福がその手中で危く
されるやうな氣がしたのだつた。が今となつて母親が彼に歸つて來、一人になつた自由の彼女を遂に今
彼のものにしてしまつたからには、セシルの事を語つてこの上ない喜びを彼女に分つ事が出来るのだ。
それで彼は彼の戀を、その美しい二十はたちの年のあこがれと感激を、眞率な言葉と、嘗ての艱難にすべてを
知り盡したが爲の雄辯もて物語るのだつた。があゝ！ 母親には譯が解らなかつた。この不幸な青年の
愛がどれだけ崇高で深刻であるか、彼女には解らなかつた。ひどく感傷的ではあつたけれど、彼女の愛
に對する考へは、彼の夫とは違つてゐた。彼の言葉を聞きながら、彼女はちやうどヂムナス劇場の三幕
目で、白い着物を着て、桃色の紐を肩で結ぶ前掛をかけた生娘が、背廣姿の髪の毛を縮らせた色男の告
白を聞いてゐる時位にしか感じはしなかつたのだ。彼女はよい氣持になつて首を伸ばして手をひろげる
と、このあどけない情熱に軽くくすぐられるやうな氣がしながら微笑まなひではゐられなかつた。

『おゝ！ いゝ事！ ほんとにいゝ事！』絶えず彼女はかう言ふのだ。『二人ともどんなに可愛らしいだ
らう……ボールとヴィルヂニーを思ひ出させるわ』が中でも彼女の心を動かしたのはセシルの物語りの
全く思ひがけない複雑した事だつた。彼女は屢々チャツクの言葉を遮つた。『小説だよ……まるで小説だ
よ……とても「素晴らしい代物」が出来るわ。』「素晴らしい代物」かの女はかうした言葉を山程智的環

ザ 境から仕入れて来たのだ。仕合せとその情熱を物語る戀人達は皆誰でもがさうなので、聞き手の返事に
 ヤ 彼等自身の言葉の反響より聞かないものだ。ヂヤツクはそくはない母親の横槍を聞く事なしに、そして
 グ ツ この物語りのすべては彼女にとつて何かのローマンズの折返しほどに平凡な印象しか與へないので、し
 かも彼女はこれとけない若い戀人達の馬鹿げた無邪氣さを少し憫んでゐるのだといふ事に氣が付く事
 なしに、すべての楽しい思ひ出や、過ぎ去つた不安、その計畫、その空想をたのしんでゐるのだつた。

六 ベリゼールの婚禮

ヂヤツクが世帯を持つてからやうやつと一週間ほどたつた或る夕方、ベリゼールが顔を輝かせなが
 ら、工場の退け時間に彼を迎へに來た。

『私は大満足なんですよ、ヂヤツクさん。カマラードが見付かりました。マダム・ウエベルも逢つて
 氣に入つたのです。すつかり定まつたのです。やつと婚禮が出来るわけですよ。』

ちやうどよかつた。不幸な男は夏が更けて行くのを見るのと、間もなく煙突掃除の子供と焼栗賣りが
 出て來るやうになつてしまへば又もやその幸福がのぼされなければならぬといふ事を考へるので、め
 つきり瘦せ衰へてしまつてゐた。此の行商人にとつては、ちやうど渡り鳥の往來がそれであるやうに、
 季節の象徴が大道の放浪者によつてなされてゐるのだつた。不平を言ふにはあまりに忍從的な彼は聞く
 者の涙を絞るやうな悲しい聲で『シャツボウ！ シャツボウ！ シャツボウ！』を叫んでゐた。或る一人
 の生活のあらゆる憂鬱とあらゆる不幸を、かゝはりの無い言葉で呼んでゐる巴里の町のあの呼賣りの聲
 が、時としてさも悲しく聞えるのはかうした事の爲であるにちがひない。いつも同じかうした唄では、
 たゞ調子だけに意味があつた。が物を賣るのにどれだけの呼び方があるか、そして朝の勇氣に満ちた呼
 び聲が夕方の夫、歸り道の行商人が機械的に呼んでゐるさも失望したみたいな、聲も絶々な打ちのめさ

ヤ
れたやうな調子と同じであるかに氣をつけて見るがいゝ。友人の心配のわざとではない原因だったチャ
ツクは今聞かされたよい知らせに殆んど彼と同じ位喜んだ。
ク
『それはよかつた。僕もそのカマラードと云ふのを見たいものだ。』
『其處に居るので。』

ペリゼールは五六歩離れた彼の背後うしろに立つてゐた、上着を着ないで金槌を肩にし、革の前掛をまるめて腕に抱へてゐる仕事歸りといった様子の丈の高い男を指差した。特徴の無いかほだちの、睡つたやうな、一本の酒で眞赤に染まつた顔が、ラテの仲間でブルドンを読んだ男と呼ばれてゐたモロンヴァル塾の嘗ての定連によく似た髭、もちやくと汚なく光澤の無い髭の中に半ば隠されてゐた。若しも外見の似てゐるといふ事が内面的の夫を伴ふとすれば、リバロといふペリゼールの新しいカマラードは悪い男では無いにちがひないが、怠け者で、勿體振り屋で、生意氣で、馬鹿で、酔拂ひだ。チャツクは新奇の獲得物を嬉しさに眺めながら、矢鱈に固い握手ばかりしてゐる行商人に、よくない其の印象を言ふ事はしなかつた。その上マダム・ウエベルが賛成したとすれば夫が第一だ。が實際は彼女にしてもチャツクと同じ事だった。可哀想な彼女の熱心家がそんなにも喜び返つてゐるのを見た彼女は、とても、難しい事をよ言はれなかつた。そしてざつと表面うへを見ただけで、他に良いのがなかつたばかりに、此のカマラードで満足する事にしたのだつた。

100
婚禮の前の二週間といふもの、何といふ嬉しげな、シャツボウ！ シャツボウ！ シャツボウ！ の

101
叫びがメニルモンタンとベルヴイルとヴィエットの職工町に響き渡つた事だらう。調子が好く、喜ばしげで、朗かな勝鬨をあげる、全くの雞の歌、無智の唇もて叫ばれた昔の『イメヌ！ おゝ、イメネ！
—(婚姻よ！ おゝ婚姻よ！)』の讃歌とでも言ふべきだった。竟に喜びの日、楽しい其の日が來た。マダム・ウエベルが何と言つたにも拘はらず、ペリゼールは盛大にする事を主張した。そして赤羅紗の長い財布はどん／＼口を開けられた。それで何といふ婚禮、何といふ華々しさだ！

ブルジョアの仲間では人々は普通一日を役場での式、別の一日を聖堂での式にあてるが、暇を持たない民衆は兩方の式を一つ日にして一度に事を済ませる。そしてこの手間のいる難儀仕事に殆んど大抵の場合、土曜日を選んで日曜日に休息するのだ。でこの祝福された日の郊外の役場こそは觀物だ。朝から辻馬車や、乗合馬車が門前に停まつて、埃だらけの廊下は、長いや短い行列で一杯になつて、人々は一しきり大廣間に集る。幾組もの婚禮が入りまじり、扨従の男の子達は友達になつて、一緒に蚯蚓を殺しに行く。花嫁同士顔を見合はせて穴のあくほど眺め合ひ、あらを探し合ふ。が親達は永い事待たされるのに退屈して小聲に喋り合ふ。たとひ壁は裸で掲示はつまらなく、どんなに醜くはあつても、役所といふものはこの人達にとつて一種異つた印象を與へるのだつた。腰掛の磨り切れた天鵞絨、高い天井、門衛、しかつめらしい助役、すべてが彼等を恐れさせ、又興がらせた。法律といふものを彼等は、其の客間に自分達を迎へようとしてゐてくれる誰も知らない、滅多に顔を見る事の出来ない尊い貴婦人といふやうに感じた。この幸福な土曜日、メニルモンタンの役場の狭い前庭を横切つて行つた算へ切れない行

ザ 列の中で、ペリゼールの婚禮は、たとひ女といふ女を窓際にあつめ、往來のすべての閑人達をざわつかせる花嫁の眞白な姿が無かつたにも拘はらず、中でも見事な物の一つだつた事を言はなければならぬ。マダム・ウエペールは未亡人といふところから、眼のさめるやうな青い着物、丈夫といふ事を好く人達が好む生々しい藍色の着物に、廣いショールを疊んで腕にし、派手な帽子を飾るリボンと花は、磨き立てのオーヴェルニュ女のかく光る顔の上でひらくしてゐた。彼女はペリゼールの父親と連れ立つてゐた。眞黄色な顔をした鈎鼻の老人で、痲性らしい上に絶えずはげしい咳の發作に苦しめられてゐるのを、新しい嫁がごし／＼背中をさすりながら、鎮めるにどれだけ骨を折つてゐたか解らない。かうして始終背中をさする事はその度毎に行列の歩みを止めさせて、後から後からと押しながら、發作の濟む迄待つてゐなければならなかつた。此の婚禮の威嚴を大層そこなつたものだ。

102 ペリゼールは二番目に彼の姉、ナントの後家に腕を貸してゐる。父親と同じ鈎鼻で、髪の毛の縮れた陰險らしい女だ。さて彼といふと、お得意達の誰が見ても、到底彼とは解らなかつたにちがひない。兩方の頬を深く穿つてゐた恐しい苦痛の皺、額の眞中に太く盛り上つてゐた青い靜脈、物を言ふのぢやなくて悲鳴をあげるためにいつも開けられてゐるその口、其のどれも之も最早總べて影を留めてゐなかつた。そして頭をしやんと立て、立派な姿と言はゞ言はれよう。さも意氣揚々と、靴墨で光らせた大きな靴をかはり／＼に前に出して歩いて行く。わざ／＼彼の足に合はせて拵へた靴で、大きいとも、大きいとも、それを履いた彼の恰好はちやうど冬の氷滑靴を履いた北方人といった風だ。しかしどうでも

いゝ！ ペリゼールは最早苦しまなかつた。彼にはまるで新しい足が一揃ひ出來たやうな氣がしたのだつた。それで此の二重の幸福が彼の顔を輝かせたのだ。片方でマダム・ウエペールの息子の手を引いてゐたが、その大頭は場末の床屋の祕傳の無茶な縮らせ方で一層大きいものに見えてゐた。それから今日一日だけ金槌と革の前掛を離させるのに皆が大骨を折らさせられたカマラード、マダム・ウエペールの主人の麵麩屋と其の職人二人とも短く刈つた髪の毛と羅紗の襟との間に赤くはちきれさうな逞しい頸を見せてゐるのが、稀にしか出る事の無い衣裳戸棚の中ですつかり皺になつたそして脇が自由にならない程袖の突張つてゐる不恰好なフロックコートと並べてゐた。その後からルヴァンドレ主婦、ペリゼールの弟に妹達、近所の人、友達、最後にチャツクが母親のマダム・ド・バランシーと連れ立たずに一人であつた。彼女は自分が姿を出して宴會に花を添へる事を承知しはしたが、一日中婚禮の行列についてまはる氣にはなれなかつたのだ。役場の大混雑の後で、腹痛を起すまでも——何故ならお午はもうとつくに過ぎてゐた——さんざつばら待たされた上で、やつと行列はヴァンセンヌから汽車に乗るために停車場をさして歩き出した。夕飯兼帯のお茶とでもいふ食事はサン・マンデのベレールの並木路に臨んだ或るレストランであつたので、皺苦茶になつたその處書をペリゼールはちやんとポケットの底に持つてゐた。そして夫は無駄ぢや無かつた。何故なら森の入口の廣小路にはまるつきり同じやうな四つ五つの建物と並んでゐて、すつかり同じ「御婚禮並に御宴會」といふ看板を、離れや、心をそよるやうな緑の植木で飾つた亭の軒に迄掲げてゐた。ペリゼールの婚禮が着いた時、サロンはまだあいてゐなかつたの

ナで、待つ間人々はヴァンセンヌの湖水、貧乏人達のブーローニユの森を見に出掛けた。屋外での御馳走のまはりに御輿を据ゑたのや、最早夫も食ひ倦きた幾組も幾組もの婚禮が芝生の緑の上に、白づくめや、黒いのや制服やで散らばつてゐた。實際かう云ふ祝ひの席には一人はきまつて學生か、兵士か、いつも何か制服姿がまじるものだ。此の人達は笑つたり、歌つたり、ふざけたり、大きな叫びをあげながら夢中になつて追驅けつこをしたり、手風琴のまはりで圓舞やカドリールを踊つてゐた。男達は女の帽子をかぶり、女達は男のをかぶつてゐる。生垣のうしろでは上着を脱いで盲鬼をしてゐる連中や、抱き合つた男や女や、花嫁の着物の飾りがとれてゐるのを附添ひの女が直してやつてゐるのなどが見られた。おゝ！ 糊のこはい青味のかゝつた此の白衣裳をどのやうな心持で、此の貧しい娘達は芝生の上に裾をひいてゐる事だらう。此の一日は彼女等もエレガントな貴婦人のつもりでゐるのだつた。

行商人と彼の婚禮の賓客達は、かうした婚禮のお祭騒ぎの間を淋しい態で練り歩きながら、待ち遠しい、待ち遠しい御馳走を待つ間、ビスケットや堅麵麩を頬ばつてゐた。實際は彼等にしても陽氣に騒ぐといふ素質が缺けてゐる譯ぢやない、たつた今判る事ではあつた。それにしても今は空腹で、それをぶちまけるどころぢや無いのだ。たうとう待ち切れなくなつて、偵察に出されたベリゼールの兄弟の一人が歸つて来て、すつかり用意の出来てゐる事、もう食卓に着きさへすればいゝのだといふ報告をもたらしたので、皆は又レストランへ取つて返した。

104

食卓は、くだらない色を塗つて、金粉とどれも同じやうな鏡で飾られた大衝立で仕切つてある大廣間

105

の一つにしつらへてあつた。隣の仕切の事はお互に手にとるやうに聞えた。笑ひ聲や、コップのちあふ音、給仕を呼ぶ聲、ぢれつたさうな呼鈴の音、室には湯氣がもうくこもつてゐたし、窓の下の小さな庭といひ、まるで廣い浴場の中にも居るやうだつた。茲でも役場と同じやうに賓客達は、最初この大きな食卓、兩端を造花のオレンジの枝、わざとらしい作り物の飾菓子、緑色と桃色の砂糖菓子——總べては何時の婚禮のためにも間に合ふやうに幾世紀か前に作られた儘で、親子代々の蠅が給仕のナフキンに逐はれても逐はれても黒い汚點をつけに来るのだつた——で飾られたテーブルの前で怖ぢけさせられた。マダム・ド・バランシーはまだ來なかつたが人々は席を定めた。新郎は新婦の隣に腰かけたかつたのだが、ナントの姉が、今時もうそんな事はしない、そんなにしては可けない、向ひ合つて腰かけるのだと言ひ出した。長い議論の末に結局さうされた。其の議論の間にベリゼール老人は新しい嫁の方に振り向いて、それは厭味な調子で尋ねた。

『ではお前さんは？ お前さんの方ぢやどうするね？ ムツシウ・ウエベールと婚禮した時はどうしたかね？』

ベリゼールの婚禮

かう聞かれると麵麩の配達女はさも落付き拂つた様子で、彼女は自分の田舎の農家で婚禮をしたので、其の日は自分が食卓の給仕をしたのだとさへ言ひ放つた。老人は皮肉で夫を言つたのだ。それにしてもベリゼールの家の者は誰しも不満だつたので、このたぐひまれな華かな御馳走も彼等を上機嫌にする事が出来なかつたといふのは確かだつた。總領が結婚すれば、乳牛はもう家族の物だけではなくなつ

ザ
てしまふ。一番確かな利益を盗まれる事だ。

ク ツ ヤ
始めの間は静かに食べてゐた。何故なら、先づとてもお腹が空いてゐたし、それからペリゼールが例の人のいゝ微笑で皺を伸ばさせようとしても無駄だった禮服清用の紳士達のお給仕に少々恐れをなしたからだ。實際此の場末のレストランの給仕といふのは不思議な代物だ。生氣の無い、衰へた、それでゐて圖々しくて、顔は綺麗に剃つて、口だけ覗かせてゐる房々した長い頬髭が如何にも皮肉で苛酷で官僚的といふ感じを抱かせる。免職されて不面目な勤めに墮ちた知事閣下といふやうな鹽梅だ。滑稽なのは、此の輩が一人頭百スウがところの婚禮の宴會に招かれた貧しい人々を眺める輕蔑の様子だ。自分の結婚の披露、只夫だけのために百法といふ金を投げ出す事の出来る此のペリゼールを山吹色の後光で包んでゐる、そしてお客の銘々がたまげたやうに繰返してゐる、此の百スウといふお金のさも大袈裟な言ひ現はし方は、給仕達の心を輕蔑で一杯にしたので、それはお互同士の眼交ぜや、賓客達に對しての取り付く島も無いやうな澄まし方で察しられた。ペリゼールのすぐ傍ではかうした紳士の一人がとても彼をおちけさせながら立つてゐるし、向側の新婦の椅子の背後に突立つたのは、すつかり彼をきこちなくさせてしまふし、勇敢な行商人はこの監視から免れるために、左手に置かれた獻立を取つて何度も讀返してゐるばかりだった。其の獻立といつたら驚異そのものだ！ 鴨、蕪、牛の背肉、隱元豆等といふ直き解る言葉の間に、とても堂々たると言つて可いなければとても珍妙な形容詞、都會や、將軍連や、戰場の名などが出て來るのだった。マランゴ、リシュリウ、シャットウブリアン、パリグールと言

ふやうな譯で、夫を讀んだペリゼールは他の賓客と同じやうにすつかり呆氣にとられてしまつた。彼等はそのすべてを食べようと言ふのだ！ それで二つのスープ皿をつきつけられて『ビスクですか？ ビユレ・クレシーですか？』スペイン葡萄酒を二本突きつけられて『クセレスにしますか？ バカレにしますか？』とまるで子供達の遊びの、二つの花の名を言はれて、そのどちらかを選ぶ、そしてその花にはそれ／＼の思ひがけない賭物が付いてゐるといふ、あの遊びと同じやうにどれだけこの人達の頭を悩ましたらう。誰も一しきりためらふ、そして當ずつばに擇ぶ、がどちらを擇んでも大した變りはない。お皿は兩方とも甘いやうな生温い同じ汁を漉へてゐるのだし、二本の瓶はどちらも同じ黄色く濁つた水、異様な液體でモロンヴァル塾のエグランチュヌをそよろヂヤツクに思ひ出させるやうなものだった。賓客達は呆氣にとられた眼を互にかはしながら、どのやうに遣つてのけたものかいろ／＼な形のコップの中でどれを給仕に差出したものかと互に隣を窺ひ合つた。カマラードは彼一流の遣り方で遣つてのけた。どれも同じ一つ、中でも一番大きなコップで飲んだのだ。がそれにしても全くの心配とぎこちなさの幻惑的食事の最初、すつかり熱の無いものにしてゐた此の珍妙な状態から一番先に脱け出したのは花嫁だった。極めて正當な論理にいちやく眼を開かせられて健氣な女は、自分で自分を落付かせるために息子に言ふのだった。

『遠慮するのぢやないよ、坊や、遠慮するぢやないよ、何もかも皆おあがり、安くはないのだからね。』此の賢い言葉は一座の上にも効果をもたらした。そして間もなく顎を動かす音と笑ひ聲の怖しい騒々

ア　しさがテーブルのまはりにひろがつて、中でも麵麩のお替りがしきりに要求された。只ベリゼールの一家だけがこの誰もかも喜びの眞中にそくはぬげであつた。若い連中はこそ／＼囁き合つたり、嘲笑つたりしてゐる。老人は自分の息子を眺めながら意地の悪い聲を張り上げて大聲で喋る、皮肉な大笑ひをする、その癖、伴は彼に對してとても敬意を表してゐるので、テーブル越しに妻君に向つて『阿父さんの皿、阿父さんのコップ』と一々指圖をしてゐるのだ。

此の強慾で陰險な恐しいベリゼールの一家がかうして此處に集つてゐるのを見た人々は、どうしたらマダム・ウエベールが彼女の行商人を彼等の貪慾から引き抜く事が出来たのだらうと不思議がるにちがひない。此の革命を成就するためには、あらゆる愛の魔法が必要だつた、が今ではそれは成就した。健氣な彼女は此の大きな責任を引受けるのに今も彼女のまはりをさまよつてゐる反感と怨恨と悪意のほめかしの耐へて行くための力を身内に感じてゐたのだ。そして彼女は少しも頓着無く勇敢に子供のお皿を充たしながら、皆に向つて廣い大きな顔で微笑むのだつた。『遠慮おしでないよ、坊や！』宴會が活氣付き始めたところに衣摺れの音がして入口の戸が大きく開かれるとイダ・ド・バランシーがさも忙しうに映ゆいやうな姿の笑顔を現はした。

『皆さん御免なさいね、馬車がちつとも動かないのでせう、それに遠い事、遠い事、何時になつたら着くのかと思つてゐましたわ。』

彼女は晴着をつけるのが嬉しくて一番美しい着物を着た。何故なら、息子と一緒に住むやうになつた

此の一月といふもの、おめかしをする機會が少しも無かつたからだ。来るなり彼女は、一座に素晴らしい感動を興へた。ベリゼールの傍に腰を下した時、手袋を脱いでコップの中に入れ、ボーイを手招きして獻立を持つて來させた時の身振り、何から何まで皆を感じさせた。どのやうにして彼女が、あんなにも威張つた、あんなにも人を馬鹿にした様子の給仕達を使ひ廻はしてゐるかを見なければいけない。彼女は其の中の一人、ベリゼールに怖毛を震はせた男を、芝居の歸りに度々ダルヂヤントンと食事に行つた事のあるブルヴァールの或るレストランで見たと言つて覺えてゐた。

『おや、お前さん、今此處なの？……さあそれで！何を食べさせてくれるの？』

彼女は大きな聲で笑つたり白い手を見せるために腕を上げたり、指の端で息子に『ボンジュール』といふ手眞似をしたりした。それから彼女は足臺を持つて來させて、炭酸水とアイスクリームを取り寄せた。レストランにあるだけのものをちやんと心得てゑもゐるやうに。彼女が喋つてゐる間、ちやうど食事のはじめのやうな深い沈黙が食卓のまはりに擴がつた。鋭く光る眼をまるで試金石か何ぞのやうに、働かせながら、イダの腕飾りを夢中で眺めてゐたベリゼールの弟妹のほかの者は、最初にボーイから受けたと同じきこちない氣持で、喋る事も體を動かす事もしなかつた。ヂヤックも同じ事、祝宴を賑はすどころではなかつた。この結婚式が彼の戀と未來を夢見させて、まはりのすべてに興味などは起らなかつたのだ。

『さう言へば、爰はちつとも陽氣ぢやないのね！』彼女の容易い成功に有頂天となつたイダ・ド・バラ

チンシーは忽ち言つた！『さあ！ベルちゃん、もう少し元氣になさいな！ほんとにさ！だがまあ一寸お待ちなさいよ……』

彼女は立上ると片手にお皿、片手にコップを持つて、『私、マダム・ペリゼールと席を換へてもらひますわ……ムツシウは多分お厭ぢやないと思ひますけど。』

それは如何にもしとやかに、如何にも慇懃に言はれた。で此の提議はペリゼールをすつかり喜ばせ、ウエペール少年はといふと坐つてゐた椅子から母親に抱き下されながら、賓客達が騒々しくフォークを動してゐた上に漂つてゐた氣詰りの氣が永久に消えてなくなつて、食事が眞の婚禮の祝宴のやうになり出した中で、何といふ突拍子も無い叫び聲をあげただらう。皆は盛んに食べたといふよりも食べたつもりでゐた。給仕はテーブルのまはりを堂々めぐりしながら手品を使つてゐるので、たゞ一羽の鴨只一羽の鶏で二十人のお客に行き互らせてゐる。しかも夫がどんなに上手に切られたかといふのに一人残らず分前にありついたしおまけにお替りをする事さへ出来たのだ。それから小さな豌豆は羹のやうにお皿に降つた。それと鹽元豆、夫は鹽と胡椒と少しのバター——それが又何といふバターだ！——で味をつけたもので、テーブルの隅で此の非衛生的な御馳走をかきませながら、給仕の一人は意地の悪い微笑を浮べてゐた。が一番の觀物はシャンパーニユの來た時だ。其の一生にさんざ夫を飲んだイダ・ド・ブランシーのほか、其處に居た誰も彼もは此の魔法の酒を只名前だけしか聞いた事が無かつたので、このシャンパーニユといふ名前だけが彼等のために華美な婦人室、贅澤な娛樂等といふ事を意味してゐたのだ。彼

等は小聲でお互に語り合ひ、待ち構へてゐた。最後に、デセールに入つて一人の給仕が、銀の帽子を冠つた瓶の栓を今にも抜くばかりの手附きで持ちながら現はれた。彼女のあでやかさぶりを一層眼立たせる事であつたら、どのやうな身振りや所作にしろ遣つてのけないでは濟まさないイダ・ド・ブランシーが神経家らしく耳を塞いだのを眞似て、他の女達も皆激しい爆音に對する用意をした。ところが何の事はなかつた。栓は極く自然に少しの音も立てず普通の栓と同じやうに容易く抜けた。と直ぐに給仕は瓶を擽けて『シャンパーニユ！シャンパーニユ！シャンパーニユ！』と早口に怒鳴りながらテーブルのまはりを小走りに駆け廻つた。コップは彼の通路に差し出され、此度は彼は底無し瓶の手品を演じた。二十人の夫々に泡とそれから底の方に酸つばい少しばかりの液體がしゆうと注がれ、人々はそれを恭しく啜つた。その上一巡り済んだあげくまだもつと残つてゐたにちがひなかつたといふわけは、戸の前に居たチャックは出て行きしなに、給仕が瓶からラツパ呑みをしてゐるのを見たのだ。が夫はどうでもいゝ。このシャンパーニユといふ言葉の魔力がかうだといふのは、そのほんの僅かな泡の中にも佛蘭西人の快活がどれだけひそんでゐるかといふのに、驚くばかりの活氣が此の時からお客の間に溢れ始めた。ペリゼール一家の夫は異常な貪慾となつて現はれた。彼等はテーブルの上で掠奪を始めたので、給仕達に残すより持つて歸る方がよつぽといふと言ひながら、オレンヂや、紙包のボンボンや、酸っぱくなつてゐる麵麩菓子、何もかもをポケットへ取り込んだ。忽ち笑ひ聲と囁きの裡に、作り物のボンボン、かうした婚禮の祝宴で必らず花嫁にすゝめる青と桃色のお砂糖で拵へた赤ん坊を載せたお皿がマダム・

ヤ
ペリゼールの前に持ち出された。が最早大きな縮れ頭のウエーブル少年を持つてゐた彼女はかうした因襲的の悪洒落を氣になどかけはしなかつた。それでペリゼールが眞赤に、眞赤になつてゐる間に、他の誰よりも大きな聲で笑つてゐた……

次ぎは唄の番だ。カマラードが最初に立ち上つて眼で沈黙を求めると、手を胸に置いて感傷的なしやがれ聲で古い流行唄の『神は働きをめぐ』を遣り出した。

創られし神の子我等

皆俱に務めつくさん……

このカマラードの畜生！ 彼は自分がその家に這入り込んで行つたこの勇敢な夫婦を丸め込むためには何を唄つたらいいかと云ふ事をちやんと心得てゐたのだ。が一座をかうした嚴肅な感激に耽らせ放しにして置かないため『神は働きをめぐ』の直ぐ後でもつと陽氣なのが始まつた。

シヤロンヌの

サヴァールの酒場……

彼はかうしたのを百から知つてゐた。あゝ……ペリゼール夫婦のカマラードは大したものだ！ パノアイヨー通りでは、さぞや楽しい夜が続くだらう！ がそれは先きの事として、給仕達はペリゼール一家の泥棒を見て取つたにちがひない。何故なら瞬く暇にテーブルの上は片付けられ、取り除けられ、ちよろまかされてしまつた。もうおしまひだ！ お客達は臍を消してお互に顔を見合はしてゐた。彼等の頭の上でも、周囲でも大層な騒ぎだつた。ダンスをしてゐる、唄つてゐる、床は足拍子につれて烈しくゆすぶられてゐる。『此方でも踊らうぢやないか？』さうだ、だが音楽は廉くはない。誰かど四方から聞えて来るのに合はせようと言ひ出した。が不幸な事に、カドリールや、ボルカや、ヴァルソヴィエヌがギオロンヤ、コルネットの騒々しい音に連れて豪い騒ぎで踊られてゐたので、とても何一つ聞き分ける事など出来なかつた。

『あゝ！ ピアノがあればいいのだけれど！』

イダ・ド・バランシーはさも弾けるやうな手付きで、あちこちのテーブルや、椅子の上で指を躍らせながら歎息をついた。マダム・ペリゼールも踊りたいのは山々だつたが、良人に向つて餘計な費用をかけないやうに耳打ちし、彼は彼女に頼着なくカマラードと一緒に一寸姿をかくしたかと思ふと五分ほどたつてから、田舎者のギオロン弾きを引張つて来た。其の男は急拵への小さな臺の上に陣取つて、葡萄酒の一リットル瓶を股に挟み、ギオロンをしつかと腕に抱へて、さて音楽は始まつた、よければ明日の朝まで！ ひどいペリー訛りで『バストレルの用意！』と怒鳴つてゐる此の田舎者のギオロン弾き、男達の

手を用心するためにハンケチを腰にまきつける女達の警戒ぶりやら、マダム・ペリゼールがカドリールの始めから終りまで交せてゐたオーベルニュの踊りの足とりが、金びかの飾りのついた場末の居酒屋のサロンに田舎祭のほびを満たしてゐた。田舎の傳説と巴里の風習が滅茶々々に入りまじつてゐたこの中間の線は、全くの場末だつた。たゞイダと彼の息子だけは何處かより高い場所から此の賤しいどんぞこに落込んで間諜付いてゐるやうに見えた。しかもなほ其處で、たとひどんなに彼女が貴族振つてゐたにも拘はらず、遠い思ひ出と一緒に甦つた昔の若さと俱に何か過去の生活の名残を取返してゐた事を、あまり有頂天になつてゐたために彼女は少しも氣が付かないでゐたのだ。彼女は笑ふ、はしやく、ロンドや、ブーランヂェルや、カドリールや、コチロンを踊る指圖をする、そして彼女の絹の衣裳の衣摺れと腕輪の鳴りさやく音は、一座の皆の胸に感歎と嫉妬の深い印象を残した。

114

そこでペリゼールの婚禮は大層陽氣だつた。花婿でさへもが新しい足を役に立てるのが嬉しくて、大はしやぎで滅茶々々に踊つた。周囲の室で人々は耳を濟まし、人々は言つた。「面白さうに遣つてゐるな！」甘い葡萄酒を持つて廻つてゐる給仕がひつきり無しに半開きにして置く戸のところには皆が覗きに來た。やがてかうした場合に有勝ちな闖入者がまぎれ込んで、お客の数がとんでも無く増えて行つた。で夫等の群集は飛ぶ、叫ぶ、殊に驚くばかり飲んだ。でマダム・ペリゼールは若しも彼女の主人の麵麴屋がダンスのための總べての費用を引き受けてくれると言はなかつたら、どんなに心配だつたか解らない。さうしてゐるうちに夜が明けかけた。ずつと前からウエベール少年は母親の大きなシヨールにくる

まつて腰掛の上で躰をかいてゐた。ヂヤツクは母親に何度合圖をしたか判らないが、彼女は其のとくな性分で何處でも彼女のまはりに引きつける事の出来るよろこびに夢中になつてゐて氣のつかないふりをしてゐる。彼はまるでその娘を夜會から連れ歸らうと骨を折つてゐる年取つた父親みたいだつた。

『さあ！ もう遅いのです。』

彼女は誰彼無しの腕にすがつて廻りながら彼の前を通る。

『今ちきだよ……一寸待つて。』

そのうちに彼女のために苦々しく思はないではゐられないほどダンスはだれて、ぢやらつきはじめた。

115

ヂヤツクは踊つてゐる最中の母親をやうやく引捕へて頭巾付きの其の大きなマントでくるむなり、並木路をうろついてゐた只一臺残つてゐた辻馬車に乗せる事が出來た。其の後からすぐペリゼール夫婦も、夢中で騒いでゐるお客達を残して歸りかけた。こんな明け方に汽車も無ければ、乗合馬車も同じ事だつた。新夫婦はヴァンセンヌの森を抜けて歩いて行く決心をし、ペリゼールは子供を抱へて妻君に腕を與へた。明け方の薄明りに外觀がいたましく見えた田舎料理屋の息苦しい空氣から脱れて來た彼等には、朝の氣が心地よく感じられた。葡萄酒の空瓶や、コップをすゝいだ大きなバケツがごつたがへしてゐる小庭は踊り手の靴の踵が相手の女の着物からむしり取つた紗や、うすものゝちぎれをばらまかれた儘露の中から覗いてゐた。階下ではまだギオロンがぎい／＼鳴つてゐる間に、ぼんやりした寢呆眼の、が相

変らず人を馬鹿にしたやうな給仕達が二階の窓をあけて、戯談口を叩いたり、床に水をまいたり、早や次ぎの芝居の新しい装置にかゝつてゐた。顔色の悪い疲れた眼をした連中が馬車を頼んでゐるのもあれば、一番汽車を待ちながら戸の前の腰掛に倒れて寝てゐるものもある。勘定を拂ふのに帳場で争論をしてゐるやら、一家内のいざこざ、喧嘩、取組合、ベリゼール夫婦はやがて、かうした逸樂の犠牲から遠ざ

かつた。喜びに満ちつゝ心も體も堅固に意氣揚々と彼等は、鳥の歌と朝のどよみに満ちてゐる露に濡れた近道を執ると、花の咲いてゐるアカシアが蔭を作つてゐるベレルの大通りに沿うて巴里へ歸つて行つた。大變な距離だが彼等は少しも遠いと思はなかつた。子供は行商人の胸にびつたり大きな頭を押し付けて道々眠つて居り、朝の六時頃やうやく家に着いて柳の寢籠に下してもまだ眼をあかなかつた。すぐとマダム・ベリゼールは彼女の藍色の晴着と花のついた帽子をとつて、胸當附きの大きな青い前掛をかけた。彼女には日曜日が無い。麵麴は此の日も他の日と同じに必要なだ。で彼女は大急ぎで配達にかゝつた。そして彼の息子と良人がぐつたり上で眠つてゐた間に、健氣な女は満足らしい勇氣をこめた、調子の高い『麵麴ですよ!』をお得意の戸毎に響かせてゐた。ちやうど其の素晴らしい婚禮の費用の全部を今から取り返しにかゝるのだとばかりに。

新夫婦はちきとカマレードを選びそこねた事、彼を家内に入れたのは大抜かりだつたと云ふ事に氣が付いた。婚禮の宴會は最早ベリゼールに、彼が酔拂ひだといふ事を證明する機會となつた。一週間後に又彼は、まるで垢のやうに此の男の身内に入り込んでゐる、そして彼の働きの機能を永久に錆びさせて

あるしつこい怠惰が原のあらゆる他の缺點を見て取つた。カマレードは錠前屋が職業だつた。が同居主が覚えてゐるかぎりぢや、彼が仕事をしてゐるのを見た事はない。その癖いつも肩から金槌と、腋の下から革の前掛を離した事はないのだ。決して擴げた事のない此の前掛は彼がさんざ長居をした居酒屋から出て、廣小路のベンチか、何處か取り毀しの建物の中で晝寝をする時、一日に何度も枕の用を勤めるのだ。で金槌はと云ふと、表徴、たゞ夫だけだ。彼は廣場に立つてゐる耕作の女神が、何一つ寶の出て來ない魔法の小羊の角を持つてゐるのと同じに、夫を持つてゐるのだ。毎朝出て行く前に、彼はそれを振り動かしながら言ふ『俺は仕事をめつけに行くんだ……』が彼の身振り、ぎよろ／＼光る眼を剥きながら、恐しい髭の中から物を言ふその様子はたしかに仕事を恐れさせたにちがひない。何故ならカマレードは道々それにも行き逢はなかつた。そして彼は一日中場末の町を居酒屋から居酒屋へと、巴里の労働者の所謂豹をきめこんでゐるのだ。豹をきめこむといふ言葉は、多分日曜日の動植物園の散歩で見ると檻の中の猛獸のあの行つたり來たりから出たのだらう。

ベリゼールと妻君は最初は我慢をしてゐた。カマレードの勿體振つた様子に少しばかり遠慮をしたのと、夫から彼が『神は働きをめづ』をとてにも上手に唄つたからだが結局、彼は大した大食ひだし、此方は朝から晩迄一生懸命で精を出してゐるのに、一方は一週間中檻の中の豹をきめこむばかりで、支拂日に鉦一文持つて來るぢやなし、さすがの夫婦もしまひには愛想をつかしはじめた。マダム・ベリゼールの意見は容捨なく突き出せ、カマレードが欲しいばかりに行商人が拾つて來た芥溜の中、道端におつぽ

ザリ捨てろと云ふのだつたが、新世帯と新しい靴から受ける完全な幸福が一層好人物にしたところのベリゼールはもう少し辛抱するやうに妻君をなだめた。猶太人が慈善心を起したとなつたら、全くきりがあつたものぢや無い。

彼は言つた。「あの男の根性を直してやれないといふ事は無いだらう。」

さてそこで若しもリバロが壁をばた／＼やりながら舌をもつれさせて歸つて来た時には晩飯を食べさせてやらないといふ事にきめた。それは酔拂ひにとつて大きな苦痛だつたといふ理由は、自然の作用でかうした日は他の日よりも餘計空腹なのだ。體を眞直にしやんとしようとしながら、一言も口を利かずに、お叩頭おちこをしようと骨を折つてゐる様子はまるで喜劇だ。が麵麩配りの女は眼から鼻へ抜ける賢さだつた。それで度々スープをよそつてゐる最中に、カマラードが自分のお皿を差し出すと彼女はきつぱりきめつける。

『そんな様子でテーブルに来るなんて、恥しくはないのですか？ また酔拂つてゐるぢやありませんか？ 本當に！ ちやんと解りますさ。』

『さうかい？……』ベリゼールが口を出す「だが俺には……」

『いゝのです、私にはちやんと解つてゐるのです……さあ、とつと上つておしまひなさい、さつさとなさいな。』

カマラードは立ち上ると、歎願の言葉か、でなければ負け惜しみをぶつくさと吃り吃り、湯氣の立つ

てゐるスープに狂氣じみた眼をくれながら、結婚前にベリゼールが住んでゐた小部屋へまるで犬か何ぞのやうに寝に行くのだ。酒癖は悪くなかつた。それできたならしいもちや／＼の無性鬚の蔭にかくれてゐた顔は、ちやうど意志の弱い不良少年の夫と言つたみたいだつた。彼が出て行くと行商人は人のよささうな厚い唇を突き出して言ふ。

『なあ！ 兎も角少しスープを遣らうぢやないか。』

『おゝ！ あれだもの……お前さんの言ふ事を聞いてゐたら……』

『今日だけだよ……なあ！』

妻君は、男と同じに働いてゐる下層社會の女がぐうたらな男に對して持つ敵愾心で、なほ一しきり反對する、が結局はいつも口説き落されるので、ベリゼールは意氣揚々とスープの皿をカマラードの部屋迄持つて行つてやる。彼はすつかり感じて歸つて来る。

『で、何と言ひました？』

『おゝ！ あんまりしよげてゐるのですすつかり可哀想になつちやつたよ。あの男がお酒を飲むのは仕事が見付からなくて、いつも俺達におんぶしてゐるのが辛いからだといふのだ。』

『一體誰があの人の仕事を見付ける邪魔をするのです？』

『あの男は、あんまり汚い着物を着てゐるから、誰も相手にしてくれないといふのだ。だからもう少しいゝ着物を……』

『眞平！ 誰がもういゝ着物なんて着せてやるものですか。でお前さんが私に内證で拵へてやつた婚禮の時のフロックコートをあつた男は何だつて賣つてしまつたのです？』
 之には彼も返事が出来なかつた。とは云ふものゝ、この二人の好人物はなほも又一肌脱いでリバロのために仕事着、着物の上に着る上つ張りを買つてあてがつた。で或る朝、さつぱりした肌膚にマダム・ペリゼールが結んでくれたネクタイをして出て行つた儘、一週間つひぞ姿を現はさなかつたが、八日目に例の金槌と萬年前掛を除いた何もかもをなくして、彼の犬小舎の中で眠つてゐるのが見付かつた。かうした不始末が何度かあつて、さすがに彼等は此の闖入者を追拂ふための機会を待つばかりになつた。難儀な世帯のたしになるどころか、とても重いお荷物になつてしまつたのだ。ペリゼール自身も同感ならざるを得なかつた。そして度々リバロの愚痴を友達のチャックに言ひに來たし、彼は又他の誰よりもその難儀が察しられた。何故なら彼自身も始末にへないカマラードを持たされてゐたので、しかも愚痴を言ふわけには行かなかつた。それをするにはあまりに彼はその人を愛し過ぎてゐた……

七 イダの物思ひ

イダの最初のエチオル訪問は、チャックを大層喜ばせたと同時に又その大きな心配となつた。母親を取り戻したのが自慢だつたが、彼は彼女がどれほど非常識で、お喋舌で、言ふ事が輕率であるかを知り抜いてゐた。彼はセシルの思惑、たとひ夫が知り得ない事柄についてあるにしろ若い者の魂の中で瞬く暇になされる、それは厳しい判断、此の不意の光明を怖れたのだ。逢つた最初のしばらくは少しばかりほつとさせられた。セシルの頸に腕をまはして『私の娘』と呼んだ芝居がかりの調子のほかはすべてが無難に運んだ。が只心盡しの晝飯のおかげでマダム・ド・バランシーが、美しい齒を見せびらかさうとして笑ふ若い娘といった風な打ち解けたはしやぎ方をするために、夫迄のしかつめらしさを失ひかけ、そして例の沒常識な物語りを始め出した時、チャックはすべての杞憂が遣つて來た事を感じた。正しく喜悅と感動ですつかりいゝ氣になつた彼女は、矢繼早の法螺話で絶えず聞き手の眼を眩らした。ペリネ山中に住んでゐるムツシウ・リヴァルの身内の事が話題に上つた。

『あゝ！ ペリネ山！』彼女は太息をついた。『ガヴァルニーの村、瀑流、氷の濱……十五年前に私、知合のド・カッサレス公爵と彼處の旅行をしましたの、スペインの方で、さうく！ ちやうど今のお話の將軍の御兄弟ですわ……とても滅茶苦茶な方つたら……私よく頸を折らなかつたと思ふのですよ。』

何しろドーモンで四頭曳きの馬車に乗つたのですが、ひつきりなしに駆けさせづめで、おまけに馬車一杯にシャンパーニユを積んでなんです……兎も角あの公爵のちびさん、とても變人なのですわ……私ははピアリツスで、それは面白いいきさつでおちかづきになつたのですよ。』

その次ぎにセシルが海が大好きだと言つたので、

『あゝ、貴女が若しも私が暴風雨の夜バルマのわきで見た觀方をしたらどうだつたでせう……私汽船のサロンに船長と一緒に居たのですわ。亂暴な人で無理にポンチを飲ませようとするのでせう……私は厭だと言つたのよ……そしたらどうでせう、怒つて氣狂ひのやうになつて、艙の窓を開けるなり、襟首を掴んで、それは力持ちちなのですわ、私の體を海の上に突き出すのよ、雨が降つて、稲光がして、海は泡だらけに荒れてゐるのでせう……ほんとに怖かつたわ。』

チャツクはかうした頗る危険な物語を中斷しようとして一生懸命で骨を折つたが、夫等はすた／＼に切られながらも、すべての切片が平氣でビク／＼生きてゐる蛇か何ぞのやうに絶えずどこかの端から又その首を上げるのだ。セシルはそのために愛人の母親を輕蔑する事は無かつたけれど、只チャツクが其の日朝からしきりと何かふさいでゐるのが少し心配だつた。稽古の時間に若い娘が自分の母親に『庭に降りて見ませうか？……』と言ふのを聞いた時、憫むべき彼は何としたらう。それは何でも無いごく當り前の事だが、彼女達二人だけになるといふ事が耐らなく彼を不安にした。やれ／＼！ 何を又彼女に言つて聞かせるだらう。ドクツールの説明の間、彼は二人の女が果樹園の小徑を並んで行くのを眺めてゐ

た。瘦せぎすですらりとしたセシルは、眞實エレガントなすべての女性の常でわざとらしい身振をする事なしに、道ばたのたちちやかう草の花を桃色の裳裾で撫でながら、イダは勿體らしい様子に残る色香を留めてはゐるが飾りやしなが大袈裟すぎた。昔の奢侈の名残の羽根でかざつた縁無し帽子をかぶつて、まるで小娘のやうに飛び跳ねたかと思ふと、忽ちかざした日傘ごとくりと身を縋りでもするやうな御大層な身振りをするために立ち留まる。彼女一人で喋つてゐるのは確かだ。それで時々セシルは彼女の話聞きながら、縮れ毛の波打つてゐる生徒の頭と先生の白毛頭が向ひ合つてうつむいてゐる窓の方に美しい顔を上げてゐた。はじめてチャツクは稽古の時間がひどく長いと考へた。そして許婚の少女に軽く寄り添はれながら森の下道を行く事が出来て、始めて満足を感じたのだつた。流れをわけ、微風を衝き、さながら空を驅けるかとばかり、帆布が船に與へるいみじき躍進を貴方々は知つてゐるだらうか？ セシルの腕を執つたその戀人の心が夫だつた。その時彼は生活の苦痛にも、志した處世の道のあらゆる障碍にも、力、彼の頭上高く、運命がその暴風雨を吹き拂ふあの神祕な領域に立ち舞うてゐるところのある慰めの力に扶けられて、見事に打ち克つて行く確信を持つのだつた。がこの母親が一緒に居た事がこの楽しい感じを打ち毀した。イダには戀愛が解らなかつた。彼が感傷的であると言つて可笑しがつたり、でなければ男と女と二人宛が組になる遊び事のやうな氣で彼を見てゐた。戀人同志を下クツールに示しながら意味のありさうに笑つたり、妙な咳拂ひをしたり、彼の腕に凭れてオルガンの音のやうな長い歎息を洩らしたりした。『あゝ、ドクツール！ 若いうちが花ですわ！』中でも始末に

ク ッ ヤ
をへなかつたのは、時も考へずに不意に神経過敏になつた事で、いきなり若い二人を呼び戻した。あまり遠くへ離れすぎると考へたのだ。
『二人ともそんな遠くへ行くのぢやありません……見えるところにいらつしやい……』かう言ひながらひどく意味ありげな眼付をした。

124
二三度チャックは好人物のドクツールが眉をしかめてゐるのを見てとつた。たしかに彼女が氣をそこねさせたのだ。さうした事があつたにしろ、森はたまらなく美しいし、セシルはほんとに優しいし、二人でかはした言葉が蜜蜂の唸りや、櫻の梢に群れ舞うてゐる羽蟲の囁きや、巢の中の小鳥と、草の中を流れるせむらぎの歌にすつかり氣持よく一つとなつて、氣の毒な青年はやがて彼の煩はしい同伴者の事を忘れてしまつた。がイダとでは何時迄も安心してはゐられない。いつ何時何が持ち上るか覺悟をしてゐなければならぬ。散歩者達は一寸の間森番のところに立ち寄つた。彼女の元の女主人を見るなり、メール・アルシヤンボウはそれは慇懃に精一杯の挨拶に夢中になつたが、旦那様の御機嫌だけはたづねる事をしなかつた。何故といふのに田舎者の常識で夫を言つては可けないと判つてゐたのだ。彼等の共同生活にあんなにも久しく立ちまじつてゐた此の善良な女との出逢ひは、元のマダム・ダルジャントンにとつて辛らかつた。メール・アルシヤンボウが大急ぎで廣間に用意したお茶にも手をつけず、いきなり立上ると彼女は忽ち飛び出して、まるで誰かと呼んでゐるやうに大股に只一人オーネットへの道を歩き始めた。彼女はバルヴァ・ドミユスを見ようとしたのだ。

125
家の塔は以前にも増して、實のならない葡萄の蔓と蔓蔓にまつはられて、礎から頂まで閉ざされてゐた。ヒルスは居ないらしい、何故なら雨戸はすつかりしまつてゐて、石段一面に青苔のむした庭を沈黙が領してゐた。イダは一寸の間立ち留つた。無言の、がそれは雄辯な夫等の言葉を聞いてゐた。それから彼女は無数の小さな白い星のやうな花が、塀の外迄咲き亂れてゐたクレマチトの一枝を手折つて、入口の石段に腰かけて眼をつぶつたまゝ永い事それを嗅いでゐた。

『どうしたのです?』
大層心配して、さつきから捜しまはつてゐたチャックが尋ねた。

彼女は涙だらけの顔をして答へた。

『どうもしないの……たゞ少し感じただけ……此處には澤山の思ひ出が葬つてあるのだもの。』
なるほどひとつそりとした憂鬱、入口のラテン語の言葉といひ、小さな家は墓場に似てゐた。彼女は眼を拭いたが、その快活さはもはや夕方迄還つて來なかつた。マダム・ダルジャントンは良人と別れたのだといふ事が言つてあつたセシルは、かうした彼女の惱ましい感じを拭ひ去らうとさまざまなやさしい心遣ひをしたが無駄だつた。チャックは又過ぎ去つた年の事を忘れさせるために未來のあらゆる楽しい計畫で彼女の心を引立てさせようとしたが何の役にも立たなかつた。

ひ思物のダイ
『ねえ、チャックや!』夕方エヴリーの停車場をさして歸る時に彼女は言ひ出した『私ちよいく一緒に來るのはよさうよ。私はとても苦しかつたのだよ、痛手があんまり新しすぎるのだもの。』

ナ から言つた彼女の聲は震へてゐた。して見るとあゝ迄も侮辱と虐待を受けながら、彼女はなほ彼を愛してゐるのだ。

カツ イダはその後五六度も續けて日曜日エチオルへ行かなかつた。そして夫以來ヂヤツクは休の日を二つに分けたければならなかつたので、半分はセシルのためであつたが、巴里へ歸つて母親と一緒に夕御飯を食べるために、逢ふ日での一番よい時、森の散歩と、日暮方果樹園の鄙びたベンチの上での楽しいお喋舌をあきらめなければならなかつた。彼は森の静寂から工場町の日曜日の雑沓へと、暑苦しいからつぼの午後の汽車に乗つて歸つて来るのだつた。満員の乗合馬車、両親に子供、家内全體連立つたお客達が、ビールのコップと繪入新聞の前に陣取つてゐる小さなカツフェのテーブルに占領されてゐる歩道、瓦斯タンクの上に昇つてゐる大きな輕氣球を見上げながら立ち留つてゐる群集、かうしたすべての雑沓はたつた今彼が離れて來た、そして其のために氣落ちしたかのやうに悲しみに耐へられないであるとこのものと、何といふ大した相違だ。より人通りの少ないパノアイヨ一通りでは、田舎の風習、家の前で風上げしてゐるのが見られた。それから人氣ひびのない大きな建物の前庭では、家番が近所の人達と一緒に椅子にかけながら、度々撒水をした後の涼をいれてゐた。いつも彼が歸つて來ると、母親は廊下でルヴァンドレ夫婦とお喋舌をしてゐた。日曜日にはきまつて正午から夜半の十二時迄遊びに出たペリゼール夫婦は、マダム・ド・バランシーを喜んで同伴したのだらうが、彼女は此の貧しい人達と一緒に出るのが恥しかつたので、たとひさうでなくても怠け者で大袈裟な物言ひをする職工夫婦の仲間入りをして

ある方がよかつたのだ。女房は裁縫女だつたが、仕事を始めるのに六百法、さうだ六百法に一スウも缺けないミシンを買ふ事が出来るのを二年越し待つてゐるのだ！ 亭主は元寶石工だつたが、人に使はれて働くのは厭だといふ事を宣言したものだ。双方の親類をあちこち無心してまはつて、どうにかかうにか暮して行けたので、彼等の家は全く社會に對する怨恨と反感と愚痴の巢窟だつた。この失業者夫婦とイダはすつかり氣が合つたので、彼等の不幸を憫むやら、お世辭やお追従を聞かされていゝ氣になつてゐたのだ。彼等はミシンの六百法で無ければ、商賣の資本を彼女の手から引出さうと考へてゐたので、何故なら彼女は、彼女が貧乏をしてゐるのは一時だけの事で、その氣になりさへすれば又ちきと大金持になれるのだと言つたからだ。息づまるやうな暗い廊下は、始終その打明話やら歎息などを聞かされてゐた。

『あゝ！ マダム・ルヴァンドレ！……』

『あゝ！ マダム・ド・バランシー！……』

夫から嘗て何やらの政策を案出したといふムツシウ・ルヴァンドレは大きな聲でそれを述べ立てる。とカマラードが酔拂つて眠つてゐる犬小舎からは單調な大きい斬が聞えて來る。がルヴァンドレ夫婦でさへが日曜日は時々親類か友達のところへ出て行くか、夕飯の儉約が出来るフラン・マソンの食事に行つたりする。さうした日にはイダは孤獨の惱みと悲しみを忘れるために、貸本屋のマダム・レヴェツクの所迄降りて行くので、其處へ行きさへすれば見付かるといふ事をヂヤツクはちやんと知つてゐた。

青い背の黴臭い本で一杯になつてゐる此の怪しげな店は、薄つべらな本や、二週間前の繪入新聞や、一スウがとこの兵隊さん向きの新聞、店頭に並べた流行衣裳の石版畫で文字通り塞がれてゐたので、開け放つた戸口、それも亦いろんな色の種々雑多な雑誌や新聞か硝子のところでごたく／＼してゐる戸口から僅かばかりの光線と空気が這入つて来るばかりだ。その中に、氣取り屋で不潔な、とても年を取つた一人の老婆が住んでゐるので、彼女は始終手を罷めないで薄い色レース、我々のお祖母さんの手提袋に見るあの飾レースを編んでゐた。此のマダム・レヴェックはよりよかつた頃を知つてゐるさうで、第一次帝政時代に彼女の父親は重要な一箇の人物、宮廷の守衛だか、宮殿の門番だかを勤めてゐたさうだ。「私はド・ダンヂツク公爵の名附け子です……」

彼女はしかつめらしくイダに語つた。ちやうど夫は、巴里が絶えざる流もて日毎にさうした物を吐き出してゐる場末の町でなければ見出す事の出来ない舊時代の遺物の一つだ。彼女の店の埃まみれの商品、どれも頁が足りなくなればびり／＼になつてゐる背だけ絹の書物と同じやうに彼女の話は、金色のはげた小説めいた光輝で一杯だつた。彼女は末期だけしか見なかつた此の魔法の時代の幻が彼女の眼の中に大いなる驚異を留めたので、たゞ彼女が「元帥方」と言つただけで、それはもはや飾羽根と、金銀の刺繡と、飾緒と、エルミヌの白い毛皮で縁取つた帽子の行列を意味するのだつた。それからジョゼフィヌ皇后の逸話やら、ルフェーブル元帥夫人の言葉！ 中でもマダム・レヴェックが他のどれよりも雄辯に、そして度々物語つたのはシユワルツエンベルグ公夫人が主催した有名な舞踏會の夜のオーストリ

大使館の火事だつた。彼女の全生涯は此の隠れもない火事の輝きに照らされた儘なので、彼女が躍く扮装の元帥方や、チチユス風や、ギリシヤ式に髪を結んだデコルテのすらりとした貴婦人達、緑色の服に白いズボンをはいて、氣を失つたシユワルツエンベルグ公夫人を腕に、燃えさかる庭を横切る皇帝の姿を見たのはその炎の中なのだ。貴族とさへいへば夢中になるイダは、此の氣狂ひじみた老婆の傍に居るのが大好きだつた。そして二人が暗い店の中に坐つて、まるで古道具屋が古い銅や、こはれた金や銀の品物を選び分けでもするやうに公爵や侯爵達の名前を鳴り響かせてゐる間に、職工が一人一スウの新聞を買ひに來たり、何處かの女房が新聞小説の續きを待ちこがれて、次ぎの號が出てはしないかと見に来ては二スウ投げ出して行く。若しも婆さんだつたら煙草を、で若し若ければ晝飯の赤蕪を儉約して、巴里の下層民の小説好きの癖で、『僞僕男』とか『モンテ・クリスト』の物語に嚙り付くのだ。不幸な事にマダム・レヴェックには、サン・チエルマンで召使の制服の裁縫屋——彼女に言はせれば『貴族方の裁縫師』だ——をしてゐる孫があつて、二週間毎に夕飯によばれて行くのだつた。さうした日曜日を通すのに、マダム・ド・バランシーはもはやマダム・レヴェックの古臭い本、半端で色がさめて、場末の人間のあらゆる手でよごされて今にもちぎれて無くなりさうな頁の、食べながら讀んだ證據の麵麩の粉や、脂の汚點だらけになつてゐる本の一山より持たなかつた。之等の本は娘達の怠惰、職工共の暇潰しどころかその文學的傾向とでもいつたものを物語つてゐたといふわけは、頁の縁に鉛筆の變挺な註が記されてゐるのが澤山あつたのだ。

彼女はそこで窓の前に一人ぐつたり坐つて頭がぼうとする迄讀みふける。彼女は考へる事、後悔する事を避けようとして讀むのだ。此の職工達の住む大きな家に落ちぶれた彼女は、眼の前の窓といふ窓の健氣な人々の働きを見ても、其の息子のやうに勇氣付けられ、何か働きたいといふ氣など起しはしなかつた。それどころか、より大いなる倦怠、より惱ましい厭氣を感じたのだ。窓の傍で絶えずミシンを動してゐる何時も悲しげな女も、「こんなお天氣に田舎に居る人は……」と言つてゐる可哀想な老婆も、無言と口に出してゐる違ひはあつても、同じ歎きで一層彼女の哀愁を深くさせた。此のすべての悲慘の上にあつた空の清さと夏の日の暑さは、その悲慘をば彼女の眼に一層いたましいものに見えさせ、且又燕の高い叫びにまじつて聞える夕方の聖式を知らせる鐘の音のみが僅かに響くばかりの日曜日の手持無沙汰が、その沈黙と静謐もて彼女の心を重くした。そして彼女は昔の事を思ひ出してゐた。嘗ての散歩、馬車の遠乗り、田舎行きなどの事が、残んの夕日みたいに黄金色に染めなされて彼女の頭に還つて來た。が中でもより新しいエチオルの何年間かどわけても深い痛手となつたのだ。おゝ！ 楽しい生活、賑かな食事、着いた客達の騒しい叫び聲、イタリア風のテラースでの永い夜更かし、それから「彼」柱の前に立つて額を高く腕を擴げながら月の光に吟じた彼、

我は神を信ずるがごとく愛を信ずるなり

彼は何處に居るのだ？ 何をしてゐる？ 三月も放つてあるのに何だつて彼から手紙をよこさないの

だらう？ とその時、本は彼女の手から落ちて、ぼんやり眼を据ゑた儘物思ひに耽るのだが、歸つて來た息子の顔を見て笑顔を装ふのだ。が彼は室の亂雑さや、前にはあんなにもお洒落だつた彼女が、今は草履をつまかけたまゝ物憂げに、しほたれた室着を屋根裏に引き摺つてゐる様子で、直ちに彼女の心の状態を想像するのだつた。夕飯の支度は何も出來てゐない。

「ねえ！ 私何もしなかつたのだよ。暑くて暑くてとても耐らない。それに私ほんとにがっかりしちやつて。」

「どうしてがっかりするのです？ 僕と一緒にゐるの厭なのですか？ 退屈なのですか？」

「いゝえ、そんな事、退屈なんか……お前と一緒に居ながら、どうして退屈なんかするでせう、ヂヤツクや！」

彼女は夢中になつて彼を抱き締める。自分が引張り込まれて行くやうな氣のする深淵から抜け出すために無理に彼に噛り付きながら、

「食事をしに外へ行きませう」ヂヤツクは言ふ「きつと氣がまぎれますよ」

がイダとしてはお洒落が出來るといふ最大の楽しみ、昔の美しい衣裳がまださがつてゐる衣裳籠箆を開けるといふ至上の喜びは無かつた。夫等の着物は今の身分にとつてはあまりに華美、あまりに似合はなかつたので、馬車に乗るか、せめて他ほかの區に出掛けるかしなければならなかつた。貧しい町を散歩するの、彼女は出來るだけ粗末な風をしたにも拘はらず、彼女の服装には何時も何かしら眼に立つも

ザの、胸があきすぎてゐるとか、髪の毛を縮らせてゐるとか、ジュープの大きな髪とか云ふものがあつた。それてチャックはわざと少しばかり年寄振つて、其の眞面目さで、まるでその愛人のやうに見える險呑な母親を保護するのだつた。彼等は何處の看板も一字々々ちゃんと知つてゐる通りから通り、大通りから大通りへとお互に繋り合つて小刻みに長い列を作つてゐる小ブルジョアや、日曜日の晴着を着飾つた職工達にまじつて歩いた。それは正直さうな顔と、頸迄届くフロツクコート、背中に垂下つてゐる肩掛、休息と散歩といふ事の同義語である、たゞ日曜日にだけ取り出される流行はづれの着物、妙な着物の寄集りで、まるで花火の後で群集が四方八方に散らばる時のやうな囁きと足音を町全體に漲らせてゐる。が實際明日といふ日の考へで早くも暗い気分になつた日曜日の夕にはかうした倦怠があつたのだ。チャックと母親は人波について行き、パニヨンかローマンヴェイルの小料理屋に這入つて淋しく食事を

132

する。彼等は少しばかり口をきゝ合つてお互の考へをわかたうと考へる。が夫は一緒に暮してゐる二人の大きな難事だつた。二人はあんなにも久しく別々の生活をしてゐたので彼等の境遇はまるつきりかけはなれてしまつてゐた。若しもイダが古い酒の汚點のおちきつてゐない飲食店の粗末なテーブルの前で顔をしかめたり、コップやナイフなどをきたならしさうに吹くとすれば、下層社會のあらゆる不潔に永い事慣れて來たところのチャックはかうした食卓の怠慢にやつと氣が付く位なものだ。そのかはり高くあげられた精神、日一日と眼醒めて行く其の叡智は、嘗ては生れつきの無智であつたがため、今ではラテ達の間に久しく居たゝめの謬見から來る母親の小品さに驚かされたのだつた。彼女には彼女獨得の言

葉、ダルヂヤントンそのまゝの話しぶりといふものがあつたので、話のはじめからはりまで頑固で斷乎とした調子を去らないのだ。『で私は……で私は……』彼女の言葉はいつもかうして始つたので、おしまひにはきつと馬鹿にするやうな身振りをするのだつたが、それはあきらかにかうした意味を持つてゐたのだ。『お前なんかを相手にしてやるのはほんとにおなげなのだよ、可哀想な職工さん……』何年か同棲するうちに夫婦をすつかり似たものにさせる同化といふ奇蹟のおかげで、チャックは母親の美しい顔の上に敵のおもかけ、彼のみじめだつた少年時代の恐怖である唇の角の皮肉な笑ひをさへ眼にしなければならない事に怖れをなした。思ふ通りの形になる粘土をひねくる彫刻家であつても、この壓制氣狂ひのえせ詩人が此の女をこねまはしたほどには決して自由にしはしない。

ひ思物のダイ

夕飯の後の長い夏の夕方に彼等が好んでする散歩の一つは、元のモンフォーコンの丘の上に急拵へに作り上げたばかりのビュット・シヨールモンの辻公園、洞窟あり、瀑あり、柱廊あり、橋あり、懸崖あり、丘の上から下までなぞへに續いてゐる松林迄ある廣くて淋しい辻公園へ行く事だつた。この苑には、イダ・ド・バランシーに壯大な公園だといふイリウジョンを抱かせる人工的、架空的の一面があつた。彼女は並木路の砂の上にいゝ氣になつて裾を曳き、異國めいた建物や廢墟に眼を墮つたので、よければ喜んで其處に自分の名を記したにちがひなかつた。それから存分に散歩したところで、彼等はその丘から見晴らされる美しい景色を擅にする事の出来る頂上のベンチへ行くために昇つてゆく。漂つてゐる遠くの塵埃の中に浸されたみだいな藍色の巴里が彼等の足下に展べられてゐた。温い湯氣、取留め

の無いざわめきが立ちのぼつてゐる途方もなく大きな桶のやうだ。郊外をめぐつてゐる丘の連りは此の
 霧の中に巨大な圓をなして、一方のモンマントルが片方のル・ペールラシエーズと元のモンフォーコン
 のところで一つに繋つてゐる。

一層彼等の近くには、喜んでゐる民衆の相があつた。五角形の植込の間を曲りくねつてゐる小徑で
 は、晴着を装つた小商人連中が奏樂堂のまはりに渦をまいてゐるかと思へば、元の丘の残つてゐる高い
 上では禿げた芝生や、オークル・ルウジュの土の上で職工の家族達が、山の中腹に散らばつてゐる家畜
 群といふ恰好で走つたり、轉つたり、滑つたり、大きな風を上げたり、散歩者の頭の上のよく響く空
 氣の中に大きな叫びをあげてゐる。不思議な事には、此の職工町の眞中にしつらへられた此の見事な辻公
 園、ラ・ヴィエツトとベルヴィルの住民に對する皇帝の政府の追従物は彼等にとつては、あまりに手
 入れすぎ、あまりにならしたすぎたものだつた。それで彼等はより變化があり、より田舎めいた昔の丘に見
 替へてしまつたのだ。イダはかうした彼等の遊戯を馬鹿にはしながらもぢつと眺めてゐた。そこでも彼
 女の様子、片手で頭を押へた物憂げな態、日傘の先で砂の上に書いてゐる唐草模様、すべてがかう言つて
 ゐた『何て退屈なのだらう！』ヂャツクは此の根強い憂鬱の前に自分の力が足りない事をよく知つてゐ
 た。彼は自分の母親が、彼女の子供じみた考へのすべてを語つて聞かせられるやうな女達の居るあまり
 下品でない家庭を識りたいと思つてゐたにちがひない。ちやうど或る日曜日、此のビユツト・シヨモ
 ノの公園での事だ。彼等の前に田舎じみた風の腰の曲つた老人が茶色つばい服を着て、二人の小さな子

供にかこまれたながら、世の中の祖父だけが持つ、さも氣を取られたみたいなのに如何にも我慢強い様子で、
 その子供達の方に身をかがめてゐるのを見た。

『どうも見たやうな風ですよ。』ヂャツクは同伴者に言つた『きつとさうだ……間違ひはしない……確か
 にムツシウ・ルヂツクです。』

なるほどムツシウ・ルヂツクに違ひなかつた。がすつかり年を取り、すつかり衰へてゐたので、元の
 アンドレの見習職工は、どつちかと言へば彼の傍に居た小娘、がつしりとしたお多福の、鉋で削つて拵
 へてみたい第二のゼナイドと言はないばかりの小娘と、税關の帽子を冠せさへすればマンガンそつく
 りにちがひない小さな男の子のおかげで夫と知つた程だ。

『やあ、小僧！……』

老人は近づいて行つたヂャツクにから言ふと悲しげな微笑を洩らしたが、それは彼が受けた總べての苦
 痛を示したものだつた。その時ヂャツクは彼の帽子に大きな喪章のついてゐるのを見付けた。そして新
 しい悲しみを甦らせる事を怖れて誰の消息も尋ねなかつた。と道の曲り角でゼナイドの姿が現はれた。
 以前にも増してがつしりと肥えて、が今では大きな鬘のジュツプをほんとのローブに換へ、ゲランド女
 の頭巾を巴里風の帽子に換へてゐた。全く妙なきまではあつたが、如何にも人の好い様子だ。彼女は税
 關吏のムツシウ・マンガンに腕を與へてゐた。彼も今では昇級して巴里の税關にかはり、上等の羅紗の
 制服に金の袖章をつけてゐる。ゼナイドは美男子の此の税關吏がどれほど自慢だつたらう。如何にも手

ヤ 荒く引張りまはし、一々彼の返事を横取りしはするけれど、どれほど彼女の大切なマンガンを愛してゐるやうに見えたらう！ そればかりぢや無い、マンガン自身もかうして引張りまはされる事を嬉しがつてゐたと考へなければならなかつた。何故なら彼はそれは幸福らしい晴れやかな顔をしてゐたので、妻君を眺める様子を見たゞけで若しももう一度結婚を仕直すのだつたら、彼女といふものをよく知つた彼は今では持参金無しでも彼女を娶るにちがひないといふ事が察しられた。ヂヤツクは母親を此の好人物達に引合はせた。それから二組に分かれて歩いてゐたのを幸ひ小聲でゼナイドに訊ねた。

『一體どうしたのですか？ マダム・クラリスが……』

『さう死んだのですよ、二年前、酷い死に方で、ロアルに溺れて、災難で。』

それからゼナイドは聲を落してつけ加へた。

『私達は「災難で」と言つてゐるのよ、お父さんのために。が貴方はあの女をよく知つてゐるのだから、ヂヤツク、災難で死んだのでは無い事、ナンテに逢はれないのが悲しくて自殺したのだといふ事が解るわね……あゝ！ ほんとにかうした人間があるのだから……世間の人はそのための私達の苦勞を知らないのだけれど！』

人のいゝゼナイドは語りながら、父親の方を眺めて歎息をついてゐた。ヂヤツクの胸を痛くさせたとは知らないで。

136 『可哀想なお父さん』ゼナイドはつけ加へた。

『私達はお父さん迄どうかしはしないかと思つたのだから……おまけにほんとの事を少しも疑はないのよ。さうでなければ……ムツシウ・マンガンが巴里に轉任した時、一緒に連れて来て、今では皆揃つてシヤロンヌのリラ通りで税關のすぐ近くの、近所に庭ばつかりしか無い小さな通りに住んでゐるのよ……尋ねて来てくれるわね、ヂヤツク？ 貴方も知つての通り、お父さんは何時もほんとに貴方を愛してゐたのだから……きつと貴方だつたら口を利かせる事が出来るやうになるかもしれない……私達にはたゞの一言も話をしないのよ……たゞ子達のおかげで氣がまぎれてゐるの……傍へ行きませう、さつきから二度も此方を見てゐるわ。きつと自分の事を言つてゐると思つてゐるのよ、そして夫をそりや厭がるのよ。』

ムツツウ・マンガンとしきりに話し合つてゐたイダは息子が傍に來たのを見て、ぼつたり言葉を罷めた。何をそんなに面白さうに話す事があつたのだらう？ ベール・ルヂツクの一言がすぐに彼に了解させた。

『あゝ！ さうださうだ。よく話をした、それに黒麥の菓子が好きだつたつけ』

彼にはダルヂヤントンの話だといふ事が解つた。良人の消息を尋ねられたイダは、彼の事を語るのが嬉しくてお喋舌を始めたのだ。詩人の才能、その文學的闘争、文壇で彼が占めてゐる高い位置、頭の中に轉つてゐる戯曲や小説の構想、彼女はすべてのを説き去り、説き來り、相手は少しも譯が解らずに、お義理で聞いてゐたのだ。やがて再會を約して別れた。ヂヤツクは母親がレヴェツクヤルヴァアンドレの

カツヤ
 處に入り浸らないで済む事を考へて、ペリゼール夫婦よりは少しは社會的地位の高い此の善良な人々に
 出逢つた事を大層喜んだ。それで彼は時々イダと一緒に彼等の家を訪問して、場末の狭い家の中にアン
 ドレの時と同じやうにストロップの上に飾つてある貝殻や、海綿や、龍の落し子や、それからゼナイドの
 部屋の聖畫、金具のついた大きな衣裳箆筒、ブルターニユの家の内部が田舎の眞中とでも言ふやうなイ
 リウジョンを提げて、巴里の砲壘の傍に島流しにされてゐるのを見た。彼はこの正しい人々の中に居る
 事と、すつかり田舎じみた清潔が氣に入つた。が間もなく彼は母親が、彼女に較べてあまりに勤勉、あ
 まりに實直なゼナイドを相手に早くも退屈してゐる事、其處でも彼女は彼が伴つてゆく何處でも同じ
 やうに、彼女が「職工臭い！」と言ふ此の短い言葉で言ひ現はす同じ嫌惡、同じ憂鬱につきまとはれて
 ゐる事を見逃さなかつた。

パノアイヨー通りの家、廊下、息子と一緒に住んでゐる室、彼女の食べる麵麩、すべてが或る臭、あ
 る特別の味、貧民街、下層民の集團、工場の煙、労働者の汗が大都會のある部分に漲らせるあの不潔な
 空氣にしみてゐるやうに見えた。職工臭い！窓をあければ庭の中にその臭がした、外に出れば通りは
 不健康的な生温い風が夫をもたらし、彼女が見る限りの人々、彼女のチャツクでさへが油にしみた仕事
 着を着て工場から歸つて來た時にはこの貧乏臭い臭氣を放つので、それは彼女にこびりついて離れず
 限らない悲しみと人を自殺させる倦怠に誘ひ込むのだつた。

八 何れを

或る夕方チャツクは、母親がとても元氣な様子で眼を輝かせ、血色はうるはしく、彼が心配をはじめ
 た衰弱も何處へか行つてしまつたやうな風なのに氣が付いた。

『ダルヂヤントンが手紙をよこしたの。』彼女はすぐに言つた『さうなのだよ、お前、あの男は私に手紙
 をよこしたりしたのだよ……四月もほつたらかして置いてさ、私が平氣であるものだから、たうとう我
 慢が出来なくなつたのだよ……それで小さい旅行から巴里に歸つて來たの、私に用事があれば何時でも
 逢ふなんて言つてよこしたの。』

『貴女はあの男に用事は無いでせうね？』
 はつとして母親の様子を窺つてゐたチャツクは尋ねた。

『私に用事があるつて！……私にはあんな男などいりはないわ……それどころか私が居ないで困るの
 はあの男さ……ペンを握る事より知らない男だもの。あゝ……あんなのがほんとの藝術家だわ！』

『返事を書くのですか？』

『返事を書くの？……私の體に手をあげたやうな無禮な人間に……あゝ！お前には此の私が解つてゐ
 ないのね、神様のお恵みで、私だつてお前が思つてゐるよりも氣概があるのだよ……手紙だつておしま

ヤ ひまで讀みはしない、びり／＼に破いて何處かに放つてしまつたわ……ほんとにさ？ 私みたいにお城
の中でゆつたり育てられて来た女にあんな亂暴をするなんて……がこまやあしない！ でも私が居てき
ちんとするのぢや無いから、家の中がどんなになつてゐるか見てやりたいものだわ。きつと酷い無駄遣
ひをしてゐるにちがひない。せめて……あゝ、いゝえ、そんな事は出来ない。私のやうな大馬鹿はさう
は居はしない……兎も角確かにあの男は退屈してゐるのだわ。何しろ二月もあの……あの……何と云つ
たつけ、彼處は？」

女は滅茶々に破いて捨てたと言つた手紙をおちつきはらつてポケットから出すと、その所の名を探
しにかゝつた。

『あゝ、さう／＼！ ロアア温泉に行つたのだわ……何て滅茶だらう！ 温泉はあの男に何よりも可
けないのに……が何でもしたい事を勝手にするがいゝわ、もう私の知つた事ぢや無いのだから。』

チャックは其の嘘に彼女のために顔を赤くしたがそれに就いて何も言はなかつた。寝る時迄彼は、テ
ーブルのまはりを動き廻る事によつて何かの考へをまぎらさうとする女達に見る落付かない氣忙しさを
彼女に感じてゐた。彼女のはじめの頃の健氣な意氣込を取り返して室の中を片附けたり、掃除をする。
それから歩いたり仕事をしたりしてゐながら、頭を振り振り、咎めるやうな口調で何やら口ずさんでゐ
た。それからチャックの椅子に身を屈めて彼を抱擁し愛撫した。

『ほんとにお前は感心ね、チャックや！ 何てよく勉強するんでせう！』

141 それどころか、彼は母親の魂の中に起つてゐる事に氣を取られて少しもよく勉強などしてゐなかつた
のだ。

『母さんが抱擁してゐるのは僕かしら？』

彼は獨語を言つた。そして彼の此の疑惑は、得意な過去がどれだけ此の女の憫れな心を再び囚へてしま
つたかと證明する小さな一事で裏書きされた。彼女、はダルチャントンが大好きで、かはたれ時燈火あかりを
つけずによくピアノを叩き叩きした『落葉のヴァルス』といふのを口ずさんでゐるのだつた。

舞へや、舞へや、狂へる如く

あはれ落葉よ、舞へや、舞へ！

サンチマンタルな長つたらしい、しかも最後の拍子をゆるく引張りながら、一層だらけさせてゐた此
の折返ルンしは彼女につきまとひ、こびりついてゐたので、彼女の思ひの消長通り途中でふと罷めて見たか
と思ふと又きれ／＼にうたひ出したりした。

何れも言葉も、恥しく惱ましい思ひ出をチャックにもたらしした。あゝ！ 若しも彼に夫が出来たら、彼は
どのやうな苦しい眞實をこの愚かな女に語り聞かせたらう。どれだけ腹立たしく此の落葉、此の哀れな
空しい頭の中では狂はしく一杯に舞ひ踊らうとする枯葉をどん／＼負籠に投げ込みたかつたらう。

ナ
が夫は彼の母親だつた。彼は彼女を愛した。彼は彼女を尊敬する事に依つて彼女自身自分を尊敬する事
を教へたかつたのだ。で彼は何も彼女に言はなかつた。只此の危険を最初に知つてからといふもの、彼
の心は裏切られようとする人間のやうに、あらゆる嫉妬の感情にさいなまれた。彼は自分が出かけてゆ
く時の彼女の様子を窺ひ、歸つた時どのやうに微笑んで迎へるかを窺ふやうになつた。彼は彼女のため
に、孤獨が無爲の女にもたらす狂熱と夢見をいたく怖れた。が彼女を監視する何等の方法も無かつた。
彼女は彼の母親だつた。彼は彼女に對する不安を誰にも打明ける事が出来なかつた。一方イダはダルヂ
ヤントンの手紙以來より甲斐々々しく家の事にいそしんだ。彼女は家事に精を出し、息子の食事の支度
をし、何時の間にか忘れたまゝで放つてあつた家計簿をさへ引張り出して來た。チャツクは少しも氣を
ゆるめなかつた。彼は細かな注意、緻密な心盡して誤魔化され、そして無言の悔恨の表明で、彼等の不
幸の日はじまりを知る事が出来る、裏切られた良人といふものゝ話を知つてゐた。一度彼は工場の歸
りにヒルスとラバサンドルが腕を組んでパノアイヨ一通りの角を曲つたのを見たやうな氣がした。こん
な場末の、雑誌社から、そしてオギユスタンの河岸からひどく遠い町に一體彼等は何の用事があるのだら
う？

『誰も來はしませんか？……』

142
彼は家番に尋ねた。そして其の答の様子で、如何にも欺かされてゐる事、最早何かの陰謀が彼に對して
企まれてゐる事を感じた。次ぎの日曜日エチオルから歸つて來た彼は、母親が讀書に夢中になつて、彼

143
の上つて行つたのにも氣が付かないでゐるのを見付けた。久しい前から彼女の小説氣狂ひに慣れて來て
ゐる彼はかうした事にさまで氣を留めなかつたのだが、イダは膝の上に擴げてゐた薄い本を急いで隠し
てしまつた。

『まあ、吃驚した！』同時に彼女はチャツクの注意をそらすために、わざと其の感動を誇張しながら言
つた。

『何を讀んでゐたのですか？』

『おゝ、何でも無いの、つまらないもの……彼方ぢや皆丈夫なの、ドクツールも、セシルも？ 私のか
はりにあの女を忘れずに接吻してくれたかえ？』

が語つてゐるうちに透きとほるやうな美しい顔がだん／＼赤くなつて行つた。何故ならちき嘘をつくく
せに、上手につけないのが此の子供みtainな女の特性の一つだつた。少しも彼女から離れない視線に耐
へられなくなつて彼女は苛立たしげに立ち上つた。

『私の讀んでる物が見たいのね……さあ御覽』

彼ははじめてシドニユスの焚部屋で讀んだと同じ雑誌の光澤紙の表紙に氣が付いた。が前より薄く、
殆んど半分の厚さになつて、誰も買手が無い雑誌に特有な例で粗末なザラ紙に印刷されてゐた。それと
相も變らぬ滑稽な誇張ぶり、内容の無い御大層な題、氣狂じみた社會研究、管をまいてゐるやうな學
說、俗歌のやうな詩。若しも目次の頭に次ぎのやうな題が眼につきさへしたつかつたら、チャツクはこ
れ何
を
？

ザの變挺な雑誌をあける事さへしなかつたにちがひない。

クツヤ

不和(抒情詩)

アモリ! ダルヂヤントン子爵

それはこんな風に始つてゐた。

去りし女へ

こは如何に! 別れの言葉も無く! こは如何に! 頭もめぐらさず!

こは如何に! 去り行く^{とほそ}櫃を顧るなく! こは如何に! ……

二百行ばかりの詩がごちやくと長く、くだらない散文のやうに頁を黒くしながら續いてゐたので、しかもまだ序詩だけなのだ。間違へる事が無いやうに四五行毎に繰り返されてゐたシャロットの名前が讀む者に十分悟らせた。ヂヤツクは肩を聳かしながら放り捨てた。

『であの破廉恥漢が送つてよこしたのですね?』

『さうなの、二三日前誰だか知らないけれど階下迄持つて来て置いたのだよ……』

144

彼女はおづく答へた。一しきり沈黙が續いた。イダは雑誌を拾ひ上げたいのは山々だったがさすがに

145

ようしなかつた。がたうとう何氣無く身を屈めようとした。ヂヤツクはその様子を見ながら言つた。

『夫を取つて置きはしないでせうね。實際馬鹿げてゐます、その詩は。』

『まあ、私はさう考へない!』

『さうですとも……わざと感動した様子を見せるために横腹を叩かうが、鵠のやうにひつきりなしに

「コア! コア!」言はうと駄目です。只の一度も感じさせられはしない。』

『ヂヤツク、そりや酷いわ。——彼女の聲は震へてゐた——私は誰よりもよくムツシウ・ダルヂヤントンと其の缺點を知つてゐる、さんざ夫に苦しめられたのだから。人間としてなら何でもお前の言ふ通りを聞くけれど、詩人としては別問題ですよ。誰でも言ふ事だけれど、ムツシウ・ダルヂヤントンは佛蘭西では嘗て比類の無い情操を持つてゐるのだよ……情操だよお前!……ミュッセにも夫はあつたけれど、高調されない、理想の無いものだったの。其の點から言ふと、『愛の信仰』は較べるものが無いのだよ。が私の考へでは、此の『不和』のはじめはもつと人の心を動かすところがあるわ。無踏會の着物の儘で朝霧の中を一言の別れの言葉も言はず、後も振向かずに立ち去つた若い女……』

『だがその女といふのは貴女ぢやありませんか! 貴女はどうして、どのやうな厭はしい理由で、出て来たか知つてゐる筈です!』

彼女は震へながら答へた。

何れを?

「ヂヤツク、お前がいくら私に恥しい思ひをさせようとしても、あの時の侮辱をいくら思ひ出させよう

とおしても、夫と之とは違ふ藝術上の問題で、それに私はお前よりか少しは餘計に解るつもりですよ。たとひムツシウ・ダルヂヤントンがあつたの百倍も酷く私を侮辱したにしても、私はあの人を現在の文壇の一人であると言ふ事を躊躇しやしません。今ではあの人を馬鹿にしてゐる者があるけれどその人達はきつと後になつて『私はあの人を知つてゐる……一緒に食事をした……』といふ事を自慢らしく言ふやうになるにちがひないのです。』

夫を言つてしまふと彼女は、彼女の心の秘密の永遠の聴き手であるマダム・ルヴァンドレの處へ行くために昂然として出て行つた。そしてそれはや勉強——彼をセシルに近寄らせるところの勉強は、惱みの裡の其の唯一の慰めだつた——に取りかゝつてゐたヂヤツクは間もなく隣の室で大聲に讀んでゐるその詩が感歎の讚辭と、鼻をかむ音でそれを知られる涙に途絶えながら聞えて來るのを聞いた。

『しつかりしなければならぬ……敵が近寄つてゐる……』

可哀な青年は考へた。そして其の通りだつた。彼のシャロットから離れてゐるアモリー・ダルヂヤントンは、彼女が彼から去つて屈託してゐると同じだけに不幸だつた。犠牲にされる方もする方もお互に離れられない二人は、足りないちぐはぐの生活の空虚を兩方で痛切に感じてゐたのだ。別れたはじめの日から詩人は失戀ぶつた様子をして、蒼白い大きな顔に馬鹿に劇的なバイロン流の表情を泛べてゐたのだ。人々は夜のレストランや、夜會をさせるビアホールで彼が追従家や絞屋達にとりまかれ、『彼女』たゞ彼女の事だけを話し合つてゐるのを見かけた。彼は其處に居る男や女達にかう言はせたかつたのだ。

のだ。

『あれは大詩人のダルヂヤントンだ……愛人に行かれたのだ……氣をまぎらせようとしてゐるのだ。』なるほど彼は氣をまぎらせようとした。外で夜食をしたり、夜あかしをしたりした。が間もなく彼は此の不規則で不經濟な生活が煩はしくなつた。實際まはりにゐる田舎者達に『あの人死なうとしてゐるのだ……女のためだとよ……』と言はせるために、夜中のレストランで『給仕！ 生のアブサンを一つ』と言ふのはとても素敵だつた。が健康が言ふ事を聞かなくなつた時、大聲でアブサンを呼んでから『ゴムを澤山持つて來てくれ！』と言はなければならぬに到つてはあまり英雄的でも無い圖だ。かうした生活を何日か續けて行くうちにたうとうダルヂヤントンは胃をそこなつて、發作は何時かの時よりも度起り、おまけにシャロットの居ない事は一層彼に恐怖を感じさせた。彼女で無くて誰がその絶間無い愚痴に耐へ、散薬や煎薬の時間に氣を配り、まるでムツシウ・ファゴンが路易大王にまゐらせる時のやうな敬虔さでも夫を持つて來る事が出來たらう？ 病人の稚氣が彼に還つて來た。彼は一人で居るのが怖くて絶えずヒルスか誰かを長椅子の上に寝かして自分の部屋に留めて置いた。夜がたまらなく侘しなかつた。何故なら彼はすべての女、イダのやうな狂氣じみた女でさへが自分達のまはりから取除ける事を知つてゐた亂雑と埃にとりまかれてゐたからだ。火はよく燃えない。ランプもさうだ、透間風が戸の下から通ふ、それで彼は自我、利害關係から眞底彼女に未練を起したのだつた。彼は始め、さう見せかけようとしてゐる間にほんとに不仕合せになつたのだ。

それで氣をまぎらせるために旅行を企てたが、夫も少くとも彼の手紙の悲觀的文句から判断すると大して成功しなかつたらしい。

『可哀さうに、ダルヂヤントンからそれは悲觀した手紙をよこしたぜ……』

ラテ達は氣の毒さうな、が同時に満足らしい様子で言合つた。彼は誰も彼もにその『とても悲觀した手紙』を送つたのだ。『ひどい言葉』の代りになつたのだ。どつちにしても彼は一つの考へにさいなまれたのだ。『あの女は俺無しで平氣である、俺が居なくても息子と一緒に幸福にしてゐる。』この考へが彼を苛立たせた。

『この事で詩を作れよ……』歸つて來ても、行く時と同じに失望してゐる彼を見てモロンヴァルが言つた『きつと紛れるよ』

直ちに彼は仕事にかゝつた。そして久しい以前から詩人が執つてゐる、決して推戴をしないと云ふ遣方で、間もなく彼には『不和』の序詩が出来上るに違ひなかつた。ところが不幸な事に、詩作は彼の精神をしづめるどころか一層昂奮させた。彼は自分の心におもねるために本物より一層美しく、一層清淨な、その無理やりのいと高遠な神アンスセラシオン 韻もて天上遙かに擔ぎ上げたところにのシヤロットを考へ出したのだ。そして其の時から離れてゐるのがとても耐へられなくなつてしまつた。で雑誌に『不和』の序詩が發表されるやいなや、ヒルスとラバサンドルがパノアイヨー通りに一冊持つて行くべく委ねられたのだ。此の四を放つて後、ロロット無しには確かに生きられないと極めのついたダルヂヤントンはばつ

さり遣付けようと決心した。彼は髪を縮らせ、ボマードを塗りたくり、靴を美しく光らせて、戸口に待たせて置く筈の辻馬車に乗り込むと、女達だけが家に残つてゐる、そして郊外のすべての工場が黒い煙の渦を空中に立ち昇らせてゐる午後二時といふのにパノアイヨー通りに出掛けて行つた。一緒に行つたモロンヴァルは家番に話をするために馬車を降りて、間もなく又歸つて來た。

『上つて可いよ……七階の廊下の突き當りだ……居るよ。』

ダルヂヤントンは上つて行つた。顔はいつもより蒼ざめて、動悸がしてゐた。彼の心を動揺させたのは實際戀そのものよりは其の騒ぎの方だつた。事件の小説めいた半面、まるで人浚ひでもするやうに道の隅に待たしてある馬車、中でもいゝ氣味で耐らないのは仕事から歸つたヂヤツクが、鳥が飛んで行つてしまつたのを見た時の失望を考へる事だつた。彼の計畫はかうだつた。まづ不意に彼女の前に現はれる、足下にひれ伏す。驚いて狼狽してゐる暇に素早く抱きしめて言ふ。『さあ行かう！』それから馬車に乗せて、はい、左様なら！ 彼女は三月の間にすつかり變つてゐるかも知れないが、又黙つて連れて行かれるかもしれない。さうであつたからこそ彼は何も言つて置かなかつたのだ。それだからこそ彼はあらゆる壁の龜裂が貧を語り、澤山竝んだ入口は鍵を其處に懸けつ放しで、『何も盗む物はありませんよ……』這入りたい人はお這入りなさい。』と言つてゐるみたいな廊下の中を靜かに歩いて行つたのだ。

彼は勿體振つた調子で『俺だよ』と言ひながらノックもしないで飛び込んだ。

惨い當外れ、意氣揚々と飛び込んで行つた彼に、之は又飛んでもない當外れだつた！ 彼の前に立

ヤつたのはシャロットぢや無い、チャツク、工場主の何かの祝ひで今日一日が休みになつた爲に熱心に書物を綴いてゐたチャツクだ。イダはと云ふと、闇の寢臺の上に横になつて、いつもの通り何時間かの晝寝に退屈な時間の暇潰しをしてゐるところだつた。顔を合はせた二人はお互に茫然と見合つてゐた。今度は詩人に弱味があつた。まづ自分の家で無い。それに悠揚迫らない智的な顔——そこには情人を一層失望させたところの母親に似た或る美が現はれてゐた——をした大きな青年をどうしたら目下扱ひされたらう!

『何しに來たのですか?』

チャツクは戸口に立ち塞りながら言つた。

片方は赤くなつたり青くなつたりしながら吃り吃り言つた。

『それはあの……君の母親が此處にゐると聞いたので……』

『成程居ります、が僕が一緒です、貴方は逢ふ事は出来ません。』

之だけが早言で小聲で、お互の憎しみもて言はれた。それからチャツクは何事を仕出かすかと思はせるほどの激しさで母親の情人に詰寄つて、仕方無く彼を後ずさりさせ、そして彼等は廊下の中で相對した。茫然と狼狽したダルチャントンは強ひて落付いた様子に構へながら傲然とした、が同時にしんみりとした調子で言ひ出した。

150 『チャツク、俺達は久しい前から誤解し合つてゐたのだ。が今では君も眞面目な大人になつて人生を見

151 る眼が開けたのであるから、此の誤解は最早永續さるべきでは無い。俺の此の手、決して偽りのない握

手を受けてくれ給へ。』

チャツクは肩をそびやかした。

『僕達の間でそんな喜劇が何の役に立つのです? 貴方は僕を嫌ひ、僕は貴方を憎む……』

『一體何時から我々はそんなに敵同士なのだ、チャツク?』

『多分お互がまだ知り合はない前からせう。思ひ出す一等の昔から僕は心で貴方を嫌つてゐたのです! 第一、私達二人は敵同士でなかつたとしたら何になれるのです? 何といふ別の名を貴方に上げられるのですか? 貴方は私にとつて何です、貴方を知らなければならぬと云ふ事があるのですか? それに僕の一生涯で、若しも僕が怒る事なしに貴方の事を考へる場合、顔を赤めないでゐられると貴方は信じるのですか?』

『成程、俺達の境遇がお互に間違つてゐる、全く間違つてゐるといふ事は俺も認めるが、君は一の偶然、一の因縁に就いて俺に責任を負はせる事は出来ない……要するに人生は小説では無い……夫に就いて……』

何れもがチャツクは今迄にも飽く程聞かされた此の漫然とした考察を中途で遮つた。

『仰有る通りです。人生は小説ではありません。それどころか全く眞面目で眞剣です。其の證據には、僕の時間はちゃんと定つてゐるのでつまらない議論に夫を費す事は出来ないのです……十年間母は貴方

ナに屬してゐたので、貴方の奴隷、貴方の物品ものだつたのです。この十年間にどれだけ僕が惱んだかは、子としての誇りが夫を貴方に示さなかつたのです。がそんな事は罷めませう。母は今では僕の物です。僕が取り戻したので、どんな事があつても手放しはしません。決して貴方に返しはしません……それにしても母をどうするのですか？ 一體どうしようとするのですか？……髪の毛には白髪がまじつて、皺だらけです、さんざ貴方が泣かしたので……最早美人ではありません、貴方の虚榮心を満足させる事の出来る愛人ではありません。彼女は母親です、僕の母です、僕の物にさせて置いて下さい。』

彼等は、子供達の泣聲や、この大きな職工の巢に珍しい事はない他の口論の聲が時々聞えて来る陰氣できたならしい階段の上の狭い所で、顔と顔をまともに見合はせてゐた。言葉の一つ一つが恥辱をさらけ出す、此のいたましく恥しい場面にふさはしい場所だ。

『君は僕のしよんとする事の意味とひどく履きちがへてゐるのだ。』詩人は落付きはらつてゐるくせに眞蒼になつて言つた。『俺はシャロットを尊敬すべき事、君の収入が僅かである事を知つてゐる……俺は年取つた友人として來たのだ……若しか不自由をしてはゐないか、俺に用がありはしないかを見に來たのだ。』

『僕達は誰にも用が無いのです、僕の仕事で二人が暮して行くのに十分です。』

『君は大層立派な口を利くやうになつた、チャツク君……前にはさうぢやなかつた。』

152 『仰有る通りです。ですから以前は忍んでゐたものゝ、今ではもはや貴方と顔を合はせてゐる事を厭は

153 しく思ふのです。それで最早之以上其の恥辱に耐へてゐたくない事を申し上げます。』

チャツクの態度は如何にも斷乎とした烈しいものだつた上に、眼さへが全く言葉を裏書きしてゐたので、詩人は一言も挟む餘地無しに重々しく引き退ると階段を六つ降りて行くのだつたが、りゆうとした服装や、髪を縮らせた様子はさも不釣合に、此の妙な都の巴里の端から端迄に種々なコントラストをなしてゐる社會的懸隔を思はせるものだつた。チャツクは彼の姿が見えなくなるのを見て室に歸つた。イメは蒼白い顔をしたがら髪を亂し、睡氣と涙に眼をはらして戸の前に立つて彼を待つてゐた。

『私は此處に居たのよ。』彼女は小聲で言つた。『私はすつかり聞いたのだよ、何もかも、私が年寄で、皺だらけだといふ事も。』

彼は彼女の傍に寄ると兩手を執つてちつと、眼に見入りながら、

『まだ遠くには行つて居ません……呼び返させようか？』

彼女は手を振りもぎると矢庭に彼の頸に飛びついた様子で、もと／＼彼女が破廉恥な女でないといふ事が窺はれた。

『いゝえ、チャツクや！ お前の言ふ通りです……私はお前の母親、たゞお前の母親、それだけです、何處迄もそれだけで居たいのだよ。』

? なれ 何 此の事件から數日後、チャツクは次ぎのやうな手紙をムツシウ・リヴァルに送つた。

『我が友、我が父上、最早おしまひです。母は私を捨て去りました。彼と俱に行つたのです。夫は言うやうやうないたましい、思ひもよらない事情のもとに行はれたので、私の受けた打撃は一層のものであります……あゝ！ 私が愚痴を言ふのは母親の事です。何も言はない方がまさるにちがひありません、私には夫が出来ません、私は小さかつた時に、『世の中の人歎息しません、世の中の人息つまります。』と言暮してゐた可哀想な小さい黒奴を知つてゐました。今日ほどよくその言葉の意味が判つた事はありません。若し私が貴方にこの手紙を書かなかつたら、此の歎息を貴方に向つて吐かなかつたら、私の胸の苦しみは私の呼吸をさまたげ、私の命を絶つたでせう。日曜日迄待つだけの勇氣さへも無いのです……あの男と言ひ合つた事に就いては前に申し上げました。其の日から私は氣の毒な母親がそれは悲しさうにしてゐる事、彼女のしてゐる事がその力に餘つてゐる事に氣が付いてゐましたので、彼女の氣を換へ、その心配を逐ひやるために住む町を變へようと決心したのでした。私には戦鬪が開始された事、そして夫に勝ちたければ、母を自分の傍に置いておくためにあらゆる手段、出来る限りの巧智を用ひなければならぬ事が解つてゐたのです。私達の町私達の家が彼女の氣に入らないのです。オギユスタンの河岸の家をあまりに思ひ出させないため、より華か、より派手やかな何物かゝ必要だつたのです。それで私はシャロンヌのリラ通りに野菜を作つてゐる人の庭の奥に、近く修繕したばかりで新しく壁紙を替へた三間の家を借りて、今迄のよりは少し揃つた、少し氣の利いた家具を備へ付けたのです。僅かばかりの貯へ、——あまりに細かい事まで申上げるのを赦して下さい。が私はすべてを申上げようと決心した

のです——六ヶ月以來自分の登録と試験のために貯へて置いたすべてをそれに廻はしてしまつたので、多分貴方も賛成して下さる事と考へてゐたのでした。この事に就いてはベリゼール夫婦、父親と一緒に其處の通りに住んでゐるゼナイドが手傳つてくれたので、殊に善良な彼女には氣の毒な母親の氣をまぎらせてもらふといふ期待を持つてゐたのでした。そしてすべては祕密の中になされたので、全く愛する女のためにする、思ひもよらぬ贈物と言つたやうでした。何故ならこの新しい闘ひに於て、實際私は敵の陣地にあつて争はなければならなかつたのでした、ほんとに私は其處に越したら、どんなに彼女は住み心地がよいだらうと考へました。まるで村里のやうに静かな郊外のはづれ、塀よりも高い樹木、板圍ひの中から起る牡鶏の歌、私にはすべてが彼女を喜ばせ、彼女が忘れかねてゐる田園生活のイリウジョンを少しでも與へる事が出来るやうに思はれたのでした。

終に昨日の夕方、家は彼女を迎へるだけにすつかり用意が整へられたのでした。ベリゼールが彼女に、私がルヂツクの家で待つてゐると告げて、夕飯の時間に私の處へ伴つて来る手筈にして置いたので、私は彼等よりもずつと早く着くと子供のやうに喜びながら、すべての窓に薄色のカーテンをかけ、ストープの上に大きな薔薇の花束を飾つて、眞新しい迄に光つてゐる私達の家を誇らしく歩きまはつてゐたのです、夕方が少し涼しすぎたので、私は火をおこしました。そのために家はもはや人が住んでゐたみたいなたいな住心よさうな風が見えて、私は嬉しくて耐らなかつたのです……ところが！ 信じて下さるでせうか？ 喜んでゐる最中に、私はふといまはしい豫感が頭をかすめたやうな氣がしたのです。それは

全く電光のやうに慌しく鮮かでした。『彼女は来ないだらう！』私は自分で自分を氣狂扱ひにして、彼女のための椅子や食器を用意したり、静かな道の中にその足音がしはしないかと耳を澄ましたり、すべての物が彼女を待つてゐた室から室を歩きまはつたのですが何の役にも立ちません。私は彼女が来ないに違ひないといふ事が解つてゐたのです……嘗て自分が苦しめられたあらゆる過去の裏切りによつて私はかうした先見の力を得たのでした。ちやうど運命がその痛手を自分に加へる前に、言はゞ憫みによつてその惱みをやはらげてくれるために豫告をしてくれるやうなものです。彼女は来ませんでした。ペリゼール一人がおそくなつてから、私に渡せとことづかつた手紙を持つて來ました。ほんの短い大急ぎで認めたもので、ムツシウ・ダルヂヤントンが重い病氣をしてゐる事、そして彼女は彼の枕許へ行つて坐るのを自分の義務だと考へるといふ事が書いてありました。で癒りさへすれば歸つて來るといふのです。病氣！ 病氣とは私も思ひよりませんでした。それがなかつたら私もまた病氣だと言つて、彼がしたやうに彼女を自分の枕許に留めて置く事が出來たのです……おゝ！ あの悪人は何處迄深く彼女を識つてゐるのでせう！ 何處まで彼は、奉仕と庇護に熱中する此の弱々しく善良な心を究めたのでせう！ 貴方は、彼がエチオルでこぼしてゐた、しかもテーブルでおいしい食事にあつたつきさへすればけろりとしたあの妙な發作を診ておやりになりました。彼の今度の病氣といふのも夫なのです。が恐らく母は和解の口實が出來た事を喜んでわざと此のベテンにかゝつたのです。それで若しも私が病氣、ほんとの病氣にかゝつたにしても彼女はきつと夫を信じないにちがひありません！ さて悲しい私の物語りに還る

として、貴方は私があんなにも奔走し、努力し、お金を全く無駄に使つた後ですつかり歡迎の準備を整へた私の小さな離れの中に、たつた一人私が居られるとお考へになりますか？ あゝ！ 慘酷な母、慘酷な母……私は其處に留らうとは思ひませんでした。私は元の部屋に歸りました。私にとつてその家はあまりに悲しい、まるで死者の家ほどに悲しかつたのです。何故なら私にとつては最早其處に母が住まつてゐたのと同じ事です。私は爐の火を灰になし、薔薇の花が大理石の上に静かな音を立てゝくづをれるのを後にして出て來ました。家は二年間の契約で借りたのです。それで私は秘藏の小鳥の逃げた後の籠をその歸つて來るのを待つて何時迄も開けた儘にして置く人達のあの迷信に倣つて、期限の來るまで借りて置きます。若し母が戻つて來れば一緒に歸つて行きますが若し歸つて來なければ私は決して其處に住ひますまい、私の狐獨は喪のやうな悲しみとなるでせう。之ですべてを申上げました。それで此の手紙は只々貴方だけのため、セシルが讀んではならないといふ事を申上げなければならぬでせうか？ 私はとても恥しいのです。私は、彼女から見れば、この汚辱の何物かと私の上、私の純潔な愛の上にまで及んでゐるやうに見えはしないかといふやうな氣がします。若しかして、彼女はもはや私を愛さないかも知れません……あゝ萬一かうした不幸になれば、私はどうなるでせう。私にはもはや彼女より無いのです。彼女の愛情が私のすべてです。で私が大いなる失望を以て、一人この皮肉な空家に對した時、私はたゞ一つの思ひ、たゞ一つの叫びより持ちませんでした。『セシル！……』若し彼女迄が私を捨てたらば！ あゝ！ 愛する者に裏切られるといふ事は、何といふ怖しい事です。何故ならその裏

サ
切りは人の心に他の夫の恐れまでもたらすのです……が一體私は何を考へようといふのでせう？ 私は
ク ツ ヤ
彼女の言葉、彼女の誓ひを得てゐます。そしてセシルは嘗て偽つた事がありません。』

九 娘の心が變つた！

永い事彼は母親が歸つて来る事を信じてゐた。朝も晩も静かな勉強の間に、度々彼は廊下の中に衣摺れの音がして戸の傍に近寄つて来るみたいなきい足音を聞いたやうな氣がするのだつた、ルヂツクの家へ行く度にいつもリヲ通りの小家が開かれて、イダが此の隠れ家に居はしないかと眺めるのだつた。何故なら彼はその處書を送つたのだ。『家が待つてゐます……貴女のためです……何時でもいらつしやるばかりになつてゐます……』何の變りも、返事さへもなかつた。確かに彼は捨てられたので、もはやどうしようといふ餘地も無かつた。

ヂヤツクは惱みに耐へられなかつた。私達が母親に苦しめられる場合、それは神様の間違ひかその無慈悲であるのやうに、或ひは又不自然な苦痛の如くに魂を傷ける。がセシルは魔法使だつた、彼女はあらゆる香膩、藥草、痛みを和らげ癒すすべての藥を知つてゐた。彼女は心をなだめる不思議な言葉、命を甦らせる斷乎とした眼^{まなこ}眸^{まなこ}を心得てゐた。そして細やかで企まないその愛情は運命のあらゆる兇暴に打ち克たずにはゐなかつた。それと又彼の力強い慰めだつたのは勉強、烈しい勉強だ。それは重く煩はしい甲冑ではあるが、よく苦痛に對して護るものだ。母親と一緒に居た間は、彼女は小鳥のやうなかるはずみとその上調子、それといきなり外出する支度をするかと思ふと又忽ち氣が變つて帽子と外套をかなぐ

ザリ捨てるといふヂクザクの氣持で知らず知らず彼の勉強の邪魔をしてゐたのだ。妨げまいとする下手な心盡し迄が本當の妨げにならずにはゐなかつたのだ。彼女が行つてしまつた今では彼はせつせと精を出しながら、失つた時間を取り返して行つた。日曜日毎に彼はエチオルへ行つた、その度毎に愛も學問もより少し深くなりながら。ドクトールは彼の教へ子の進歩に有頂天になつてゐた。此の勢で進んで行けば、一年もたゝないうちに大學の入學資格を得られるにちがひない。此の大學の入學資格といふ言葉はヂヤツクを喜びに微笑ませた。それでリパロの又してもものふしだらの後で、今では彼がカマレードとなつてゐるベリゼール夫婦の前で夫を言つた時、パノアイヨー通りの小さな屋根裏の室はそのためにすつかり大きさと輝きを増したやうに見えた。それで麵麩の配達女は感激のあまりにはかに學問がしたくなつたのだ。夜業の針仕事を終つてからベリゼールは彼女に讀方を教へさせられたので、差し示すのぢやなくて隠してしまふみたいな角ばつた大きな指で突き突き一字々々を辿らせるのだつた。しかしムツシウ・リヴァルがヂヤツクの進境を喜んでゐたとすれば、その健康についてはあべこべだつた。秋の始めから又出だした咳が頬を窪ませ、眼を焔のやうに輝かせ、手を握れば火のやうに熱かつた。

『俺はそれを好まない。』善良な人物は教へ子を心配さうに眺めながら言つた『お前は勉強しすぎる。お前の精神はあまりに向上し、あまりに熱中しすぎてゐる……少しゆつくり落付かなければいけない……まだゆつくり暇があるぢやないか！ セシルは何處へも行きはしない。』

確かに彼女は何處へも行きはしなかつた。今迄にもまして優しく注意深く、びつたり彼に寄り添つて

161
ゐた。まるで此のひとりぼつちが彼女の内に見出さなければならぬところの遅い幸福の分前、失はれた愛情のすべてを想像してゐたみたいだ。そして又我がヂヤツクを發奮させ、何物も抑へる事の出来なない勉強に對する熱を與へたのも夫だつたのだ。夜の休息の間を割いた上に晝間十七時間働いても彼は少しも疲れを感じなかつた。そして彼の力を百倍にもする昂奮に驅られて、エーサンデツク鐵工所のバランシエは彼の手でもはやペンほどにししか重くなかつたのだ。

人間の體力といふものは限りの無いものだ。ヂヤツクは自分の體をひつきりなしの夜更かしや、絶對の無關心で無理してゐる間に、印度の托鉢僧のやうに苦痛さへが一種の快樂となる烈しい狂熱状態を克得たのだつた。彼は明け方の五時その二十はたの深い眠りから醒ましてくれる屋根裏の寒さ、夜中過ぎまでもはつきり睡氣を拂つてゐてくれる小さな空咳をさへ祝福した。時々テーブルの前で彼は體全體が軽くなつた感じ、豫言者の洞察力、その智能の異常の感激を覺えるとともに體は絶えも入りさうになるのだつた。恰もより高い世界をさして魂の翔り去りでもするやうに。その時ペンは速かに走り、勉強のすべての困難は彼の前に姿をかくしてしまふ。かうしてたしかに彼はその苦しい道の終局に達する事が出来たにちがひない。が夫には彼が全速力で駆け出した道を遮る何物の邪魔も這入らなかつたならばだ。かうした場合には實際此の上も無く小さな打撃も危険なのだ。ところで怖しいそれが彼を待つてゐたのだ。

アスクルナ 一シウカンスニスル

リヴァアル

かうしたドクツールの電報をヂヤツクは土曜日の晩、マダム・ベリゼールが彼のため翌日の眞白な美しい肌着にアイロンをかけ、彼自身も此の土曜日の終りの時間に、日曜日の近づいて来るのを感じながら喜び勇んでゐる最中に受取つた。この思ひがけない出發、簡単な電文、見知つた親しいペンの跡ではなくて版で押した冷かな文字迄、すべてが彼のために異様な恐怖だつた。彼は此の不思議を説明するためのセシルかドクツールの手紙を待つてゐたが終に何も來なかつた。そして一週間といふもの、あらゆる恐怖に虐げられながら、一群の雲が太陽を隠しつ見せつするみたいに、ある時は胸を迫らせ、或る時は開きながら懊惱と希望の間をさまよつてゐたのだつた。實際はドクツールもセシルも旅行に出たのは無くて、ムツシウ・リヴァアルは戀人を大きな打撃から免れさせたため、思ひもよらぬ急な、そして彼としてはなほ孫娘が思ひ返すのをひたすら待つてゐたところの、セシルの決心を突然傳へともなくてわざと彼を來させなかつたのだ。それは全く不意だつた。或る夕方家に歸つたドクツールはセシルがすっかり變つた様子で、蒼ざめた唇に何か決心したらしい悲しみの色を泛べ、蒼色の美しい眉毛が嘗て無く曇つてゐるのを見た。彼は夕飯の時に精を出して微笑ませようとしたが無駄だつた。そして彼が「日曜日にヂヤツクが來たら……」と言ふより早く、

162

『私は來ないで欲しいと思ふのです……』
と答へるのだ。

彼は呆氣にとられて彼女を眺めた。彼女は死人のやうに青い顔をして繰返した。

『私は來ないで欲しいと思ふのです……もう來ないで欲しいのです。』

『一體どうしたと言ふのだ？』

『大切な事です、お祖父さん、ヂヤツクと私の結婚は出來ないのです。』

『出來ない？ 何で俺を嚇すのだ、一體何が起つたのだ？』

『何も起りはしないのですが、たゞ私自身の中に光明が生れたのです。私は彼を愛してゐません、私は間違つてゐたのです。』

『何といふいたましい事だ！ 一體何事が起つたのだ？ セシル、娘、思ひ返してくれ。きつと何か仲が善過ぎて喧嘩でもしたのでは無いか、子供じみたいさかひを……』

『いゝえ、お祖父さん、之には何も子供じみた事なんか無いのです、私はヂヤツクに姉妹としての愛情しか持つてゐないのです。それだけなのです。私は無理に彼を愛しようとしてゐたのです。が今ではそれが不可能だといふ事が解つたのです。』

ドクツールははつと胸を打たれた、娘の事がふと胸をかすめたのだ。

！たつ變が心の娘

『お前は誰か他の者を愛してゐるのぢやないか？』

彼女は赤くなつた。

『いゝえ、いゝえ、私は誰も愛してはゐません、私は結婚したくないのです。』

ムツシウ・リヴァルが何を言つても、何と促しても、セシルの答へはたゞ、

『私は結婚したくないのです。』

と言ふだけだつた。

彼は彼女の誇りに訴へようとした。村の者が何と言ふだらう？ 幾月も前からこの家に往來してゐたあの青年、誰もが彼女の許婚だといふ事を知つてゐた……彼は憐憫の情に耐へないで、同じやうにセシルを動かさうとした。

『彼にとつて怖い打撃だといふ事を考へてごらん……彼の生涯は滅茶々となり、未來は失はれるのだ。』

セシルは顔中を曇らせ、その様子でどれだけ心を動かされたかを證據立てた。ムツシウ・リヴァルは彼女の手を執つた。

『娘や、願ひだ……こんなにもさしせまつてさうした決心をしないでおくれ……もう少し待たう……そしてもつとよく考へるのだ。』

が彼女はきつぱりと落付いて、

『いゝえ、お祖父さん、駄目です。私は彼が少しも早く私の考へを知つて欲しいと思ひます……私は彼

に大きな心配をかけるのだといふ事は解つてゐますけれど、待てば待つだけその心配は大きくなるのです。一日たてばたつほど大きくなるばかりです。それに私は此の儘で彼と逢つてゐるなどはとても出来ません。私はかうした偽り、かうした裏切りを平氣でする事は出来ません。』

『それではもう來てはいけないと言つてやらなければならぬのか？』ドクツールは憤然と立ち上りながら言つた『よし、其の通りする……がほんとに！ 女といふものは……』

が彼女が眞蒼な顔で震へながら、とても落膽した様子で、彼を眺めたので彼は立腹の最中にきつぱり押し黙つてしまつた。

『さうぢやない、さうぢやない、娘、私は怒りやしない……たゞ一寸の間だけの事だ……考へて見ればこの事はお前よりも俺の過ちだ……俺がこんなに……あゝ！ 馬鹿親爺！ 馬鹿親爺！ 俺のする事はどこまで馬鹿だらう！』

辛いのはチャツクに手紙を書く事だつた。彼は二つも三つも手紙の下書きを拵へて『チャツクよ、我が子よ、娘の心が變つた。』とれもかう書き出した、がその後が出ない。たうとう彼は獨語した。『話す方がいゝ！』そして暇を置くためこの苦しい會見の覺悟をきめるためチャツクの訪問を一週間のばさせたので、その間に多分セシルが思ひ直しはしないかといふはかない望みを繋いでゐたのだ。

此の一週間、彼等の間にはその話が少しも出なかつた。が次ぎの土曜日ムツシウ・リヴァルが孫娘に向つて、

『彼が明日来る。お前はやつぱり同じ考へかい？　お前の決心は變らないのかい？』

と尋ねた時、

『變りません！』と只一言彼女ははつきりと重々しく、この慘酷な言葉を嚙んで吐き出すやうに言ふのだつた。

ヂヤツクは日曜日何時ものやうに朝早く着くと、エヴリーの停車場からエチオル迄一飛びに飛んで行った。入口、兎に角に親しい、そして嘗てのあらゆるよきもてなしをして彼の心をやすめなければならなかつたはずの入口を跨ぎながら、いたく心を動かされてゐた。

『旦那様がお庭で待つてお居ですよ。』と戸を開けに來た下女が言つた。

と直ちに彼は冷水を浴せられたやうな氣がして、何かの不幸を直觀した。善良なドクツールの途方にくれた顔が彼の恐怖を全いものにした。四十年の間、病人の枕許の憂ひの場に慣れて人間の悲劇に鍛へられてゐた筈の彼迄がヂヤツクと同じやうに打ち震へ、打ちひしがれてゐたのだ。

『セシルは居ないのでですか……』

之が氣の毒な青年の最初の言葉だつた。

『さう、置いて來た……彼方に……俺達が居たところに。暫く其處に残つてゐる筈だ。』

『永い間ですか？』

『さう、永い間だ。』

『それでは……それでは彼女はもう私が厭なのですね、ムツシウ・リヴァル？』

ドクツールは答へなかつた。ヂヤツクは轉ぶまいとして、其處の腰掛に腰を下した。庭の奥だつた。彼のまはりでは十一月の澄みわたつた和んだ空氣と、地上に降りた白い露、サン・マルタンの祝日の太陽をかげらせてゐる薄い霞が、クードレの一日、葡萄摘み、セーヌに臨んだ丘、それとはじめて巢立つた鳥の臆した叫びのやうにその日はじめてかはされた最初の愛の囁きを彼に思ひ出させてゐた。その思ひ出の日に何といふ事だらう……暫く沈黒が續いた後ドクツールは彼の肩にやさしく手を置いた。

『ヂヤツク、あんまり悲しむのぢや無い……彼女は又思ひ直すかも知れない……まだあんなに若い！　氣まぐれにちがひない。』

『いゝえ、ムツシウ・リヴァル、貴方が知つておいでよ。セシルには氣まぎれなどといふ事はありません……氣まぐれのために心臓の眞中を只一突にするとあまりに酷すぎます……そんな事は決してありません。たしかに彼女はこの決心をするために永い事考へたので、彼女もひどく苦しんだにちがひありません。彼女は彼女の愛が私の生命の何であるか、若しも夫を奪へば、私の生命迄も夫と一緒になくなつてしまふ事を知つてゐたのです。彼女がそれをしたとすれば、それをするのが彼女の義務であると考えたからです。僕はそのつもりでゐなければならなかつたのです。僕にどうして此のやうな大きな幸福が得られるでせう！　僕は何度獨語を言つたか解りません。『あまりに幸福すぎる、きつと出來はしない……』そしてやつぱり出來はしなかつたのです。』

意志の力が込み上げて来る嗚咽を抑へさせた。彼は辛うじて立ち上つた。ムツシウ・リヴァルは彼の手を執つた。

『赦してくれ、可哀想に……之は俺一人の罪だ。が俺はかうして二人を幸福にする事が出来ると考へたのだ。』

『いゝえ、ムツシウ・リヴァル、貴方が悪いのではありません、なるやうにしかたらないのです。セシルは僕を愛するにはあまりに尊とすぎます。僕に對する憫みが一時彼女にイリウジョンを抱かせ、彼女の優しい心を迷はしたのです。今彼女の眼はよりあきらかになつて、二人を隔てゝある距離に恐れをなしたのです。がそんな事はどうでもよいのです！ どうぞ僕の今言ふ事をよく聞いて下さつて彼女にとづけて下さい。彼女から受けた此の痛みがたとひどのやうに烈しいものであつても、私が彼女を恨む事を何時迄も妨げるにちがひない何物かありません。』

彼は崇高な身振りもて野原と空、あたりのすべてを指さした。

『……昨年ちやうど今日のやうな日、僕は自分がセシルを愛してゐる事を感じ、そして彼女も僕を愛してくれるにちがひないと信じたのです。その時から僕の生涯の最も幸福、唯一の幸福な時代が始つたので、僕は今では夫を自分の全生涯と思ふのです。僕は其の日に生れて今日死ぬのです。が此の祝福された時代、僕の辛い運命の忘却の時はセシルと貴方のおかげだつたのです。僕は決して忘れないでせう。』

彼は震へながら握りしめてゐるドクツールの手から、靜かに自分のを抜いた。

『もう行くのか、チャック？ 俺と一緒に食事をしないのか？……』

『いえ、有難う、ムツシウ・リヴァル……食卓に僕はあんまり陰氣過ぎるでせう。』

彼はしつかりとした足どりで庭を横切つて門を潜ると、後も振り向かずたく／＼と立去つた。若しも振り向いたら彼は上の二階の白いカーテンをかゝげた下に彼と同じやうに蒼ざめ、同じやうに震へてゐる最愛の女が彼に向つて兩腕を差し伸べながら、それでも呼び戻さうとは考へないで泣いてゐる姿を見付けたのだ。リヴァルの家のそれからの日は全く悲しいものだつた。幾月といふもの賑かに若返つてゐた小さな家は元の淋しい姿、あらゆる華かさを失つた後の、より一層淋しい姿に還つた、ドクツールは不安に耐へられないで、孫娘の様子を窺ひながら、小庭の中の一人ぼつちの散歩や、今は開かれてゐる、そして心配を持つてゐるといふ權利によつて自分の物にする事を望んでゐるらしい、母親の室に籠つてゐる彼女に氣を配つてゐた。嘗てマドレーヌが泣いた室で今セシルが泣いてゐるのだ。で氣の毒な祖父は無言の苦痛に虐げられながら其處の窓にうつむいてゐる彼女を娘と思ひ違へはしないかと思はれる位だつた……彼女も亦死ぬのではなからうか？……何故？……一體彼女は何としたのだ？ 若しも最早チャックを愛さないのだつたら、此の悲しみ、此の孤獨の願ひ、忙しい家事の務さへがまぎらす事の出来ない此の物思ひは何のためだらう？ では若しもまだ彼を愛してゐるのだとすれば、拒絶は何のためか？ 好人物のドクツールはそこに何かの祕密、何事か内心の闘ひが秘んでゐるのを感じてゐる。

た。が何と言つても、何を聞いても彼女は彼をはぐらかすばかりで、只その本心の絶対の決断に就いて自分が自分に對する責任を持つてゝもゐるやうに、彼から逃れようとするばかりだつた。孫娘のこの氣懸りな態度を前にして、好人物はたうとうチャツクの苦痛を忘れてしまふ迄になつた。彼にも思ひ詰めないではゐられない大きな悩みとなつたので、始終往來で彼を載せてゐる馬車と、だん／＼強情になるばかりの彼の年取つた馬は妙なその馭し方だけでもつて彼の心の動揺を知る事が出来た位だ。

或る晩病家の迎ひが家のベルを鳴らした。サレ婆が、道端で愚痴を言ひながら待つてゐた。今度こそ『彼女の野郎、可哀想な野郎はくたばる算段をした』といふのだ。苦勞と老年のために、いつもはなかなかおいそれと立上る事の出来ないムツシウ・リヴァルは大急ぎでエチオルからオーネット迄駆けつけた。サレはバルヴァ・ド・ミユスに近い道から一段低い處に掘つた正真正銘の穴の中に住んでゐるので、穴倉へでも降りて行つたみたいで汚い暗い吹きさらしの室で、あたりのすべての居城おしろよりもよく保つてゐるラ・ブリユイエル時代の眞の百姓の棲家だつた。床は土間で、道具はこはれた箱が一つと幾つかのぐらぐら丸い腰掛だけで、すべては、森から盗んで来たばかり／＼はねる生木の火で照らされてゐた。さもなくても此處にあるすべての物は、奪略といふ事を語つてゐた。壁に積み重ねた木切にしろ、爐の片隅に立てかけた鐵砲、いろ／＼の鼠、それから麥を刈つた畑の上にもるで漁夫の投網のやうに投げかけるあの廣い網、くらがりの隅の粗末な寢臺の上、かうした後めたい赤貧の眞中で老人はくたばりかけてゐた。密獵と、溝や、沼地や、雪の中の夜の待伏せ、憲兵の馬の前での圍獸天走りの六十年、かうし

て今彼は『くたばるのだ。』年取つた悪鬼の一生だ。まだしも穴の中で死なれるのが仕合せといふものだつた。這入つて行くなりムツシウ・リヴァルは、陋屋のあらゆる不潔の臭にまじつてより高く香つてゐた、香料をくべた臭ひに咽びかけた。

『一體何を此處で燃やしたのだ。メール・サレ？』

老婆は狼狽して嘘を言はうとしたが、彼は疊みかけて言つた。

『隣の毒殺者が来たのだな。』

ムツシウ・リヴァルの思つた通りだつた。最近ヒルスが彼の忌はしい香料療法を此の哀れな人間に試みに来たのだ。彼は實驗の機會をすつかり乏しくされてしまつたのだ。百姓達は警戒を始めた。その上無免許の彼の醫術に對して猛烈な戦を挑んでゐるエチオルの醫師のおかげで、彼はよく／＼注意を怠る事が出来なかつた。二度も彼はコルベアの検事局に喚ばれて、若し此の後も續けるならば重く處罰すると言つて嚇かされた。がサレの家とは眼と鼻の間だし、身分が身分だ……それで憲兵は怖くはあつたが又してもやらかしたのだつた。

『早く！ 早く！ 戸をあけて、窓も……可哀想に息がつまるぢやないか！』

老婆はぶつ／＼咳きながらドクツールの命令にしたがつた。

『あゝ！ 可哀想な野郎、可哀想な野郎、彼奴がきつとよくしてやると言つたよに……何だつて人をこんな欺さうてんだ……俺等百姓は、ふん／＼に可哀想な獸だ。』

ムツシウ・リヴァルが瀕死者の上にうつむいて覺束ない脈を探つてゐる時、太いかすれ聲が寢臺の襦袢の下で聞えた。

『言へ、女房、お前言ふと言つたぢやないか？』

老婆はなほもくどく喋りながら爐の中の束を動かしてゐた。

『言へ女房！ 言へ女房！』

ムツシウ・リヴァルはサレ婆を見た。年取つた蠻女の日にやけた顔は煉瓦のやうに眞赤だつた。彼女は吃り吃り、傍に寄つて來た。

『さうなんだよ、ふんとに俺がああ情深い可哀想な嬢さんに心配させたのも、やつぱりあの隣のお醫者が悪いだよ。』

『何處の嬢さん？ 誰の事を言つてゐるのだ？』

ドクツールは病人の腕を放しながら語氣荒く尋ねた。

彼女は躊躇したが、益々弱くなつた、そして酷く遠くの方から來るみたいな密獵者の聲がもう一度咳いた。

『言へ……言つてくれ。』

172 『では言ふだに。』老婆は思ひ切つたやうに言ひ出した。『かういふ譯だよ、親切なリヴァル旦那、あの惡者が俺に二十法呉れたよ——何てまあ惡者だ、キリスト様！ セシル嬢さんにお父さんとお母さんの

話しろ言うて二十法呉れたよ……』

『この惡婆！』

リヴァル老人は怒のあまりに其の若い時の力と勢を取り返して叫んだ。

彼は怖しい百姓女を捕へるとはげしく小突き廻はした。

『貴様はそれをしたのだな！』

『二十法のためだよ、よい旦那様……若しあの惡者が二十法呉れるでなかつたら、俺死んでも言やしねえだに……第一俺等眞實その事たら、何も知らなかつたよに！ 俺に喋らすために彼奴がすっかり話してくれたよ。』

『あゝ！ 惡者！ 仇を取ると言ひ居つたが……が一體誰の口から解つて、こんなにも酷い復讐を遂げさせたのだ？』

深い歎息、人間が此の世に生れて來る時でなければ此の世を去つて行く時に發するみたいな微かな歎息に、再び醫師は老人の寢床の傍に立歸つた。今は彼女が夫を言つたので、老人は安んじて逝く事が出来るのだつた。そして此の老浮浪者のすべての罪にまじる此の些かな良心の苛責が彼のために怖しの時をより心安くしたのに違ひなかつた。朝になる迄ドクツールはこの臨終の床の上、窓硝子を訪れる曉の白光がその最初の息吹と俱に運び去つたこの生命の分子の上に屈んでゐた。彼が此の、瀕死者に話しかける事も見る事もしないで爐の前に躊躇つてゐる此の老婆と向ひ合つてゐるには大層な努力がいつ

ヤ た。責任を感じたのと、まだ彼にはよく腑に落ちない此の憎むべき奸計に就いて、あれかこれかと思ひ
めぐらしながら考へをまとめようとしてみたのだ。そして萬事が終つた時、彼は憎むべきヒルスがもは
ク ツ ヤ やバルヴァ・ドミユスには居ないといふ事を突き止めてから、急いでエチオルへ取つて返した。あゝ！
若し今彼を取つて押へたら、彼に復讐するために孫娘にかゝつて行つた此の卑怯な敵に對して、軍艦時
代の腕力をふるつたにちがひなかつた。歸るなり、彼はすぐセシルの室に上つた。誰も居ない、寢臺に
も寢た様子が無い。彼は震へ上つた。薬部屋へ駆けつけた。やはり居ない、只元のマドレヌの室があい
て居て、いとしい死者の記念物の眞中、彼女があらゆる歎きを抱いて跪き跪きしてゐた祈禱臺の上に、
ぐつたり眠つてゐるセシルの姿を見出した。

ドクツールの足音を聞いて彼女は眼を開いた。

『お祖父さん！』

『あの悪者達が言つたさうだな。此の祕密をお前に隠して置く爲に、俺達はどれほど苦心したか知らな
いのだよ。おゝ、ほんとだ！ お前にかうした悲しみをさせないために、どれだけ骨を折つたか、どれ
だけ氣を付けたか！ それが他所者の口、敵の口からお前に来ようとは！ 可哀想に！』

彼女は彼の肩に頭を隠した。

『仰有つてはいけません、何も仰有つてはいやです、私は恥しいのです……』

174 『あべこべにどうあつても話さなければならぬ。あゝ！ 若しも俺にお前が厭だと言ひ出した事の

175 原因に心當りがついてゐたら！ お前が結婚するのが厭になつたのは此の事の爲だらうな？』

『はい。』

『それは又何故だ？ お前の考へをこの俺に話してくれ。』

『私はお母さんの恥を打明けするのが厭でした。そして又私は良人となる人にすべてを打明けなければ、
自分の良心に濟まなかつたのです……で爲すべき道は一つでした、そして私は夫をしたのです。』

『それでお前は彼を愛してゐるのだね、まだ愛してゐるのだね！』

『魂の底から愛して居ります。そして私は彼も亦私達の結婚を罷めようと考へはしないほど私を愛して
くれてゐたと思ひます。が彼を此の大きな犠牲から免れさせるのは私の務だつたのです。誰にしる苗字の
無い、若し有るとすれば泥棒で手形偽造人のそれを名乗らなければならぬやうな娘と結婚する事は出
来ません。』

『お前は思ひ違ひをしてゐるのだ。チャックはお前と結婚する事をどんなに誇りに、どんなに幸福に思
つてゐたか解らない、しかも彼はお前の事を知つてゐるのだ、俺自身が話して聞かせたのだ。』

『そんな事が有り得るでせうか？』

『あゝ！ 仕方の無い娘だ。若しもお前がもう少し俺を信じてゐれば、お前が俺達三人の幸福を臺無し
にしてしまつたこの三重の不幸を防ぐ事が出来たのだ。』

『それではチャックは、私が何者であるかを知つてゐたのですか？』

『俺は一年前、彼がその戀に就いて話した時に、言つて聞かせて置かなければならないと考へたのだ。』
 『そして夫でもまだ私を思つてゐてくれたのですか？』
 『さうだとも！ 子供じみた……彼はお前を愛してゐる……その上お前達の運命は全く同じやうなものだ……彼も亦父親を持つてゐない、それで母親は結婚した婦人では無いのだ。只一つ違つてゐるのは、お前の母親は聖女だつた、が彼のは……』

それからヂヤツクにセシルの物語を話して聞かしたと同じやうに、ムツシウ・リヴァルはセシルにヂヤツクの物語、此の如何にも温情家で善良な薄倅兒の久しい艱難、顧みられなかつた幼年時代、遠流の少年時代に就いて語り出した。と突然このすべての過去を彼がもう一度思ひ出して行くうちに、彼はよりはつきり現在を了解する事が出来たかのやうに、

『あゝ、さうに違ひない、彼女だ……彼女から出たのだ……』ドクターは叫んだ。彼女はきつとヒルスの前でお前達の婚約の事を話したにちがひない……さうだ、確かにさうだ……俺があんなにも骨を折つて禦かうとしてゐた此の悲劇の元はあの母親だ……何といふ悲しい運命だ……あの可哀想な青年に到されたこのいたましい痛手は、たしかにあの母親のおかげにちがひない。』

かうした説明を聞きながら、セシルはそれほど迄にも不幸だつたヂヤツクに又しても彼女が酷い、おまけに無益な心配をさせた事を考へて、はげしい絶望に囚はれた彼女は彼に赦を願ひ、彼の前にひれふしたかつた。

『ヂヤツク！ ほんとに氣の毒！』

涙と一緒に彼女は繰り返した。

そして自分自身の惱みから、彼女が彼に與へた痛手の深さを押し測りながら言ふのだつた。

『おゝ！ どんなに彼は苦しんだでせう！』

『今でもまだ苦しんでゐるのだ……』

『お祖父さん、どうして居るか御存じですか？』

『否、だが自分でお前に夫を言ひに来たらいいだらう？』

微笑みながら、祖父は言つた。

『が今となつてはもう来てくれないでせう。』

『では逢ひに行かう……今日は日曜だから工場に行つてゐない。迎へに行つて、此處へ連れて来よう……』

どうだね？……』

『どうか、さうして……』

數時間後、ムツシウ・リヴァルと孫娘は巴里をさして出かけた。

彼等が出て行くの間も無く、汗ぐつしよりになつた一人の男が、大きな籠の重荷に背を屈めながら家の前に立留つた。彼は緑色の入口と、その上に辛うじて讀める『醫者の呼鈴』と記した銅板を眺めてゐたが、

「此處だ！」やがてかう言ふと額を拭ひながら夫を押しした。小娘の女中が現はれた。が相手が田舎を廻つて歩く危険な行商人だと見て取つて、戸を半分しか開けなかつた。

「誰に御用です？」

「此處の旦那……」

「お留守です」

「ではお嬢さんは？」

「やつぱりお留守です。」

「何時歸りますか？」

「知りません。」

戸は荒々しく閉まつた。

『やれ／＼……』行商人はしやがれ聲で言つた『あの儘で死なせなけりやならないのか？』

そして彼は茫然と其處の道の真中に立つた儘だつた。

十 ノートル・ダム聖道區

その晩、學士院に近いオギユスタン河岸の『未來人』主筆の家で大文藝會があつた。ラテ達の有象無象は、シヤロットの歸還を祝する爲の、そして相變らずダルヂヤントンが、やつと出來上つた長詩の『不和』の朗讀で勿體を付ける筈になつてゐたこの盛典に召集されてゐた。此の御大層な詩が出來上るに就いてはとても妙な行懸りがあつた。シヤロットが歸つて來たのであつてみれば、何の爲に薄情女の家出をかこつたり、捨てられた情人の苦痛を描寫する事があらう？滑稽にちがひない。ところで實際残念な事には詩人の詩想がこんなにも豊かに、こんなにも涸渇しないといふ事は嘗て無かつた事だ。で何日か躊躇した後、彼は勇敢に決心の躰を決めた。

『さうだ、仕方が無い……續けよう……藝術の作品ともあるものが偶然の機會に左右される事は無い。』それで此の詩人が其の情人自身の面前でその家出を歎き、彼女は自分が『悪い女』になつたり『不忠實』と言はれたり、『今は在らぬ愛する女』になつたりするのを聞かされながら、薔薇色の細リボンでとちた帳面にとつても結構なかうしたすべての形容詞を自分の手で書いてゐる。之にもまして滑稽な圖は無かつたらう。詩が出來上つたところでダルヂヤントンは、仲間を讀んで聞かせようと考へた。文學者の虚榮からといふよりも、情夫の自負心からで、ラテのすべてに向つて彼の奴隷が再び歸つて來た事、今度こそは確かに捕へてゐるといふ事を見せびらかしたい爲だつた。五階の其の室々は嘗て之ほど盛大な夜、

チ花や、飾りや、飲料のかうした豪奢を見た事は無かつた。「今は在らぬ愛する女」の蒼味がかつた董の花をあしらつた眞白な衣裳迄が、彼女が朗讀の間に演ずべき無言の役割に相應はしく見えた。茲に這入つて來ながら誰でもは、この華かなすべての上に、ちやうど胡蝶の美しい翅の上に張られた見えない蜘蛛の絲のやうな財政難が漂つてゐるなどとは思ひもよらなかつたにちがひない。ところが之程確かな事は無かつた。雑誌は危期に瀕してゐたので毎號形は小さくなる。おまけに發行はたまさかでだん／＼に間が遠くなるばかりだつた。ダルヂヤントンは遺産の半分を注ぎ込んだ末一層手離したらと考へてゐたところだつた。かうした情無い状態に立到つたのが、旨く事を運んだばかりに、シャロットの氣狂ひを永久に彼の『藝術家』の許に歸らせる原因となつた何度かの發作と同時の事だつた。で彼女に「今はもう私、貴郎のものです……永久に貴郎のものです」といふ御大層な誓言をさせるためには、彼は、嘗てほのかに仰いだ望みの星も見失ひ、打ち拉がれ、衰へ果て、すべての人々から捨てられた大人物といつた風な様子で彼女の前に立ちさへすればよかつたのだ。要するに此のダルヂヤントンといふ男は、たゞ馬鹿で、見えつばりに過ぎないが、この婦人をとでも上手に操縦したもので、その上平凡な道具を以て素晴らしい結果を生み出させる方法を知つてゐた。だから此の夜彼女がどのやうな眼で彼を見まもつてゐたか、どんなに彼が魅惑的で、病人らしくて天才的で、十二年前モロンヴァルの客間のオパール色のランプの下で、はじめて彼女の眼に映つた時と同じほど美しいと考へてゐたか、貴方々にお解りだつたら……いや、多分もつと美しく見えたにちがひない、何故なら場所が違ふ、より心持よく、より華か

だ。そして彼女の詩人の圓光はより光の條を増してゐたのだ！

しかし相變らずの取巻、相變らずの顔觸だ。天鵞絨の服にファウスト張りの深い長靴を履いたラバサンドルに、化學の實驗の汚點だらけのドクトール・ヒルス、縫目のあたりが白くなつた禮服用で、結び目が眞黒になつてゐる白ネクタイをつけたモロンヴァル、夫から少熱帶國、はちきれさうな顔をした例の埃及人、サフラン色の日本人、それとペリゼリユスの甥にブルドンを讀んだ男。揃ひも揃つた妙な、蒼白い、瘦せた、食ふや食はずの、それでゐて熱病やみのやうな手をして、星ばかり眺めてゐるために睫毛を焼いてしまつた哀れな眼をした幻想家達の寄集りだ。まるでその金のランプが絶えず地平線の後へ後へと姿を隠す、知られざるメツカでも指して進んで行く東方の巡禮者の群と云つたみたいだ。我が此の氣の毒なラテ達とちがづきになつた十二年このかた、或る人々は途中で仆れてしまつたが、巴里の鋪石から又別の盲目的信仰者達が立上つて、死人に代つて列を満たすのだ。期待の相違も、病氣も、寒さも、暑さも、饑饉も、何物も彼等を失望させない。彼等は進む、一筋に道を急ぐ。が決して到着する事は無いだらう。彼等の中で、より良い食事をし、より良い着物を着てゐるダルヂヤントンは、其の後宮と煙管と富を携へて貧乏人の道連れとなつて行く金持の巡禮者といふ俤があつた。そして此の夜一層彼の得意の色を増さしたものは、充たされたその虛榮心と勝利の快さだつた。

詩の朗讀の間何氣ない態を装つて長椅子に腰をかけてゐたシャロットは、見知られるのが嬉しくて仕方がない覆面のあだ者と云つた風に、透けて見えるヴェールにくるまれて詩の中に出て來るほめかし

ナに顔を染めてゐた。その周囲にはラテの妻君達が諷ひ顔に小さくなつて坐つてゐた。その中に、腰を掛けてゐながら、顔と顎の測り知られぬ長さのためにとても背が高く見えてゐたモロンヴァルのちび夫人はその感動を見せるために絶えず眼を拭つてゐた。元ドコストル嬢のモロンヴァル夫人に少々似合はない偽善の沙汰だ。が貧苦はこの上もない誇りを覆す事がある。それに妻君の前に陣取つたモロンヴァルは彼女を見張つて居り、喝采の音頭取りをつとめてゐたので、いつもきまつて借金申込の前兆である爪を噛み噛み、その猿面に異常な讚歎の種々な表情を現はさしてゐた。かうした魂膽を持つた聴衆の前で、詩はとても遣切れない鈍さと單調さで、何時迄たつてもきりのない絲卷の絲を取つてゐる絲挽車といつた調子で繰出されて行く。長い長くないのつて！ 夫はストーブの火の燃える音、ランプの油の鳴る音、それからバルコンの上にたゆたひながら、いつぞやの晩のやうにいきなり烈しく窓の硝子にぶつかつて行く嵐の風にまじつてゐた。が此の夜シャロットは、精神が前兆だの豫感だのといふものを受け入れるところの懸念といふものを少しも持つてゐなかつた。

彼女は彼女の詩人と、今彼が調子強く吟じつゝあるドラマにすつかり夢中になつてゐた。實際この詩には、或る一部分それは戯曲的などころがあつた。最後の章でダルヂヤントンは、戀人の許に歸つて來た『今は在らぬ愛する女』が、彼から離れて去つた苦しみ故に得た病氣のために死ぬ事にしたのだ。そして詩人は彼女に永遠の愛を約しながらその眼を閉ぢてやる。

奥津城に我は汝と俱に

汝を泣き汝を愛する

わがよき半身を入れぬ

かう云ふのだ。ですべてを忘れようとするこの男性の寛大な精神、それから聞きながら皆して泣かずにゐられなかつたこの不幸な女の哀れな運命はほんとにいたましかつた。シャロットは誰よりも烈しく泣いた。何故なら死ぬのは彼女で、おまけにかうした事は他人より當人にとつて一層悲しい筈だ。

突然、その感傷的なくだりのちやうどダルヂヤントンが満足視線を一座の上にくれてゐた最中、お約束の前掛の紐を大きく蝶々結びにした誰でもがよく知つてゐる女中姿の下女が、女主人を呼びにあわてた様子で客間に這入つて來た。

「夫人！ 夫人！」

彼女は立上つた。

「何？ どうしたの？」

「男の人が……」

「男の人？」

「はい、怖しい顔をした厭な男が夫人に用があると云つてゐるのです。私夫人はお留守でお目にかゝれ

「ザ
ないと言つてやりましたら、入口に腰かけて待つてみると申しますのですよ。」
『私行くわ……』

ク ツ ヤ
シャロットは此の使者が誰から来たかを察したかのやうに、大層緊張して言つた。
『可けない！ 可けない！』

ダルヂヤントンが烈しく遮つた。そして一座の中で一番強いラバサンドルの方を振向きながら、
『その闖入者は一體何者か一寸見て来てくれ。』

『よし！ よし！ ブウ！』

聲樂家は答へると肩を聳しながら出て行つた。

半分に切られた詩の文句がまだ唇でむづ／＼してゐたダルヂヤントンは急いでストーブの前に引返して次ぎを読み出さうとした。が又戸が開いて、ラバサンドルが頭と腕を一本出したまゝ彼を手眞似で呼んだ。

ダルヂヤントンはぶり／＼しながら出て行つた。

『何だい？ どうしたのだ？』

『チャツクがひどく悪いさうだ。』聲樂家が小聲で言つた。

『ふん！』

『此奴がさう言ふのだ。』

ダルヂヤントンは醜くおど／＼したその男を見た。戸の下に屈んでゐる背の高いその姿を見た事があ
るやうに思はれた。

『君があつた男に頼まれて来たのか？』

『いゝえ、頼まれて来たものではありません。』

片方は答へた『頼まれて来るには、あつた人はあんまり酷い病氣です。もう三週間も前からひどく病
氣で寝てゐるのです。』

『何處が悪いのだ？』

『肺の中がどうかしたので、お醫者さんは一週間も保たないと言ふのです。それで私の女房も私も、あ
の人のお母さんに知らせなければいけないと考へたので、それで私が来たのです。』

『君は誰なのだ？』

『ベリゼールです。夫人はベルと言つてゐました……おゝ、あの方は私をよく御存じです、私の女房も
です。』

『そこで！ ムツシウ、ベリゼール。』詩人は嘲弄するやうに言つた。『君を此處によこした人間に言ふが
いゝ。計畫は上等だ、がそれはもう用ひられた、他のを考へなければ可けないとな。』

『お待ち下さい！』烈しい言葉を解さない行商人が言つた。

がダルヂヤントンが戸をしめてしまつたので、ベリゼールは室の奥の方に大勢の人で満たされたあか

ザ
るいサロンが一目眼に残つた儘階段の上に茫然と取残されてしまつた。

クツ
『何でもない……誰かゞ間違つて来たのだ。』

詩人は歸つて行くなりかう言つた。そして彼が意氣揚々と朗讀を續けてゐた間、行商人は眞暗な往來を刺すやうな北風と霰に打たれながらヂヤツクの許へ、屋根裏の粗末な寢臺の上に横はつてゐる哀れなカマラードの許へ急ぎ大股に歩いてゐた……

それは彼がエチオルから歸つて来たあの日の事だつた。何も言はずに寢臺に這入つたのだが、その時から熱に苦しめられ出した。熱とおまけにひどい風邪、工場の醫者が仲間達に危険だと言つて聞かせた程のひどい風邪だ。ペリゼールはムツシウ・リヴァルに知らせたかつたのだが、ヂヤツクはきつぱりとそれを斷つた。彼はこの時始めて昏睡から醒めたみたいに口を利いたので、それともう一度母親から譲られた時計と指環を賣りに行つて貰ふ事を麵麩配りの女に頼んだ時だけだ。何しろパノアイヨー通りにはお金が缺乏してゐた。ヂヤツクの貯への總べてはシャロンヌのさゝやかな家財を買ふためになくなつて、抽斗はからつぽだつた。それにペリゼール夫婦も婚禮の費用と新世帯の準備ですつかりからつぽになつてしまつたところだ。がそんな事はかまはない！ 此の誰も彼もに捨てられた不幸な若者を世話するため、行商人とその女房はどのやうな犠牲を拂ふ事も辭さなかつた。布圍や道具を質屋へ持つて行つてからは、彼等はどんな事があつても春には受け出さなければならぬ麥藁帽子の一山をさへ持つて行かなければならなかつた。ところがそれほどの犠牲もまだ十分では無かつた。薪も藥も何もかもが高い

……實際彼等はカマラード運が悪かつた。はじめのは怠け者で食ひしん棒の酔つぱらひで、二番目のは完全そのものでありながら、病氣のおかげで彼等の重荷となつたのだ。近所の人達はヂヤツクを病院に入れてと言つて忠告した。『あの人もお前さん達の家に居るよりもいゝだらうし、お前さんの方も厄介拂ひが出来るのだから。』しかし彼等は彼を、他人の手で世話して貰ふのは、相互扶助の義務を缺くのだとでもいふみたいに、何處迄もそのカマラードを自分達の傍に置いておかうと頑張つたのだ。がたうとう萬策盡きてしまつた。それで此の切迫した窮乏に加ふるに病人の危急もあるので、彼等はシャロット、麵麩配りの女が憤慨した調子で言ふ『別嬪の奥さん』に知らせる事に決心したのだ。彼女が良人を出してやつたのだ。

『よござんすか、たしかに来るやうに一緒に連れて来るのですよ……お母さんに逢つたらきつと元氣が出ますよ。ちつとも口に出しては言はない、ほんとに誇りが高い……でも確かに思つてゐるのですよ。』ペリゼールは彼女を連れて來なかつた。で道々彼はがっかりしながら、どんなに言はれるかとそれが心配だつた。マダム・ペリゼールは眠つてゐる子供を膝の上に載せて、情無い僅かな火、貧乏人達の言葉で言へば『寡婦の火』の前で聞かされて來る苦しうなヂヤツクの呼吸と、息をつまらせるやうな恐しい咳を氣にしながら、マダム・ルヴァンドレと小聲で語り合つてゐた。人々は此の道具のなくなつたみじめな室が、まるで巴里の雲雀のやうに朝からいとなみの歌を響かせてゐた苑の上に開いた明るい尾根裏だとはとても思ひもよらなかつたらう。本も無ければ勉強の痕跡も無い。たゞストーブの上に湯氣の

出てゐる煎薬の壺が、病人に附物の取留めのない重苦しい空気を室中に充たしてゐた。

『お前さん一人きり?……』

麵麩配り女が尋ねた。彼は小聲でチャツクの母親に逢はされなかつた事、大きな口髭の男が中に這入らせなかつた事を語つた。

『ならず者……がお前さんもお前さんで血が通つてゐないのですかよ……ほんとに弱蟲な……其奴を押しつけて無理に中へ這入つて、何故あの女に怒鳴つてやらないのです? 奥さん、貴女の子供が病氣ですつて。』

彼女は其處で、膝の上に眠つてゐた子供に何といふ母親らしい瞳を投げたやう!

『あゝ! 何だつてお前さんは何時迄たつても濡れしよぼたれの可哀想な牝雞なのだらうね。』

行商人は頭を垂れた。彼は歸れば遣込められる覺悟はしてゐたが、行商人として巡査や憲兵に氣兼ねしいく大道を渡り歩いてゐるのが習慣となつて、豪氣な女房でさへもがどうする事も出来なかつた腰の弱い意氣地無しになつてしまつたのだ。

『若しも私が行つたのなら、確かに連れて來られたのに……』勇敢な女は拳骨を握りしめながら言つた。

「放つてお置きよ、お前さん。』マダム・ルヴァンドレは荒々しく留めた。『お前さん、あの女達がどんなものか知らないのかわ。』

彼女はイダ・ド・バランシーが居なくなつて、彼女のミシンと亭主の資本とどつちもふいになつてからといふもの、あの女達といふ事を言出したのだ。そこへ亭主も這入つて來た。貧しい人達の中のものに鍵もかけない心易さから、毎晩彼等は見舞ひに來るのを口實に病人の處へ寄つて來るのだ。夫人が來ないと聞いてムツシウ・ルヴァンドレは吾人の社會の恥辱である現代のフリネ(有名なギリシヤの遊び女)に就いて長廣舌をふるひ、茲を先途と社會からかうした滓を掃蕩するための政策を論じるのだつた。そして他の者がぼんやり口をあけて、何時終るとも解らないこの睡たい議論をきいてゐた間、風はストーブの消えた火の上に吹きまくり、チャツクのひどい咳が布團の下から聞えてゐた。

『夫ばかりぢやないわ。』何時迄も餘計な事にかゝづらつてゐないマダム・ペリゼールが言ひ出した『どうしたものだらうね! 私達はあの氣の毒な青年を、手當が足りないで死なす事は出来ませんよ。』

ルヴァンドレ夫婦は主張した。

『お醫者さんが言ふ通りにすればいゝのさ! ノートル・ダム聖堂區の中央事務所に連れて行けばいゝのさ。さうすりや慈善病院に入れて呉れるわね。』

『静かに! 静かに! そんな大きな聲を出さないで!……』

ペリゼールは病人が熱に浮かされてもがいてゐる間の方を指差しながら言つた。一しきり静かになつて粗末な木綿のカバーがさがそ言つてゐるばかりだつた。

『きつと聞えたに違ひない。』行商人は腹立たしさうに言つた。

「とんだ災難だよ……お前さん達の兄弟でも、息子でも無いのだもの。病院へ連れて行けば、すっかり厄介拂ひが出来るのに。」

「カメラードだ！」ペリゼールはその無邪氣な殊勝な心のすべての誇と獻身の情を調子にこめて言った。どれだけ夫が感動的だつたかと言ふと、麴麵配りの女はすっかり眞赤になつて、涙で輝く眼で良人を見た。ルヴァンドレ夫婦は肩を聳かし聳かし出て行き、彼等が行つてしまつた後、室は直ちによりからつぽでなく、より寒くなつたやうに見えた。

ヂヤツクは聞いてゐた、彼は何も彼も聞いてゐたのだ。彼の愛を悲しくも裏切られたのに加へて胸の病氣がぶりかへしてからといふものおほかた彼は寢臺に寝たきりだつたが、眠つてゐるのではなかつた。がわざと彼を繞つてゐる生命の世界から身を背けながら、熱さへ幻覺さへが妨げる事の出来なかつた沈黙の中に浸つてゐたのだ。眼は閨の奥に向けられて一日中大きく開かれてゐた。それで若しも壁、老婆の顔のやうに皺だらけ、皺だらけの暗い壁に物が言へたら、この夢遊病者の一處を凝視めてゐる眼の中に焰の文字でかう記されてゐる事を物語つたらう。『完全な不幸……限りない失望！』壁だけが夫を知つてゐた。何故なら不幸な男は少しも愚痴をこぼさなかつたからだ。そればかりか彼は逞しい看護婦が熱い煎薬と優しい勵ましの言葉を浴せに来る時、微笑んで見せようとさへするのだつた。かうして彼は一人ぼつちの永い日を過してゐたので、その時、働く人々の聲は屋根裏彼を探しに来て、餘儀なく何もしないでゐる事を彼にかこたせるのだつた。人生の不幸に耐へるべく、何故彼は他の多くの人々の

やうに強く勇しくは無いのだらう？……それにしても之からは一體誰のために勉強するのだ？ 母親は行つてしまひ、セシルはもはや彼を相手にしなくなつたのだ。此の二人の女の顔が彼の眼前に現はれて少しも離れない。シャロットの平凡で冷淡な笑顔が消えると、不可解な拒絶でもつてヴェールのやうに包まれてゐるセシルのきよらかな顔が彼の前に現はれる。そして彼は一言物を言ふ、手足を僅かに動かす氣力も無くぐつたりしてゐるので、顛顛と手首で脈を搏つてゐる音、苦しげな呼吸、胸の奥から出る烈しい咳があたりの騒音、風とストーブの呼吸、鋪石をゆるがして通る乗合馬車の響、隣りの屋根裏の内職の軒のやうな音にまじつて聞えてゐるのだつた。

ヂヤツクの寢臺の傍でかうした話のとりかはされた翌日、前掛を粉だらけにして得意まはりから歸るなり昨夜の様子を聞きに室に這入つて來た麴麵配りの女は、幽霊のやうなひよる長い彼がちゃんと着物を着て火の前に立ちながら、ペリゼールと言ひ争つてゐるのを見て呆氣に取られてしまつた。

『どうしたのです？……まあ！ 貴方起きたりして！』

『どうしても起きると言つて聞かないのだ。』

行商人は途方にくれながら言つた『ノートル・ダムへ行くと言ふのだ』

『ノートル・ダムへ？……何をしにですの？……私達は此處でよく世話をし上げてあげないのですか？ 何か足りないのです？』

『何も、何も……貴方々は二人ともほんとに親切によくしてくれるのです。だが僕は之以上此處に居る

事は出来ない、どうしてもだ……僕が是非さうしたいのだ。』

『だが、そんなに弱つてゐて、どうしたらそんな事が出来るでせう？』

『おゝ！ 僕は少し弱つてゐる。だが歩かなければならない時は誰でも歩く。ペリゼールが腕を貸して呉れよばい。いつかナントで僕が今よりもふらくしてゐた時に、さうして歩かせてくれた事があ
る。』

かうしたきつぱりした意志の前に、人々はもはや躊躇する事が出来なかつた。チャツクはマダム・ペリゼールを抱擁した。そしてあんなにも楽しい夢にゆすぶられて、あの楽しい時を過した、そしてもはや再び見る事が出来ないと思つてゐたところの此の小さな室に悲しい無言の『さらば』を投げてから、商人に扶けられて階段を降りた。その頃中央事務所はノートル・ダムの正面にあつた、數階の石段を控へた陰氣らしい灰色の四角な建物だつた。十二月の低く垂れた重苦しい空の下で、病人は寢床の中に在る時よりも、より蒼ざめ、より痛々しく見えた。髪の毛は歩くために出た汗でびつしよりになつてゐた。黒い家も溝川も行商人とこの同伴者のいたましい二人連れに哀れを催してゐる通行人も、すべてが弱つた彼の眼の前でぐる／＼まはつてゐた。其處での生活はさながら戦闘に等しいこの惨忍な巴里に在つて彼等の様子は闘ひの間に仆れた負傷者を、自分の危険の分前を取りに行く前、一人の戦友が砲弾の下をかいくゞつて野戦病院へ連れて行くみたいに見えた。

彼等が事務所に着いた時はまだ早かつた。が廣い待合室は久しい前から大勢の人々に充たされてゐた

ので、彼等はパチ／＼と大きな音をさせてゐた大きな暖爐を圍んで木の腰掛の上にかけてゐた。其處には息苦しく重い眠りに誘ふやうな空氣が満ちてゐて、人々のすべて、往來の寒さを覚える事なしにこの暖い室に這入つて來た人達、奥の方の硝子戸の後で書物をしてゐる事務員、元氣のない風で暖爐に石炭をくべてゐる給仕を同じやうにくつたりさせた。チャツクがペリゼールの腕にすがつて這入つて行つた時、人々の視線は忌々しさうに又心配さうに彼の上にあつまつた。

「やれ／＼！ 又一人……」すべてがさう言つてゐるみたいだ。成程病院の建物はどこも満員なので、寢臺といふ寢臺はとても希望され、術策や喧嘩で以て手に入れようとされてゐたのだ。當局でも多大の努力をし、慈善の手は伸びたが駄目だ。いつも收容する場所より病人の數の方が多かつた。何故なら此の惨酷な巴里は不道徳と貧乏、それからこの二つの苦痛の要素が經緯となつて種々に錯綜したあらゆる事件の助けを假りて各種の病苦を作り出し、異常なのや、想像も及ばないのや、複雑なのや、ありとあらゆる夫を工夫しようとしてゐるのだ。そのお手際の多くの標本がこの聖堂區の廣間のきたならしい寢臺の上にあつたまじげに横はつてゐたのだ。這入つて來るにしたがつて二通りに分けられた。一方は負傷者で、工場の車輪や、蒸氣機關の齒車、染織工場の酸が手足を挽ぎ取り、盲目にし、顔を傷けたの、片方は熱病や、貧血者や、肺病患者で手足を震はしてゐたり、眼を繃帯してゐたり、それから胸を裂くやうなオーケストラの樂器の集合とでもいふみたいな腹れたのや、甲高いのや種々な咳の聲、それに何といふ襤褸着物、何といふ靴、帽子、提籠！ 一層いたましかつたのは、之等の不幸な人々の大部分はチ

クツヤ
チャックと同じやうに足を引摺るやうにして歩いて來たので、靴の裂目は泥でつまり、さがつた襪は泥水でびつしよりに濡れてゐた事だ。皆はとても不安な氣で醫者の診察を待つてゐた、それに依つて病院に這入れるか這入れないか決まるのだ。それで彼等はお互に銘々の病氣に就いて語り合ひながらわざと大袈裟に言つたり、お互に自分の病氣が他の者のより重いのだと思はせようと骨を折つてゐる事と言つたら。チャックはひどい咳をする菊石面の肥つた男と、黒いシヨールで、影のうすい體と細長い顔、

鼻や唇がそれは小さく、それは蒼ざめてゐるので、間も無い臨終の幻覺に今から大きく腫つてゐるやうな眼だけが生きてゐるみたいに見える細長い顔をつゝんだ可哀想な若い女の間腰にかけて、かうしたいたましい會話を聞いてゐた。頭をつゝんだ一人の老婆が籠を抱へて、このやうな熱病者や瀕死者に食べられさうも無い埃まみれのパンやビスケットをすゝめてゐたが、誰一人買手が無しに何時迄も無言で歩き續けてゐる。やうやくの事で戸があいて神經質らしい瘦せた小男が現はれた。

醫者だ！

194
直きと腰掛の上はひつそり静まりかへつて咳の聲が倍高まり、ぐつたりした様子が一層あらはになつた。かじかんだ指をストロブであたゝめながら醫者は學者らしいきつぱりと見透すやうな眼でまはりに居る病人達を観察し、酔ばらひや、不純な連中を心配させた。次ぎに彼は室を廻りはじめ、後から給仕が諸方の病院の入院券を渡して歩いた。慈善病院に這入る資格があると言はれた時のこの薄倅者の喜びと言つたら！ 夫ほどには悪くないと宣告された時の失望と歎願は！ 診察は簡單で少し亂暴だ。何故な

ら人數は多いし、それに貧乏人達は醫師にしてもどうしやうも無いのいろ／＼さま／＼な話や出來事に結びつけて自分達の病氣の事を喋るわ、喋るわ、際根が無いのだ。人々は名前や住所を言ふのにさへ間違付くやうなかうした民衆の無智、愚鈍、無邪氣さをとても想像する事が出來ないだらう。彼等は絶えず自分達の身に危険が及びはしないかを恐れてゐるので、臆病のあまりに何でも無い事にまでいゝ加減を言ふのだつた。

『此度は夫人、貴女は何處が悪いのです？』

醫師が十二ばかりの男の子を傍に連れた一人の女に訊ねた。

『私ではありません、貴方、息子です。』

『それで、貴女の息子は何處が悪いのですか？ さあ、早くして下さい。』

『あの子は豊なのですよ、貴方……それはあの、お話しますが……』

『あゝ！ 豊かね？……でどちらの耳が？』

『おもに兩方ですよ、貴方。』

『何、おもに？』

『さうですよ、貴方……さあ、エドワール、人に物を言はれたら立つものだよ……お前どつちの耳が聞えないの？』

彼女は立たせようと小突きながら子供に言つた。